

390.4  
H54



1

0055488-000

390.4-H54ウ

無敵陸軍魂

日比谷与志雄・著

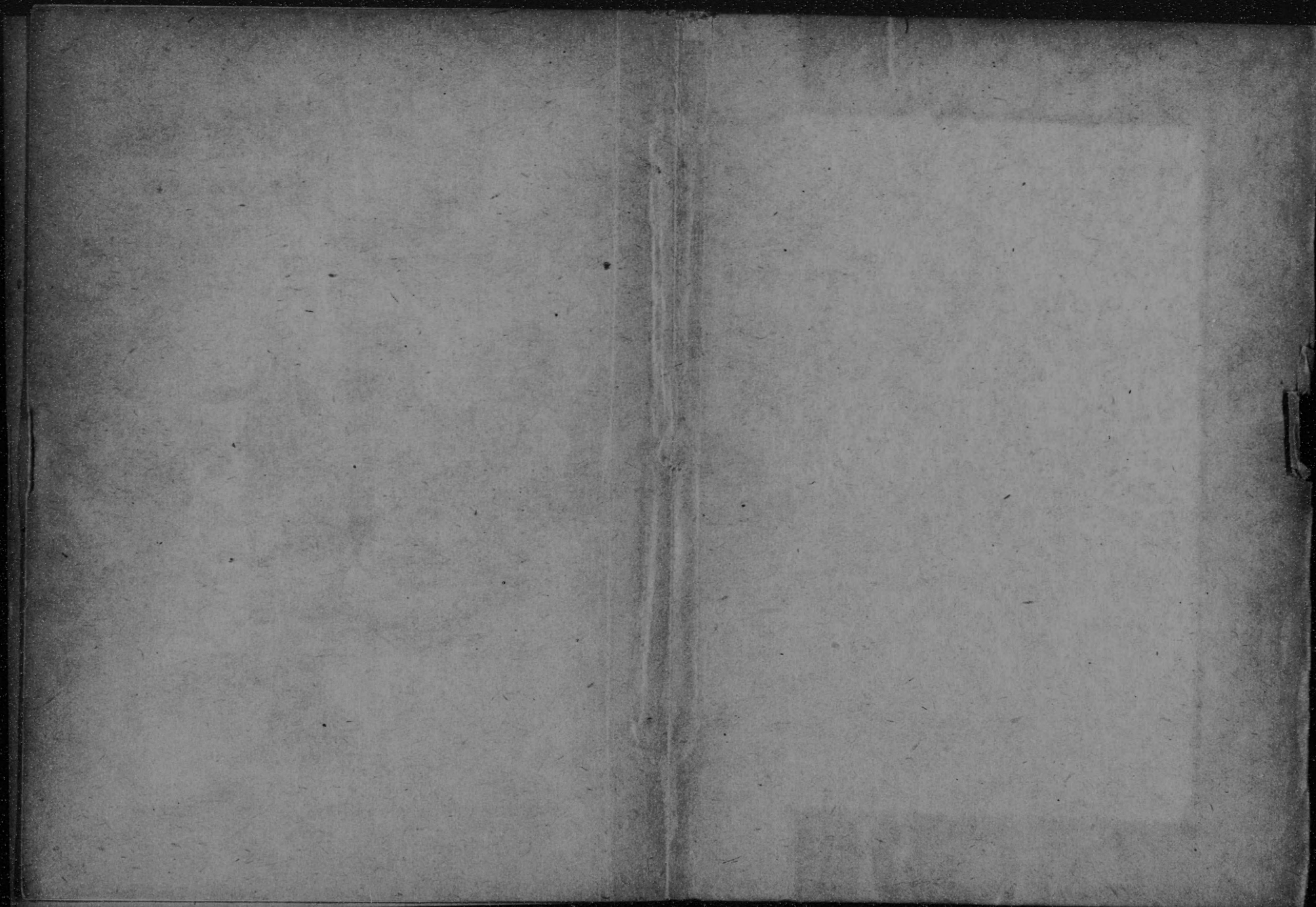
大新社

昭和17

AJA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年3月2日  
けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

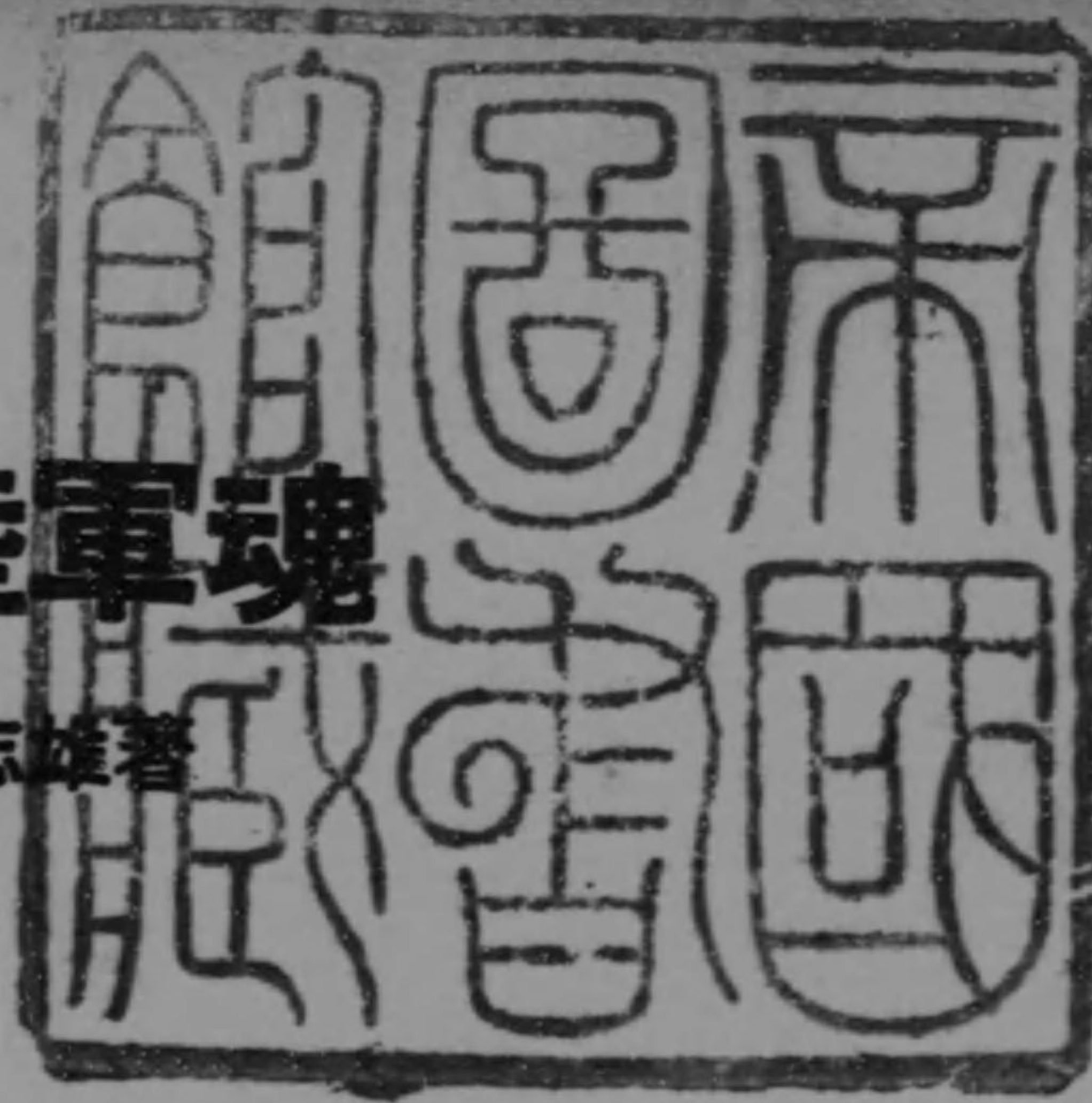




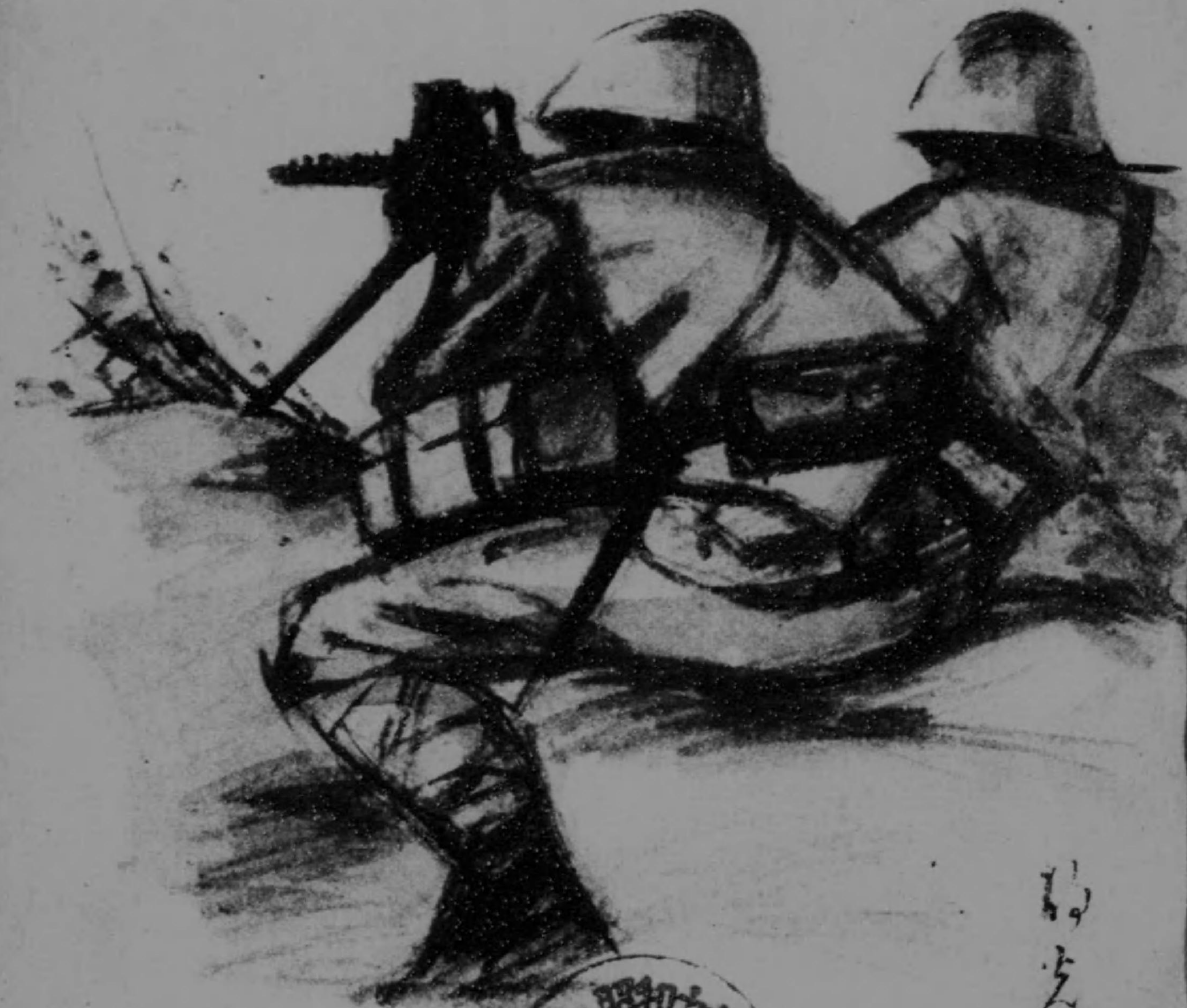


# 無敵・陸軍魂

日比谷與志雄著



390.4  
H54



日比谷





932

92

## 序

世界の歴史は、今や我々の眼前に於て書き改められつゝある。世界地圖の色は時々刻々に染め變へられて行く。

大御稜威の下に發揮される皇國日本の、底知れぬ偉大な武力によつて、腐敗と墮落と、矛盾と罪惡とに満ちた舊世界は、清新にして純美なる道義世界へと、さまざま勢ひを以て變貌しつゝあるのである。

人口の多寡、生産力の大小、軍裝備の優劣等の諸點に至つては、或は皇國を凌駕するものなしとしないかも知れない。而も 聖諭のまにまに、義は泰山よりも重く、死は鴻毛よりも軽しとする我が皇軍魂に至つては、世界に國多しと雖も、斷じて他にその比を見ないのである。

皇軍魂は、素より一億同胞が、遠く祖先より傳承せる大和魂の、最も純粹精美



なるものに外ならぬのであるが、これが、現に世界を驚倒せしめつゝある如く、美事に効果的に發露されるまでには、その淵源する處極めて遠く、その鍊成、訓育には血みどろの苦心と努力と、幾多先輩の尊い犠牲とが、拂はれて來たことを看過してはならぬ。

本書は、わが陸軍魂の淵源する處から、その鍊成、戰場に於て發揚された實例等に亘り、これを各方面に亘つて、詳細に検討し、且つ紹介せんと試みたものであつて、戦時下、國民士氣の昂揚に、聊かなりとも貢獻する處があるならば、著者の本懐これに過ぎたるはないのである。

昭和十七年七月七日、事變五周年を迎へて

著 者

# 目次

## 第一 皇國陸軍の本質

死は鴻毛よりも輕し……………二

神典に現はれた尙武の精神……………四

一、天沼矛と 天照大御神の御教訓……………四

二、三種の神器中の御劍……………八

國史に現れた皇軍の本質……………三

一、神武天皇の御東征……………三

    狀勢樂觀を許さず 皇軍の使命茲に確立 神武天皇御詔勅の御教訓

二、四道將軍と日本武尊の宣撫、教化……………二七

三、神功皇后、神兵を率ゐ給ふ……………二九

明治維新後の皇軍再建……………三四



一、畏し 明治天皇の御決意……………三四

近代兵制の萌芽 海軍は朝廷で、陸軍は各藩で

二、大村、山縣の功績……………三元

三、徴兵令制定さる……………四一

四、軍人勅諭 下賜……………四五

軍人への深厚なる御信任 陸海軍擴張の勅諭 日清戦争とその後の軍備充實

皇軍の特色と獨特の軍隊教育……………五四

一、皇軍獨特の勇武の源泉……………五五

二、勅諭を奉體する道德的存在……………五七

三、徹底せる精神教育……………六〇

四、階級統制と上下和親……………六二

### 第二 皇軍獨特の戦法と訓練

敵前上陸と渡河作戦……………六六

一、皇軍精神の眞骨頂……………六六

二、コタバル敵前上陸……………六九

砂の中から跣足のまゝの突撃 不可能を決行した佐美部隊

三、敵前上陸と工兵魂……………七六

壯烈無比・要塞攻略戦……………八二

一、近代的大要塞の編成……………八二

二、要塞攻撃の種類……………八七

三、シンガポール攻略戦……………九二

四、奇略縦横「陽動戦術」の妙……………八九

機動作戦の威力……………一〇三

一、マレー作戦の機動力……………一〇三

二、立體、舟艇・山岳各機動……………一〇九

三、マレー作戦第一主義……………一一三

四、敵は分散、味方は集中……………一二六

皇軍獨特の「夜襲」……………一二〇



- 一、日本戦史に無数の快勝……………二〇
- 二、實戦より辛い猛訓練……………二三
- 陸鷲、得意の渡洋爆撃……………二五
- 一、初舞臺にこの大戦果……………二五
- 二、惡條件を無視した敢闘……………二六
- 重爆隊の「去我就義」精神……………
- 落下傘部隊、決死の訓練……………二七
- 一、全滅の恐れ多き部隊……………二七
- 二、先づ一日六時間の猛體操……………二八
- 三、親兄弟にも言へぬ辛さ……………二九

### 第三 戰場に現れた陸軍魂

- 熾烈なる攻撃精神……………二九
- 一、「七生滅賊」の崇高な忠節心……………二九
- 肺が飛び出し乍ら任務遂行……………

二、義は重く死は輕し……………二五

肉弾を以て拓く「死の突撃路」 〓 肉弾で押倒す敵戦車

三、攻撃精神を鈍らすもの……………二九

半身切れ飛び乍ら歸還した荒鷲

四、平素から着實温和なる者は、戰場に於てよく旺盛なる攻撃精神を發露す……………二九

下半身を粉碎されなほ前進を焦る 〓 敵戦車を吹き飛ばした優さ男

五、武技に熟練せるものは攻撃精神旺盛……………二六

自轉車で追跡、敵廿數人を刺殺す 〓 剛勇隊長廿六人斬り

六、團結鞏固なる軍隊の攻撃精神……………二七

全滅するまで攻撃精神を捨てず

七、難境における攻撃精神と平素の訓練……………二七

吾等は斯く廟巷鎮に突入せり

八、勇敢なる一兵、一指揮官の攻撃精神の發露はよく全隊の士氣を振起す……………二九

敵戦車に爆彈體當り・一等兵の勇進全隊をふるひ起す 〓 隊長先頭に敵陣へ突入



|| 軍神橋中佐の再來・東部隊長

九、超人的攻撃は「上官への弔合戦」「戦友の仇」……………二〇三

戦友の仇・魂籠る最後の一弾

必勝の信念の力……………二〇七

一、必ず勝つといふ優越観念……………二〇七

三十倍の敵に包圍され乍ら敵撃退の報告文

二、勝たねばならぬといふ責任感……………二〇六

上海攻略戦の華・加納部隊の奮戦

三、「一死以て任務に斃るゝのみ」の殉忠観念……………二〇三

僅か十餘の戦車で一ヶ師の敵中突破||不時着の身で敵三機と死闘、二機を撃墜

強烈なる責任観念……………二〇八

一、戦ひの勝敗は將兵の責任観念の強弱による……………二〇八

二、旺盛な責任観念は人間業を神業に移す……………二〇一

一死以て三百の敵襲を防止した歩哨||下半身血に染めて戦友の遺骸と糧秣を死

守||注射器振り患者を庇つて戦死||昭和の木口小平「死の突撃ラツバ」

三、將兵一體の軍隊家庭教育は上下の責任観念を強める……………二五四

六人の斥候兵・生還僅か一名||死線に闘ふ「空の血達磨斥候」||河原道ふ血の

傳令、火の如き責任感||叩き終つた最後の一字に笑つて絶命||死してなほ電線

を守る||軍旗を早く安全にせよ、俺のことは構ふな

機宜を得たる獨斷専行……………二七三

一、透徹した責任観念と熟慮斷行……………二七三

二、獨斷専行に現れた陸軍魂……………二七五

獨斷専行よく激戦に参加し敵陣地に突入||敵前の獨斷||電話一本で英領北ボルネオ

西部無血占領

挺身的殉忠の精神……………二八三

一、自己を空しうするところに絶大の力湧く……………二八三

單身踏み止つて衆敵を防ぎ友軍を危地より救ふ||頭髮を切つて決死爆破作業を

申出る||己が身を銃臺として敵戦車を牽制

二、全部隊一隊となつての挺身的行爲……………二九八



地爆決死の白濁二十勇士 沈む橋桁に入柱の崇高な姿 轉びつ縊りつ應射  
する「最後の砲隊」

沈着剛毅、よく敵を壓す……………三二一

一、徹底せる死生観が必要……………三二一

口をもぎ取られ乍ら敵前で機銃修理 敵隊長に一撃、四名で七百名生捕る 素  
ツ裸で敵を睨み倒す 不時着の陸鷲、敵戦車を生捕る

二、沈着は必然に剛毅を伴ふ……………三三三

射抜かれた眼玉をもぎ取つて猛進 兩手動かず、兩眼見えず、心眼で敵を斬る

名譽心と廉恥心……………三三九

一、恥を知る心の尊さ……………三三九

悲壯な空閑少佐の最期 日本男子の死方は斯うだ」と全員割腹 敵の重圍下  
舌かみ切つて散る少年戦車兵 白刃の包圍に自若、自決の少年航空兵

二、積極的な名譽心……………三五〇

「少しは名譽を恢復し得た、これで満足」と瞑目

敬上・恵下軍隊は大家庭……………三五五

一、將兵一體の家族的結合と敬上……………三五五

身を楯に部隊長を守る人模 隊長機を救出、愛機と共に散る

二、恵下精神の發露……………三六四

戦功を部下に譲り死に臨むもなほ一言私事に及ばず

三、美しき戦友愛……………三七二

母の手紙・戦友の手でリレー進撃

兵器の尊重……………三七六

一、兵器は軍人魂の象徴なり……………三七七

二、戦場に現れた兵器尊重……………三七九

武人有情……………三八〇

一、敵兵をいたはる日本武士道……………三八〇

二、軍用馬、軍用犬の愛護精神……………三八五

忠孝兩全と靖國の神靈……………三八七

一、日本國民道德の粹「忠孝兩全」……………三八七



二、孝道と祭祀と靖國神社……………

老父の手紙に泣く親鸞、若鸞の遺骨抱いて爆撃行



皇國陸軍の本質



## 死は鴻毛よりも軽し

大東亞戦争に發揮された皇國日本の素晴らしい武力こそは、文字通り、米英等の敵國側は勿論、全世界を擧げて驚倒せしめるに至つた。

空に、陸に、海に、わが精銳なる皇軍の征くところ、戦つて勝たざるなく、攻めて取らざるなく、作戰用兵の至妙と、將兵の勇武敢闘と相俟つて、日本國民さへも呆氣に取られる程の威力を示し、寔に史上空前の大戦果を擧げつゝあることは、我等の感激措く能はざる處である。

今や世界は、皇國のこの底知れぬ強大な武力を根幹として、有史以來未曾有の大規模なる轉換を行ひつゝある。新しき力、新しき理念、新しき道義の世界へと、われ／＼の眼前に於て凄じい變貌を遂げつゝある。

然らばこの、世界の一大驚異である皇軍の強さは、一體何處から來てゐるので

あらうか。人口又は將兵の多きが爲か、その裝備の優れたるが故か、戦車、飛行機、火砲、戦艦等の武器、軍需品の勝れるが爲か、或ひは生産力の素晴らしさに因るか。これら諸要素の優秀、豊富なることの必要は、謂ふまでもあるまい。併し乍らその何れにも増して最大の原因は、一に萬世一系、天壤無窮の皇祚を踐み給ふ天津日嗣のすめらみこと、明津御神にまします 天皇陛下の大御稜威によるのであつて、この大御稜威の下、海ゆかばみづく屍、山ゆかば草むす屍 大君の邊にこそ死なめかへりみはせじ、の古歌をそのまゝに、 天皇陛下萬歳を奉唱して喜んで死んで行く皇軍將兵の軍人魂、これこそが、皇軍をして、その勇武世界に比なきものたらしめてゐるのである。

等しく 大君のために大義のために、死を鴻毛よりも軽しとする軍人魂ではあるが、これが陸軍々人によつて發揮される場合には陸軍魂となり、海軍によつて顯現される場合には海軍魂となるのであつて、何れも、一億同胞の悉くが所有する大和魂の最も純化され、最も華々しき形に於て發揮されたものに外ならぬ。



以下、聊かわが「陸軍魂」成長のあとを、遠く建國の昔に遡つて考究し、明治維新と共に建設された皇國近代陸軍その後の發達變遷を辿り、爾來何回かの華々しき戰爭に當つて發揮された數多の實例によつて、わが陸軍魂の眞髓に觸れて見たいと思ふ。

### 神典に現れた尙武の精神

#### 一、天沼矛と天照大御神の御教訓

「夫れ武勇は我が國にては、古よりいと貴へる所」とは、畏くも 明治天皇の軍人に賜はつた勅諭に於て仰せられたところであるが、寔に日本民族は、古來、武を尙ぶを以て傳統的精神として來た。

古事記の劈頭に、

是に天神 諸の命以て、伊邪那岐命、伊邪那美命二柱の神に、是のたゞよへる國を修理固成せと詔ちて、天沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。

とある如く、天地創造の初めに於て、修理固成の天業を全うするために、早くも先づ矛の必要が強調されてゐるのである。矛といふのは、神武紀に細戈なる語があるやうに、靈妙正美なる武器といふ意味であると言はれてゐるが、矛に對してこのやうな禮讚の形容語を用ひてゐることによつても、われらの祖先が、武器を如何に尊んでゐたか、窺はれるのである。

次いで須佐之男命が、伊邪那岐命の

「汝が命は海原を知せ」

と事依さしたまうたにも拘らず、これに背いて、神やらひにやらはれ、

「然らば 天照大御神に請して罷りなむ」

と天に參上ります時に、山川悉に動み、國土皆震つたので 天照大御神は

「我が那勢命の上り來ます由は必ず善しき心ならじ。我が國を奪はむと欲すに



こそ」

と詔りたまひて、即ち御髪を解き、御美豆羅に纏かして、左右の御美豆羅にも、御鬘にも、左右の御手にも、各八尺勾璉之五百津之美須麻流之珠を纏き持たして曾毘良には千入之鞆を負ひ、五百入之鞆を付け、亦臂には伊都之竹鞆を佩ばして弓腹振り立て、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪如す躡る散かして、伊都之男建踏み建びて、待ちたまひ

「何故上り來ませる」

と問ひたまうたのである。これだけの、古事記に現れた極めて簡潔な記述の中にも、正を踏んで何物をも怖れず、威風凜々として四邊を拂ふ 大御神の颯爽たる御雄姿が彷彿されるではないか。

その後、天照大御神は、須佐之男命の、度重なる粗暴な御振舞を憤らせられ天岩屋戸に隠れさせ給うたのであるが、須佐之男命が肥河上に於て八俣遠呂智を退治し給ひ、その尾から獲た草那藝之太刀を献上されるに及んで、初めて御怒り

が解けたのである。

即ち 天照大御神は、血氣にはやり、粗暴の振舞をする小勇を惡み給うたが、義理を辨へ、武職を盡した大勇は、大いにこれを御嘉賞遊ばされたものと拜察し奉るのである。

また、大國主命が國土を奉還される前にも 天照大御神は、飽くまで平和的解決を御希望遊ばされ、天菩比神、天若日子、雉名鳴女と、平和的な御使を度々御派遣遊ばされたが何れも効果がなかつたので、最後に止むなく武力解決の外なきことを御決意遊ばされ、建御雷神、並に天鳥船神を御差遣になつた。

建御雷神は、大國主神の子建御名方神と力競べをし、これを武力によつて征服したので、遂に國土奉還の大事が順調に運んだのである。即ち正しき目的のため必要とあらば、進んで武力をも用ひ給ふことを、天照大御神御躬ら教へ給うたものと拜察されるのである。



二、三種の神器中の御鏡

更に特筆すべきは 天照大御神が、畏くも我が皇道の神護とし、經國の大方針を御示現遊ばされ、皇孫にお授けになつた三種の神器の中の一つが劍であつたことである。鏡は公明正大を象徴し、勾玉は仁慈博愛を意味し、劍は武勇、斷行を表明するものと解釋され、此の三者は積慶(仁慈)、重暉(叡智)、養正(正義)の三大道を表徴したものであるとも謂はれ、或はまた鏡は 天照大御神の和魂を奉齋する神器で太陽を象つたものであり、玉は 大御神の幸魂、奇魂をお祀りしたもので萬邦協和、統一の神徳を有し、劍は同じく荒魂をお祀りした神器であつて、剛勇無双の須佐之男命さへ一溜りもなく平伏する大威神力を有するものであるとも説かれてゐるが、何れにしても、この劍が神武の徳を具へたものであることは議論の餘地があるまいと思ふ。

明治天皇が軍人に下し賜はつた勅諭は長くもこの神劍に宿り給ふ 天照大御神

の荒魂の御神徳を、五箇條に要説し給へるものであつて、皇軍、神兵、神武不殺の神徳を賜はる道、悉く具足し、ために皇軍の魂魄となれるものと拜察し奉るのである。

日本人と違つて、支那人は古來、武を蔑視してきた。それは彼等の「武」に理想がないからである。史記には

「兵は凶器なり」

とあり、老子には

「兵は不祥の器、君子の器にあらず」

と記され、また

「よい鐵は釘にならず、よい人間は軍人にならぬ」といふ諺もある。

日本では、士農工商と云つて、武士が四民の上にあつたが、支那では、軍人は四民中の最下位に置かれてゐた。



また支那に於ける最高の兵法書といはれる孫子さへ

「兵は詭道なり」

と云つてをり、武といふものを飽くまで詭道であり、邪道であるとして見てゐるのであるが、これと反對に、日本では戦術、軍略さへも神謀、神策でなければならぬものと考へられてゐるのである。

天武天皇は、

「凡そ政の要は軍事なり」

と宣はせられたが、日本に於て古來「武」を尙んで來たのは、日本の「武」が邪道でも、また詭道でもなく、養正神武そのものだからである。「神武」、「聖武」などの言葉から見ても、日本民族が古來如何に武を神聖視して來たか判るではないか。

随つて武器、殊に刀劍は、日本人の生命として尊重して來たもので、刀工は、百工中の最上席に置かれ、その技術もまた、神技として尊ばれ、刀劍の製作には

齋戒沐浴してこれに當るのが古くからの習慣であつた。刀劍の製作は、實に神に對する行事であり、神事であつた。この神聖な刀劍製作技術の中でも、最も神秘的とされてゐる火渡の氣合の如きは、全く敬神崇祖の熱誠から來る神靈的現象であつて、神人一體、正に日本精神の極致であると謂はれてゐる。

香取神宮の祭神である軍神、經津主神は、別名を齋主神と申し上げる。即ち日本では、武も亦、神を祭ることに出發してゐるのである。それでは齋主神とはどういふ意義を有するかと云へば、

「いはひの義は、齋み慎み、神をまつり、正を踐み威を示して、葦原中つ國を定めたまへる神」

といふことであると説かれてゐるが、實に齋み慎み、神をまつり、正をふみ、威を示すことが、神軍、神武の本質なのである。

日本書紀卷一、寶劍出現の條に、

素盞鳴尊の曰はく、是れ神劍なり。吾何にぞ敢へて私に安かむとのたまひ



て乃ち天神のみもとに上<sup>たてまつり</sup>献<sup>けん</sup>ぐ。

とあるが、神劍とは神武を表徴した言葉であり、神聖なる御劍は、私情や、個人の利益のために用ひてはならぬものであることを意味したものの、即ち皇軍に私兵なきことを教へたまうたものに外ならぬのである。

### 國史に現れた皇軍の本質

#### 一、神武天皇の御東征

我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある昔神武天皇躬つから大伴物部の兵ともを率る中國のまつろはもぬのともを討ち平け給ひ高御座に即かせられて天下しろしめ給ひしより二千五百有餘年を経ぬ

明治天皇が、軍人に下し賜はつた勅諭中に述べさせられてゐる如く 神武天皇

は、天業恢弘の御思召から、畏くも皇師を起して、普ねくまつろはぬものどもを御親征あらせられた。此の皇師の鴻業こそは、公明正大、仁愛涯りなき皇徳を武勇によつて實現されたものであつて、皇軍の淵源、實に此處に存するのである。

神武天皇は鸕鷀草葺不合尊の第四皇子であらせられたが、天性剛健で且つ思慮に富ませられてゐたので御年十五歳の御時、選ばれて皇儲となり、父君崩御の後を繼がせ給うたのである。皇居の地は、現今宮崎市の北端にある宮崎神宮の西北方と傳へられてゐる。

御年五十四歳の時、皇兄方、皇子方をお集めになつて

鹽土老翁に聞きしに、東に美地有り、青山四に周れり。其の中に亦天磐船に乗りて飛び降れる者有りと曰へり。余謂ふに彼の地は、必ず天業を恢弘べて、天下に光宅るに足りぬべし。蓋し六合の中心か。厥の飛び降れる者は、謂ふに是れ饒速日ならむ。何で就きて都らざらむや。

と仰せられたところ、諸皇子對へて



理、實に灼然なり。我も亦恒に念と爲つ。宜べ早に行したまへ

と曰された。かくて衆議一決、天皇は皇兄五瀬命を初め各皇族方、天種子命、天富命、日臣命の率ゐる大久米部らを率ひ給ひて高千穂宮を進發せられ、陸路北に進み、日向國美々津港に着かせられ、此地から舟船の便をとつて大和地方平定の途に上らせられたのである。

かくて御船隊は今の豊豫海峡を通過、宇佐（豊前國）に御到着、一時御逗留、再び航行を繼續せられ、築紫の崗水門（遠賀川河口）に御着船、一時御滞留、更に安藝國に御上陸、埃宮と稱する行宮を、今の廣島縣府中に御造營、三ヶ月間御滞在遊ばされた。美々津港御出發は紀元前七年十月五日であつたが、安藝國御上陸は同年十二月二十七日であつた。

翌年、即ち紀元前六年三月六日、御一行は吉備國に御到着、同地に三年間御滞在、その間に船舶、船具、糧食等一切の作戰準備を整へさせられ、紀元前三年二月十一日、舳艫相啣んで吉備國高島宮御進發、三月十日、浪速、即ち今の大阪に

御到着遊ばされた。

それより御一行は淀川を遡航され、河内國草香邑白肩の津、即ち今の大阪府中河内郡孔舎衙村附近の盾津に御上陸遊ばされた。（今の枚方町附近に御上陸遊ばされたといふ説もある）。全軍は四月九日、徒歩で大和川に沿つた山路を辿つて龍田山に向つたが、餘りに道が狭小なものと急峻であるため、轉じて生駒山脈を越えて大和國に向つたのである。

當時、大和國には鳥見の魁帥、長髓彦なる者らがをり、瓊々杵尊の長兄火明命の子孫である饒速日命を奉じて生駒郡鳥見の地を領し、また自ら層富、磯城の二郡をも管し、生駒山の東麓に居を占め、大和地方に威を振つてゐた。

梟雄長髓彦は、皇軍の進撃を知るや、急遽大軍を率ゐて孔舎衙坂に進出、皇軍善戦したが、戦ひ利あらず、非常な御苦戦に陥り、御痛はしくも皇兄五瀬命は肱と脛とに賊の矢を受け給うた。此處に於て全軍、一先づ草香邑まで退却することになつた。



かくて作戦計畫を變更した皇軍は、大和附近にある敵を東方より攻撃するため南紀方面に上陸すべく、南方に向つて再び航行を續けたのであるが、茅渟山城の水門を過ぎる頃から五瀬命の御痛み劇しく、五月八日、紀伊國雄の水門、即ち今の和歌山附近に御上陸、此處で遂に薨去せられたのである。

それより皇軍は東方名草邑に赴き、會長名草戸部を討伐、熊野から再び海路御東進、熊野灘に入つたが、暴風のため非常な難航で、皇兄稻氷命は海中に陥り給ひ、皇兄三毛入野命も風のため流され給うた。そこで、天皇は一時、東南岸新宮附近に御避難あらせられたのであるが、聽て風も静まつたので御一行は更に東航を續けられ、熊野の荒坂の津、今の錦浦に御上陸になつた。

錦浦附近には丹敷戸部と稱する土酋がゐて、抵抗したので、皇軍は之を討伐せんとしたが、意外に頑強であつてなかく目的を達することが出来なかつた。この時、土地の豪族に高倉下なるものあり、曾て武甕槌神の用ひ給うた「布都御魂」と稱する劍を献じたので、その神徳によつて皇軍は忽ち賊を平定することが出来

たと傳へられてゐる。

それから皇軍は高見峠を越えて大和國に入らうとしたが、山嶮しくして道なく進退に憚める折から八咫鳥なるものが日臣命の嚮導をなしたので、無事に一行は大和國の菟田下縣に到着することが出来た。

菟田の附近に蟠踞してゐた土酋に兄猾、弟猾といふものがあつた。天皇は、此の兩人をお召しになつたところ、弟猾は性善良であつて、直ちに召命を畏み應ずると共に、兄猾が、新宮を造營して天皇を招き奉り陷穽によつて弑し奉らんとする陰謀を企てゝゐることを密告した。よつて天皇は兄猾を新宮に入らしめられたところ、自らの陷穽のため彼は壓死を遂げてしまつた。

### 情勢樂觀を許さず

吉野地方の巡撫を終へさせられた天皇は、九月十六日、菟田の東方の高倉山、今の高見山に登らせられ四圍の情勢を御展望になつた。この時北の方、國見丘に



は八十梟帥が城を構へ、その西南墨坂には炭火を焚いて大兵の屯してゐる状が見受けられた。女坂には女軍、男坂には男子軍が配置され、その外磐余には兄磯城の諸黨が屯してをり、何れの陣地も相當堅固で、樂觀を許さないものがあつた。そこで天皇は、十月一日、諸神を丹生川上の地、今の吉野郡小川村に祭らせられ、諸軍を率ゐて御出發、先づ國見丘の八十梟帥を御討伐になり、その殘黨は大久米部の兵を率ゐた道臣命をして忍坂に殲滅せしめられ、御躬らは磯城彦の討伐にお掛りになつた。

十月七日、先づ使を遣して兄磯城を召されたところ、御命を奉じなかつたが、弟磯城は召命を畏み、兄磯城が戦備を整へてゐる旨を密告した。天皇は諸雄を會して、對策をお諮りになつた。諸雄は

「兄磯城は奸智に長じてをりますから弟磯城をしてよくその利害を説き示させ、なほ聽かない場合は、更に兄倉下並に弟倉下の兩人を遣して、懇諭せしめられたし」

と奉答した。天皇は此の意見を御採用になつて、その通り實行せしめられたが、兄磯城はどうしても御命を奉じない。この時、椎根津彦は

「一部の兵を忍坂に進めれば、賊は必ず全力を盡してこれに當るでありませう。その時、主力を擧げて墨坂の城砦を奪取せられますやう」と進言申し上げた。天皇は、その如く實行し給うた結果、墨坂の賊の根據地を占領し、更に忍坂の賊を夾撃し、兄磯城を御討取り遊ばされたのである。

### 皇軍の使命茲に確立

かくて、再び長髓彦と決戦をされることになつたが、過ぎにし日の御苦戦の有様、さては、皇兄五瀬命御薨去のことなどを御回顧遊ばされた天皇の御感慨如何ばかりであつたらうか。天皇は此の戦ひに際して、左の御製をお詠み遊ばされ、賊徒殲滅の強き御決意を表明されると共に、大いに士氣を鼓舞されたのである。

「みつみつし、くめのこらが、あはふには、かみらひとと、そのがもと、



そねめつなきて、うちてしやまむ」  
「みつみつし、くめのこらが、かきもとに、うるしはじかみ、くちびく、われはわすれず、うちてしやまむ」

十二月四日、戦ひは長髓彦の根據地である鳥見地方、即ち今の奈良の西方、富雄川沿岸附近で開始された。初め賊軍は、頑強に抵抗して、皇軍はなかくの苦戦であつたが、この時一天俄かに掻き曇り霰さへ降つて來たので、皇軍の苦戦、名状すべからざるものがあつた。

この時、忽然として金色の鴉一羽翔けり來つて、天皇の御弓弭に止つたが、その燦爛たる金色は電光の如く、爲めに賊軍は目が眩んで戦ふことが出來ず潰走した。此處に於て賊軍の擁立してゐた饒速日命は、神武天皇が眞の天皇に在すことを知り、長髓彦に諭して、その領土を差上げさせようとなされたが、遂に事理を辨へぬのでこれを殺害し、部下と共に天皇に降服されたのである。

かくて大和地方の討伐を終へさせられた天皇は、紀元前二年三月七日、大和國

畝傍山の東南樞原に皇都を奠め給ひ、左の如き奠都の詔勅を賜つたのである。

我東を征ちしより茲に六年になりぬ。皇天の威を頼りて凶徒就戮されぬ。邊土未だ清らず、餘妖尙ほ梗たりと雖も、中洲之地復風塵無し。誠に宜しく皇都を恢廓き、大壯を規摹るべし。而るに、今運此の屯蒙に屬ひ、民心朴素なり。巢に棲み穴に住む習俗惟れ常となれり。夫れ大人の制を立つる義必ず時に隨ふ。苟も民に利有らば、何にぞ聖造に妨はむ。且當に山林を披拂ひ、宮室を經營りて、恭みて寶位に臨み、以て元元を鎮め、上は則ち乾靈の國を授けたまひし德に答へ、下は則ち皇孫の正を養ひたまひし心を弘むべし。然て後に、六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇と爲むこと、亦可からずや。夫の畝傍山の東南樞原の地を觀れば、蓋し國の壤區か、可治之。

日本民族の使命たる八紘爲宇の大精神は、かくて、天皇の御詔勅によつて天下に宣言せられ、この聖業を扶け奉る皇軍の使命また此處に確立された。



## 神武天皇御詔勅の御教訓

右に述べた如く、神武天皇の大和地方御討平は、六年の長きに亘る極めて困難な御偉績であつたが、その御目的たるや、實に御奠都の御詔勅に述べさせられた如き御思召によるものであつて、寔に崇高限りないものであつた。

されば、神武天皇は征戰中と雖も常に敬神崇祖の實を擧げさせられ、報本反始の御精神を發揮させ給うたのであるが、賊徒平定に當つても常に宣撫を主とせられ、飽くまで抵抗し、まつろはぬものに對してのみ、止なく折伏行爲を採らせられたのである。その代り、一旦斷乎として武力行使に移られるや、如何なる困難に遭遇せられても決して挫折するが如きことなく、その目的を達せられるまでは敢然として武勇を揮はせられた。そして、神意に隨つての神兵であり、天兵であるから、戰鬪中に屢々天佑神助を戴かれ、光榮ある勝利を獲得されたのである。

我はこれ日神の子孫にして、日に向ひて虜を征つは、これ天道に逆れり、退

き還りて弱きことを示して、神祇を禮祭ひて、日神の威を背に負ひまつりて、影の隨に壓躡まむに若かず。如此らば、則ち曾て刃に血ぬらずして、虜、必ず自に敗れなむ

この詔は、孔舍衛の戦ひに際して下されたものであつて、神武天皇が、皇軍の本質をお訓へになつたものとして有名な詔である。即ち

「朕は日神、天照大御神の子孫であり、朕の率ゐる軍隊は神軍である。その神軍が、日の方に向つて矢を放ち、賊を討たうとしたのは、天道にもそむくことであつた。そこで一旦軍をまとめて退きさがり、皇軍が實は弱いものであるやうに見せかけて賊軍に油斷させ、且つ天神地祇をおまつりして神明の加護を祈願し、その上で改めて、神意のままに賊軍を討つことにしよう。さうすれば必ず天祖、即ち日神、天照大御神の御稜威によつて賊軍は滅び、武器を用ひないでも、ひとりでに賊の方から降服して来るやうになるであらう」と仰せられたのである。



この詔に拜される聖意は、次の如くいろ／＼の點に亘つてゐる。先づ第一に、  
 「朕は日の神の子孫であるから、朕の率ゐる軍隊は神軍、神兵である」  
 との強い御信念をお示しになり、随つて、神兵たる皇軍は、天の道にそむくやうなことをしてはならぬ、とお訓へになつてをられるのである。次に  
 「退き還りて弱きことを示し」  
 と、戦術、軍略の大切であることをお示しになつてをられる。日本書紀には、このことを

「乃ち神業を冲衿に運めたまひて」

と記してをり、また飯田武郷翁は、書紀通釋の中で

「この御言、實に神策と申すべきなり」

と述べてゐるが、皇國に於ては戦術、軍略さへも神策、神謀でなければならぬのである。その次には、皇軍は神軍であるから、戦ひに際しては神祇を禮祭しなければならぬといふことをお示しになつてをられる。神武天皇はこの勅を下さ

れる否や、直ちに御躬ら軍を率ゐて草香津に御幸せられ、そこで天神、地祇をおまつりになり、且つ盾を樹て、雄詔の神事を行はせられた。

天皇は、次いで國見丘の戦ひの前にも鄭重に神祇をおまつりになつてをられ鳥見の戦ひに際しても天神地祇をおまつられたが、この時金鵄の瑞祥があつたのである。それから大和平定の軍事行動が一段落を告げた時にも、天皇は天神、地祇をおまつりになり、區宇を安定むることを得たまうた旨を御奉告になつてゐる。

かやうに神武天皇は、つねに天神、地祇をおまつりになり、神意のまにまに御行動遊ばされてゐるのである。

「日神の威を背に負ひ」とは。天照大御神の御稜威を御借りして、その神威の光被によつて賊を打破ること、「影の隨に壓い躡まむ」とは、御神意を體し、神慮のまに／＼行動せねばならぬと仰せられたのである。

また神武天皇は、右の詔に於て

「即ち會て刃に血ぬらす」



と仰せられ、皇軍の平和愛好の精神をお示しになつてゐるが、神武不殺の精神こそは、實に皇軍の眞面目であつて、それだけにまた、一たび平國の神劍が鞘を離れた場合は、向ふところ敵なき強さを持つのであつて、神武天皇も、右御詔勅の最後に

「虜必ず自ら敗れなむ」

と、皇軍必勝の信念をお示しになつてゐるのである。皇軍必勝の信念の淵源亦實に遠しと云ふべきである。

實に皇軍こそは、現人神であらせられる、天皇御親率の天兵であり、神兵であり神軍である。わが皇軍の統帥が、天皇の御一元に歸し一切の命令服従の關係が大元帥陛下を中心とし奉るといふ、世界に類例のない誇りを持つばかりでなく、海ゆかばみづく屍、山ゆかば草むす屍、一身を鴻毛の輕きに比し、天皇陛下萬歳を叫んで、従容として死に就くことを、日本の軍人は、最高の名譽としてゐるのである。

第一代の天皇を、神武天皇と申し上げることは、尙武の國日本として、寔に意義深いことではないか。

## 二、四道將軍と日本武尊の宣撫、教化

崇神天皇の十年秋、所謂四道將軍を四方に派遣されたが、その時の御詔勅には、民を導く本は教化に在り。今、既に神祇を禮ひて、災害皆耗きぬ。然るに、遠荒人等、猶ほ正朔を受けず。是れ未だ王化に習はざるのみ。其れ群卿を選びて、四方に遣して朕が憲を知らしめよ

とあり、大彥命以下四將軍の出發に際し、改めて、若し教を受けざる者有らば、乃ち兵を擧げて伐てと仰せられた。即ちこれに見ても、決して征討が目的ではなく、あくまで宣撫、教化が主であることが判る。萬止むを得ざる場合にのみ、初めて軍事行動が許されるのである。神武不殺の精神が、此處にも明瞭に示顯されてゐる。



また 景行天皇が、御子日本武尊に東夷を伐たせたまうた時の詔を拜しても  
 「願はくは深く謀り遠く慮りて、姦を探り變を伺ひて、之に示すに威を以てし  
 之を懐くるに徳を以てし、兵甲を煩はさずして、自ら臣隸せしめよ」  
 と仰せられてゐる。見よ、恩を忘れ怨を報い、毛を衣、血をのむ、獸のやうに野  
 蕃な、當時の東夷に對してさへ、なほ飽くまで平和を旨とし給ふ廣大無邊の大御  
 心の發露ではないか。

これに對して、日本武尊が天皇にお答へになつたお言葉が、また實に堂々たる  
 ものであつた。即ち尊は、天皇から斧鉞（古事記によれば比々羅木之八尋矛）を  
 賜はり、再拜して、次のやうに奉答されてゐる。

「嘗て西を征ちし年、皇靈の威に頼り、三尺の劍を提げて熊襲國を撃ちしに、  
 未だ決辰も經ず、賊首罪に伏しぬ。いま亦神祇の靈に頼り、天皇の威を借りて  
 往きて其の境に臨まむとす。示すに徳教を以てすべきも、猶ほ服はざること有  
 らば、兵を擧げてこれを撃たむ」

即ち 神武天皇が「吾必ず鋒刃の威を假らず、坐ながらにして天下を平げむ」  
 と仰せられたのと全く同じ御趣意であつて、未開狂暴の蝦夷に對してすら、先づ  
 徳教をもつて之を導かうとせられたのである。

日本武尊の御一生が、恰ら神謀、沈勇、献身の化身の如くであつたことは、世  
 間周知の通であるが、その英雄的御生涯を能褒野に於て終へさせられんとする  
 時、宮簀姫の許に預けて置かれた草薙劍のことを御懸念遊ばされ、御臨終に際し  
 て

「をとめの、とこのべに、わがおきし、つるぎたち、そのたちはや」  
 と詠まれたまゝ、薨去遊ばされたのであつて、その責任感のお強くあらせられたこ  
 とは拜察するに餘りがある。

### 三、神功皇后、神兵を率ゐ給ふ

神功皇后の三韓征伐に於ても、わが皇軍の堂々たる威容を窺ふことが出来やう。



仲哀天皇の八年に、熊襲再度の叛亂があつた。その御討伐中に、九年二月、天皇は檀日宮（今の福岡市の北方約二里）に於て崩御あらせられた。皇后は武内宿禰と謀り給うて、天皇の御喪を秘し、熊襲の討伐は鴨別をして當らしめ、御親らは、熊襲の後楯として之を使喚せる新羅を征討せられることになつたのである。皇后は、天皇崩御の年の四月、御懷胎中なるにも拘らず新羅御親征を御決意遊ばされるや、御髪を髻に結んで男装となられ、群臣士率を海岸に集め、夫れ師を興し衆を動すは國の大事なり。安危成敗、必ず斯に在り。今、征き伐つ所有りて、事を以て群臣に付く。若し事成らずば、罪、群臣に在らむ、是れ甚傷きことなり。吾婦女にして加以不肖。然れども暫く男貌を假りて、強に雄略を起し、上は神祇の靈を蒙り、下は群臣の助に藉りて、兵甲を振して、嶮浪を度り、艦船を整へて、財土を求む。若し事就らば群臣共に功有らむ。事就らずば吾獨り罪有らむ。既に此の意有す其れ共に議らへ

と仰せられた。群臣悉く感激して大命に従ひ奉つたこと言ふまでもない。かくて皇后は肥前國松浦に於て出征の準備に着手せられたが、準備悉く成つたので同地を進發せられるに際し御乗船の舳先に立ち、御親ら斧鉞を執らせられ、儼乎として三軍にかく令ち給うたのである。

金鼓節無く、旌旗錯亂るれば、則ち士卒整はず。財を貪り多欲して、私を懷き内に顧せば、必ず敵の爲に虜られなむ。其の敵少くともな輕そ。敵強くともな屈ぢそ。則ち奸暴をばな聽しそ。自に服ふをばな殺しそ。遂に戦勝つ者は必ず賞有らむ。背走ぐる者は自ら罪有らむ

見よ、堂々たる皇后の御訓誡ではないか。此の時畏くも天照大御神の御誨へあり、和魂は玉身に服ひて壽命を守り、荒魂は先鋒と爲りて師船を導かむと。かくて十月三日、對馬國和珥津を御出港あらせられ、大船隊は舳艫相銜み、威風堂々として新羅に向つて航進したのであるが、時に飛廉風を起し、陽侯浪を擧げ、海中の大魚、悉に浮びて船を扶み、これを負うて渡つたといふ。則ち



大風、順に吹きて、帆船、波の隨に、楫を勞さずして、便ち新羅に到つたが、時に隨船潮流、遠く半國に速んだ。

新羅王、是に於ておぢわなきて、せむすべを知らず。則ち諸人を集へて新羅の國を建てしより以來、未だ嘗て海水の國に凌ることを聞かず。若し天運盡きて國、海と爲るか

と云つたが、この言葉のまだ終らぬ間に、船師海に満ち、旌旗日に耀き、鼓吹聲を起して、山川悉に振つた。新羅王、遙に之を望んで以爲へらく、非常の兵、將に己が國を滅さむとすと、おぢて失心したが、やゝあつて醒め、

吾聞く、東に神國有り、日本と謂ふ。亦聖王有り、天皇と謂ふ。必ず其の國の神兵ならむ。豈兵を擧げて距ぐ可けむや

と云ひ、直ちに白旗を掲げ面縛して皇后の御乗船の前に到り、「たとひ日が西より出で、鴨綠江の逆流することがあつても叛き奉ることなからん」と誓つて降服した。

時に或る者、新羅王誅すべしと申上げたが皇后は、

初め神教を承けしに、金銀の國を授けむとあり、又三軍に號令して、自ら服はむをばな殺しそと曰へり。今、既に財國を獲つ。亦、人自ら降り服ひぬ。之を殺すは不祥

とのたまひて、乃ちその縛を解き飼部と爲したまうた。

かくて、新羅征伐は何等武力を用ふることなくして終了したが、半島の大部分並に滿洲南部を領有してゐた高句麗、百濟の兩王も、自ら朝貢を申出たので皇后は之を容れたまうた。かくて和珥港御進發以來二ヶ月を過ぎずして新羅、高句麗、百濟の三國は又血ぬらずして、御稜威の下にひれ伏したのである。



## 明治維新後の皇軍再建

### 一、畏し 明治天皇の御決意

古は天皇躬つから軍隊を率る給ふ御制にて時ありては皇后皇太子の代らせ給ふこともありつれと大凡兵權を臣下に委ね給ふことはなかりき中世に至りて文武の制度皆唐國風に倣はせ給ひ六衛府を置き左右馬寮を建て防人など設けられしかは兵制は整ひたれとも打續ける昇平に狃れて朝廷の政務も漸文弱に流れければ兵農おのつから二に分れ古の徴兵はいつとなく壯兵の姿に變り遂に武士となり兵馬の權は一向に其武士どもの棟梁たる者に歸し世の亂と共に政治の大權も亦其手に落ち凡七百年の間武家の政治とはなりぬ世の様の移り換りて斯なれるは人力もて挽回すへきにあらずとはいひなから且は我國體に

戻り且は我祖宗の御制に背き奉り淺間しき次第なりき

畏くも 明治天皇が軍人勅諭に於て述べさせられてゐるやうに、中世武門武士の發生と共に兵農二つに分れ、爾來永年に亘つて武家政治が行はれた。

幕末、伏見・鳥羽の戦に一敗地に塗れて前將軍慶喜は江戸に走り、茲に明治維新は成就されたのであるが、これは薩長を中心とした諸藩の實力、即ち兵力によつて行はれたもので、當時朝廷には一兵の備もなかつたのである。

明治天皇は、五箇條の御誓文と共に下し賜はつた宸幹に於て

親ら四海を經營し 汝億兆を安撫し 遂には萬里の波濤を拓開し 國威を四方に宣布し 天下を富岳の安きに置かんことを欲す

と宣べさせられ、以て維新の精神を明かにし、その固き御決意をお示し遊ばされたが、天皇は皇軍の本質に基き古制を復活して、天皇御躬ら近代國軍を創設し給うたのである。

朝廷でも亦、維新の御親政が、薩長の私の政治でなく天皇の御親政であり、軍



も薩長の私兵でなく天皇の率るたまふ眞の皇軍であるといふ實を擧げるべく、大いに努力したのである。

明治元年正月十七日、三職分課を定め、嘉彰親王、岩倉具視、島津忠義を海陸軍總督とし、海軍、陸軍、練兵、守衛、緩急軍務の事を督せしめ廣澤兵助、西郷隆盛を海陸軍務係とした。今日の陸海軍の起源は此處に始まつたのである。

### 近代兵制の萌芽

これよりさき、長崎の人、高島秋帆は近代兵學の研究に没頭してゐたが、幕府に建言して軍事の大改革を促し、自らはオランダから銃砲を買入れてその術を門弟に授けてゐた。その門人江川太郎左衛門亦、熱心に子弟を教練し、銃砲を鑄造し、國防策を立てた。下田や品川の砲臺はその設計にかゝるものであつた。嘉永六年米艦の浦賀來航は隋眠を貪る日本の朝野を震撼した。幕府を始め諸藩は競つて軍備の充實に努め、西洋流の近代兵式も次第に採用されるに至つた。

文久三年の英艦鹿兒島砲撃、翌四年には英、米、佛、蘭聯合艦隊の下關攻撃があつて、帝國防備の必要がいよゝ切迫し、同時に從來の我が兵器や戰術では、外夷相手の戰鬪に堪へないことが立證されたので、各所で兵式、兵術の改革が行はれ、急速に西洋兵式化して行つた。

文久二年、幕府は洋式によつて三兵隊を組織し、西洋の制に倣つて陸海軍將校の階級を定めたりしたが、元治元年七月長州征伐の時には、長州の兵は既に輕装に改めて自由自在の運動が出来たのに、幕府軍の中にはまだ甲冑を着てゐたものがあるといふ風で、大軍を動かしてゐながら、遂に効果が擧がらなかつた。

この苦い經驗から、幕府はいよゝ兵術改革の急務なるを痛感し、慶應三年には佛國士官を傭つて大いに改革を行ひ、これに刺戟されて、各藩また競つて西洋兵式を採用、次いで維新の兵亂となつた。

海軍は朝廷で、陸軍は各藩で



明治元年閏四月、官制を改革して太政官を設け、議政、行政、神祇、會計、軍務、外國及び刑法の七官が置かれ、軍務官は海軍、陸軍の二局、築造、兵船、兵器、馬政の四司を管することになったが、軍務官知事には嘉彰親王、副知事に長岡護美、判事には大村益次郎が任命された。

次いで諸藩徴兵細目が發布され、諸藩一萬石毎に京畿常備兵十人、藩地豫備兵五十人、軍資金三百兩を課することとなり、朝廷の常備軍の制度が緒についた。かく、朝廷に於て國軍建設に苦心してゐる時、當時その處分が問題になつてゐた北地凱旋兵士をこの問題に結びつけて考へたのが、兵庫縣知事をしてゐた伊藤博文であつた。彼は北地凱旋兵士の處分を論じ、これを以て朝廷の常備隊を組織すべしとの議を上つたのである。

木戸孝允もまた兵制の確立に腐心し、そのため歳入を五分し、その三分を陸海の軍備費に充て、之を擴張し、他の二分を政府の經常費並に人民の救恤等に充つべしと説いた。

明治二年七月、公議所が集議院と改稱されたが、その集議院に、九月、左の如く海陸二軍興張の策が諮問されてゐる。

海陸二軍は國家の重事、方今の急務なり、然るに兵制未だ立ず、規律未だ定らず、軍艦銃器未だ充實に至らず、内外の守備俱に闕く、蓋騒亂の餘、用度の足らざるに仍れり、而今二軍興張の策如何

而して此の御下問に對し 明治天皇御親臨の下、各議員の間に熱心な答議が行はれたが、要するに概して陸軍よりも海軍を重んじ、學校の創設、人材の養成を急務とし、兵式は陸軍は佛式、海軍は英式を採用すべし、その費用は各藩の石高に應じて支出すべしといふにあつた。そして當時はまだ廢藩置縣が行はれてゐなかつたので、海軍は朝廷で、陸軍は各藩で建設するといふのが、大體の方針であつた。

## 二、大村・山縣の功績



維新政府は、かくて、慘憺たる苦心の下に陸海兩軍の建設に努めたのであるがその中心人物は大村益次郎であつた。大村は勿論、戊辰戦役に赫々たる戦功を樹てた、當時の日本最大の戦略家であつたが、軍政家としての功績もこれに優るものがあつた。彼は日本の軍政を統一しその基礎を固めた偉人である。即ち彼の提唱した兵制五大綱目の如き、或は農兵募集、親兵組織の如きは、何れもわが軍制の基礎となつたのである。

大村は戊辰戦争後、直ちに廢藩置縣を唱へ、國軍編制の必要を力説した。そして今後は、從來の如き世襲の兵士では役に立たぬ、須らく士族の常職を解き、その佩刀を禁じ、徴兵令を布いて、一般國民の中から身體、精神、知識の優れたものを選抜せねばならぬと主張したのである（兵部省設置、兵學校の創立、陸軍屯所建築、兵器製造、病院設置、これが彼の兵制五大綱目である）。

大村の唱へた兵制改革、殊に農兵を以て親兵を造るといふ提案は朝野に大議論を惹起した。薩摩藩の大久保利通らの猛反對に、長州藩の木戸孝允が反駁を加へ

た。結局、木戸の慰撫により、大村の兵制改革も漸進的に行ふことになり、軍務官が兵部省と改まるに際して大村は兵部大輔に任せられ、兵部卿嘉彰親王を輔佐して兵部の實権を握り、軍制改革を次第に實行して行つたのである。

大村が刺客の手に殞れてから、明治二年十二月、參議前原一誠が兵部大輔に就任したが、彼には大村ほどの統率力がなかつたので、部内が治まらずして辭し、山縣有朋がその後を襲つた。大村の志は、山縣によつて完成されたと見てよいと思ふ。

山縣は戊辰の役が終ると、西郷從道と共に洋行した。一行が佛國マルセイユに着いたのは明治二年の初冬であつた。當時フランスはナポレオン三世の覇業隆盛の極に達し、すでに衰運が現れてゐたが、まだノリの繁榮ぶり目覺しく恰も歐洲文化の中心たるの觀があつた。而してドイツは未だ聯邦統一の業成らず、プロシヤの首都ベルリンなどは、パリに比すべくもなかつたが、炯眼なる山縣は、早くもドイツ民族の尙武の氣象盛んなるに感じてゐた。



明治三年八月、新歸朝の兩人とも兵部省に入り、山縣は兵部少輔に、西郷従道は兵部大丞に任ぜられた。兵制統一の大事業を引受けた山縣は、西郷隆盛の威望を利用して、之が遂行に取掛つたのである。

第一に薩、長、土三藩からの獻兵によつて、先づ御親兵を造つた。そしてその統御のため讀法七章を頒ち、國軍の本領を示した。

### 三、徴兵令制定さる

山縣の一番大きな功績は徴兵令の制定であらう。今日から見れば、徴兵令の制定は廢藩置縣に伴ふ自然の結果であるが、當時としてはなかくの大問題であつた。百姓町人から徴兵しないでも、武士階級から立派に兵士が得られるではないかと薩藩出のものは多くかう考へてゐた。西郷隆盛や桐野利秋などもこの考へであつた。谷干城のやうな先覺者でさへ、先づ士族の青年を盡く取つて兵に當て、次いで平民に及ぶべしと説いてゐた位である。

これより先、高杉晋作は、長州藩兵改革の任に當つたとき

砲火による戦闘は團體の訓練を主とするものであつて、個人の格闘力の如きは全く問題でない。然るに元來個人の格闘力を誇りとすべき筈の門閥武士は太平の久しき、優柔の風に慣れて、物の役に立たぬ、活潑な元氣と剛健な體軀とは、却つて下士、足輕、若くは百姓町人の階級に見られるやうになつてゐる。今、是等の者の中から精銳を選び、これに輕裝と銃砲とを與へ、團體的訓練を施すならば、能く洋夷の侵寇に對抗し得るであらう

と藩主に建言し、直ちに一般四民から壯丁を募集し、これに洋式訓練を施したが果してその成績極めて良好で、實に精悍無比であつた。奇兵隊と稱されたのはこれである。

大村益次郎は、この高杉の意見と、奇兵隊の経験の影響を受け、これに西洋の徴兵制度の研究と相俟つて、独自の徴兵説を立てたのであるが、同藩の山縣有朋も亦、同じく高杉の意見と、奇兵隊の経験と、洋行中の實地見聞から、徴兵制施



行の信念を固めたのであつた。

また、當時、事實の上からも、徴兵制度採用の止むなきに至つてゐた。即ち士族だけでは、新興日本國家に必要な兵員全部を到底供給することが出来ないのとまたこの多數の兵員全部に支給する費用は、當時の財政から云つて到底支辨し得べくもなかつた。何れからするも、徴兵制の採用以外に方法なしと、山縣は固く信じてゐた。

明治五年二月、兵部省が陸軍、海軍の二省に分れ、山縣は兵部大輔から陸軍大輔に轉じ、西郷從道は陸軍少輔に、河村純義は海軍少輔となつた。そして山縣の徴兵論が廟議の採用するところとなり、その年十一月二十八日、愈々全國徴兵の詔が渙發されたのである。

明治六年一月に至り、鎮臺の配置を改めて四鎮臺とし、全國を六軍管區に分ち徴兵令を告示し、四月には第一回の徴兵が入營した。

かくて、山縣の異常な努力により徴兵令は成立し、實行された。國軍建設に對

する彼の功績は特筆に値するものがある。

#### 四、軍人勅諭下賜さる

明治六年、徴兵令が實施されて以來、國軍の面目はすっかり一新したが、陸海軍が外型的に整つて行くに従つて、必要となつて來たのは軍人精神の養成といふことであつた。

徴兵令によつて、庶民階級から徴集した壯丁に對して、嚴格な武士的教養を與へ、これをして眞に國家の干城たらしめるためには、嚴格なる精神的陶冶を加へることが必要であつた。それと同時に、一方武士階級からの出身者と雖も、泰平の久しき、士風少からず弛み、訓練も低下してゐたのみでなく、各藩によつてその風習、教養等もまち／＼であつたので、これに、皇國軍人としての、しつかりとした訓練と教養とを與へることが必要であつた。

軍人勅諭は、かうした必要の下に、明治十五年一月四日下賜されたものであつ



て、皇國建軍の大義を闡明し、軍人の嚮ふ所、尙ぶべきところを明示し給ひ、皇國軍人として遵守せねばならぬ道德について諄々とお諭し遊ばされたものである。

軍人勅諭は、他の詔勅と違つて、太政大臣の宣奉を経ず、直接に陸海軍卿を宮中に召されて親授されることになつたが、それは、この勅諭が 陛下御躬ら、大元帥として、その肱股と頼ませられる軍人を訓告し賜うたものであるからであつた。

この勅諭は

- 一 軍人は忠節を盡すを本分とすへし
- 一 軍人は禮儀を正しくすへし
- 一 軍人は武勇を尙ふへし
- 一 軍人は信義を重んずへし
- 一 軍人は質素を旨とすへし

と、五箇條を掲げ、これを以て軍人たらんものゝ暫くも忽にすべからざるものとし、これを行ふには一の誠心こそ大切なれ、と教へ給うたものであり、英邁に亘らせられる 明治天皇が、時代の傾向、要求を察し、わが建國の體に基き、歴史の成迹に鑑み、更に天地の公道、人倫の常經に基き、訓へ給うたもので皇國軍人の永久の聖典たるべきものである。

戰國時代から封建時代にかけて發達した武士道は、もとより日本の國民性に基いた大和魂の現れであつた。幕末には、これが國民の尊王思想と結んで維新の精神となり、新しい國民道德を造つたのであるが、軍人勅諭はこの道德に體系を與へ、理義を明かにし、以て成文の經典とせられたものに外ならない。

河村海軍卿出張不在中のため、この勅諭を拜受した陸軍卿大山巖は、恐懼して退下、直ちに傳達の手續をとり、勅諭寫四千六百部を陸海軍省、警視總監、府知事、縣令、各省院使長官、大臣、參議、及び宮中各部局に配布し、尙勅諭の本書は追つて下げ渡されることとなり、内閣に於て謹書校寫の上、御親署を仰ぎ、逐



次陸海軍に傳達せられ、二月末頃までに陸軍は近衛鎮臺の諸隊、其他戸山學校、士官學校、教導團の各隊に計四十五部を、海軍は鎮守府、兵學校、機關學校、東海水兵分營、その他艦船に計二十九部を下賜された。

これを拜受した軍隊その他に於ては、これを奉誦銘記して、各人に十分徹底せしめることに努力したのであるが爾後、勅諭の奉體は陸海軍とも怠ることなく、現今に於ては軍人生活は即ち勅諭奉戴の外に出でず、軍隊教育は唯々に勅諭に則つて行ひ、軍人は唯兵營に勅諭の御趣旨を實行に現はし、以て行住坐臥、常に聖慮に副はんことをのみ心掛けしめてゐるのである。

わが軍人魂は、實に此の勅諭によつて造られると云ふも過言ではない。皇軍、天下無敵の強さ、亦此處に出發してゐるのである。東郷元帥が、「日本の軍隊のやうに崇高なる精神を以て統一されてゐるものは、恐らく世界に又とあるまい」と云はれたのは、この有難い勅諭を中心として訓練し教育されるわが皇軍の強味を指したに外ならぬのであらうと思ふ。

### 軍人への深厚なる御信任

軍人勅諭に於て 明治天皇は

「夫兵馬の大權は朕が統ふるところなれば其司々をこそ臣下には任すなれ其大綱は朕親之を攬り肯て臣下に委ぬべきものにあらす」

と宣ひ、更に

「朕は汝等軍人の大元帥なるをされば朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は殊に深かるべき」

と仰せられ、名實ともに、日本の軍隊が 天皇の軍隊なる所以を明かにせられてゐるが、皇國軍人が「大君のへにこそ死なめ」の信念を愈々固くし、一死報國、忠節を全うするの精神を興起する、また故ありと謂ふべしである。

勅諭には更に

「朕が國家を保護して上天の恵に應じ祖宗の恩に報いまるらする事を得るも得ざるも汝等軍人が其職を盡すと盡さゝるとに由るそかし我國の稜威振はさ



ることあらは汝等能く朕と其憂を共にせよ我武維揚りて其榮を耀さは朕汝等  
 と其譽を偕にすへし汝等皆其職を守り朕と一心になりて力を國家の保護に盡  
 さは我國の蒼生は永く太平の福を受け我國の威烈は大に世界の光華ともなり  
 ぬへし」

と宣はせられてゐる。畏くも限りなき御威徳と、軍人に對する深厚なる御信任の  
 程と皇軍の大使命を遺憾なく宣示され給うてゐるものと拜察するのである。

この勅諭を拜戴する軍人が克くその使命と本分を自覺し、一心同體となり、渾  
 然たる軍人魂を造り上げ、戰場に於ては、世界に比類なき武勇を發揮し、能く寡  
 を以て衆を撃破粉碎するのも、決して偶然ではないのである。

### 陸海軍擴張の勅諭

明治十五年、京城の變の後、清國は朝鮮を完全に屬邦化せんとするの勢を示し  
 た。而も當時の日本は、徵兵令制定後十年を経過してゐたが、陸軍も海軍も國內

に使用するのが精一杯といふ情ない状態であつた。

右大臣岩倉具視は、深く軍備の現状を憂慮し、特別税を起してこれを充實すべ  
 く主張した。この提議は廟議の可決する所となり、かくて同年十二月、陸海軍擴  
 張の勅諭が渙發されて、わが陸海軍は劃期的飛躍をなすに至つた。

かくて聖旨を拜した大山巖を陸軍卿とする陸軍當局は、十七年度より各鎮臺に  
 六師團を置き、十八年度より近衛の二師團を置き、二十一年を期して、一旦緩急  
 あらば二十萬の兵を動員し得るやう計畫を立てたのである。明治十九年には山縣  
 有朋を建築部長とし、全國樞要の地方に砲臺を建築することになつた。その費用  
 として 明治天皇は御内帑金三十萬圓を下賜され、全國の富豪之に做つて續々獻  
 金に申出で、その總額二百萬圓を突破するに至つた。

山縣有朋を助けて、軍政方面で大に貢獻したのは桂太郎であつた。ドイツから  
 歸朝した新知識としての彼は、大にその手腕を揮つたものである。參謀局を擴張  
 して參謀本部にしたのも彼の建議によると云はれてゐる。



彼は間もなく大山陸軍卿一行に隨行して、三度び渡歐したが、十八年歸朝するや陸軍少將に任じ、總務局長に補せられ、翌年陸軍次官に任ぜられた。彼は大山陸相を擁し若年の俊髦川上操六、兒玉源太郎等と提携して部内の大改革を斷行した。即ち維新以來の兵制を改革し、ドイツの兵制を取入れて、日本式の新兵制を創立した。日本の陸軍を世界的地位に向上させたのは桂の力であると思ふ。

### 日清戦争とその後の軍備充實

明治二十七年、日清戦争勃發するや、川上操六中將は、參謀次長として大本營幕僚の首席を占め、陸海兩軍を完全に指揮してその策戦に當つた。日清戦争は殆ど彼の策戦によつて決せられたと謂はれてゐる。

戦後日露戦争を豫期した彼は、その準備に努め、常備軍七箇師團を十三箇師團に増設の計畫を立てたが、三十二年五月病死した。

明治二十八年十二月の第九回帝國議會に、伊藤博文を總理とする伊藤内閣は、

陸軍六ヶ師團増設費を含む陸海軍擴張案を提出した。改進黨、革新黨などは陸軍擴張に反對したが、川上參謀次長の決意に動かされた自由黨が賛成した爲め此の豫算が成立したので、明治二十九年、全國に近衛及び十二師團を置くことになつた。

明治三十三年北清事變起るや、各國何れも出兵して北京赴援軍を組織したが、日本は地理的關係から最も多く出兵し、各國兵と聯合軍を組織して行動したが、規律の嚴正と、戦闘に於ける勇敢さに於て異彩を放ち、各國からその實力を認められるに至つた。

次いで日露戦争中に、第十三、十四、十五、十六の四師團が増設され、日露戦後は二十一箇師團、常備兵力二十九萬に擴張されたが、世界戦争の結果大正十一年、十四年の二回に亘つて整理を斷行、四箇師團を廢止し、軍の編制、整備に改善を加へた。即ち平時兵力を整理縮少し、兵の在營期間を短縮すると同時に、新式器材の整備によつて軍の威力を補足充實することゝなつたのである。



滿洲事變、支那事變と、陸軍は常に八紘爲宇の皇謨を翼賛すべく、いつも全國民を率ゐ、世界新秩序建設の急先鋒となつて、國威を世界に輝かして來たが、その間に早くも此の大東亞戰爭を豫期して軍備の充實擴張に孜々として努力し、今日見るが如き、世界最強の皇軍を完成し、赫々として現にその戰果を擴大しつつあることは、一億國民の感謝に堪へないところである。

## 皇軍の特色と獨特の軍隊教育

### 一、皇軍獨特の勇武の源泉

皇國日本の軍隊は、他國の軍隊との比較を懸絶した存在であつて、即ち皇軍であり、同時に國軍である。建國の初めから、わが軍隊は 天皇の親しく統率したまふ所であつた。中世以降、武門武士の發生と共に、武士が權力を握り、封建時

代となつたが、明治維新の大業成ると共に、明治五年十一月徴兵の詔書渙發せられ、國民皆兵の大本に復古せられた。これ實に、一千年以來の大改革であつて、此處に久し振りに、建國以來の常道に還つたわけであつて、それまでの特權的、職業的軍隊が撤廢され、四民一如になると共に、國防の責任は國民全體が平等に之を擔ひ、軍隊は 天皇によつて統率されることになつた。かくてわが陸海軍は建軍の精神に立還ると共に、聖諭を奉戴して只管軍人魂の鍛錬に努め、過去六十年間に於ける輝かしき武勳を記録し、現在全世界環視の中に、東半球上を所狹しと、濶歩しつつ、赫々たる大戰果を擧げてゐるのである。

繙つて外國の軍隊を見ると、古代にあつては、大概元首又は特權階級の利益のために民衆を斷壓し、或は他國を征服して、その指揮者の覇業を達成するためのものであつて、一般國民とは寧ろ對立してゐたものが多い。更に近代に至つては兵權は政權と共に人民の手に握られ、軍隊は戰爭の道具に過ぎない。統帥權の所在も區々であり、志願兵制度によつて、國民皆兵の實を示してゐないのが多い。



日本の軍隊は、之に反して 天皇御親率の下に、全國民によつて組織せられ、支持せられるものであるから、その本質に於て、他國に比儔を見ないものであり殊にその精神とするところは、肇國の大理想に基き 明治天皇御下賜の勅諭を奉戴し、皇道宣揚の聖戦に従ふ道德的存在を以て自任してゐる。

實に 明治天皇の下し賜つた聖諭こそは、わが軍人精神にとつて、不滅の明星であり、不盡の清泉である。わが將兵は「海ゆかばみづく屍、山ゆかば草むす屍」の傳統的精神を今に繼承し 天皇を頭首と仰ぎ奉り、一たび戰場に臨まんか、「天皇陛下萬歳」を奉唱して從容死に就くのである。

わが軍人魂は、戰場に臨んで、光榮の勝利か、然らずんば光榮の死か、二者その一を選ぶことしか知らない。命令なき「退却」と、「降服」とは、わが軍人魂と、絶対に相容れない行爲である。最善を盡して而も事情已むを得ざる場合、降服して敵の捕虜となることは、外國の軍人の場合は正當の行爲とされるのであるが、日本古來の武士道は退却と降服を以て最大の恥辱とし、武人にあるまじき行

爲として來た。

現在に於ても、わが軍人魂が、退却と降服とを排撃する所以は、古來の武士道の美點を繼承せると同時に、わが建軍の本義、勅諭の御趣旨に基き、自己の一舉一動が悉く皇謨を扶翼し奉るためであるとの固き信念によるものであり、これが發現して皇軍獨特の勇武となり、寡兵よく大敵を掃蕩する結果を示すのである。

## 二、勅諭を奉體する道德的教化

日本の軍隊教育は、外國のそれに比して著しい特色をもつてゐる。わが軍隊教育の主眼點は、艱難生死の間にあつて、皇道宣揚に寸毫もたじろがざる精神の鍛鍊と、國徳布施のために必勝を期すべき戦闘技術の熟達との二つにある。

外國では、概して戦闘技能の訓練を主とし、戦はんが爲めの教育訓練に偏してゐる。これに反して、わが軍隊教育は 聖諭を基礎とし、道德的存在として、軍人魂の鍛鍊に重點を置き、戦闘技能は、この道を具現實施するための必勝の道程



として、熟練せしめる方針を採つてゐる。

「夫れ生を棄て義を取り、恥を知り、名を惜み、責任を重んじ、艱苦に堪へ奮つて國難に赴き、悦んで任務に斃るゝは我國民の古來繼承尊重せる大和魂にして、特に軍人に必須の資性なり。故に軍隊教育に於いては此國民性を砥礪擴充し、以て事實上に其成果を發揮せしめざるべからず」

これはわが國の軍隊教育令中の一條章であるが、即ちわが軍隊教育の根基を國民精神の發揚に置いてゐるものであつて、此の點は他國に比類を見ないものである。諸外國では、要するに戰鬥に際して技術的に優秀な兵を造り上げんとするのであるが、日本では、技術の點よりも、より以上に精神的、道徳的に優秀なる軍隊を形成することを目的としてゐるのである。

わが軍隊に於ける經典として、軍人が日夜奉戴する勅諭は、實に、國民道徳の常經である。わが軍隊教育は、此の聖諭を遵奉して忠節、禮儀、武勇、信義、質素の五徳の涵養と、これを誠心を以て實行に移すことに努力するのである。わが

軍隊教育の一特色は至誠一貫であり、知行一致であつて、單に知識の修得のみならず、直ちに之を實行せしめるにある。即ち良兵を養ふことは良民を養ふことになり、また、良民たるものは直ちに良兵たり得るといふ見地に基き、軍隊教育を以て國民精神の陶冶に資する方針に出でたものである。同じく軍隊教育令に次の文字がある。

「軍人は國民の精華にして其の首要部を占む。従ひて之が教育の適否は直ちに郷黨閭里の風尚を左右し以て國民の精神に偉大の影響を及ぼすものなり。蓋し軍隊に於て修得せる無形上の資質は以て社會の風潮を向上すべく、國民の儀表となり、摯實剛健の氣風を馴致して國家の興隆を増進し得なければならぬ。是を以て苟も軍隊教育の任に當る者は、固より戰鬥を以て本旨と爲すべしと雖、其良兵を養ふは即ち良民を造る所以なるを思ひ、國民の模範典型を陶冶するの覺悟なかるべからず」

かくの如く、軍隊に於て、國民精神作興の教育を併せ行つて、而もそれが極め



て調和的に實現されるといふことは、我が國體と民族性と、我が軍隊の本質の特性によるものがあるで、歐洲諸國に於ても、第一次大戦後は漸次國防の國民化を圖り、軍隊教育と國民教育との調和に留意するやうになつた。この點においては、日本は全く先覺者的立場にあつたと謂ふことが出来ると思ふ。

### 三、徹底せる精神教育

軍隊の生命は軍紀であること謂ふまでもないが、その軍紀は、精神教育の徹底によつて振肅せられ、統制の一貫によつて保持される。軍隊に必要な統御と服従とは、外國にあつては或は法規によつて強制され或は功利的に馴致される所が多いやうであるが、日本に於ては、飽くまで道德的觀念によつて透徹してゐる。君民一體の日本では、元首と人民との利害の相反するが如きことは絶對にあり得ないのであるから、軍隊忠誠の目標は絶對一元であつて 天皇陛下に對し奉り忠誠を捧げることが、直に國家國民に對して忠誠なる所以である。随つてわが軍隊は

上は元帥大將より、下は一兵士に至るまで、それ〴〵職分の定めるところによつて軍務に奉仕する體系をなし、指揮者がその職務を以て發する命令は 大元帥陛下の御命令を奉行することを意味するのである。

「上官の命を承ること實は直に朕か命令を承る義なりと心得よ」

と、畏くも勅諭に仰せられてあるが、かくの如くにして、階級統制の脈絡は上下一貫し、國體及び國民の信念を渾然融合するのである。軍隊に於ける命令を以て絶對的のものとし、これに献身的に服従するためには、命令を受ける者がよく自分の本分を自覺し、その受けた命令を 天皇陛下の御命令として自發的にこれを信奉する道德的觀念がなければならぬ。單に階級的壓迫や軍律の脅威によつて止むを得ず服従するといふのであれば、戰場に於て、その軍隊の威力は到底充分に發揮されるものではない。歐洲諸國の軍隊に見る押伍列や、支那軍隊の督戰隊の如く、前線にある自らの部隊を監視するやうな隊形を必要とするやうでは、その軍隊の威力は既に疑問であると謂はねばならぬ。我が軍隊と雖も、素より法規を



以て、それ／＼權限と義務の關係が規定されてゐるが、これを動かす根本は實に道徳的信念である。

軍人精神の根幹たる誠心の發露した極致は、遂に宗教的服従にまで進むのである。かの上海事件の肉弾三勇士を初め、戰場に於ける幾多の涙ぐましい、殉忠美譚は、かくして生れるのである。

#### 四、階級統制と上下和親

わが皇軍の誇りはまた、儼乎たる階級統制を存しながら、而も上下和親、人格の相互尊重の美點を併せて備へてゐることであらう。

「公務の爲に威嚴を主とする時は格別なれとも其外は務めて懇に取扱ひ慈愛を專一と心掛け上下一致して王事に勤勞せよ」

と勅諭に諭されてあり、又、同じ勅諭に

「上を敬はす下を惠ますして一致の和諧を失ひたらんには嘗に軍隊の毒を

るのみかは國家の爲めにも許し難き罪人なるへし」

と仰せられたことは、實に軍隊統率の要諦であり、軍紀確立の本源を示し給うたものと拜察される。

わが軍隊の指揮者は、部下に對して嚴正なる一面に於て、極めて親愛の態度を以て接し、共に艱苦を嘗め、悦びを等しく頌つといふ温情を示してゐるが、これ全く、右の聖諭を體しての行爲に外ならぬ。

此の特色は戰場に臨んで遺憾なく發揮せられ、隊長は部下の勞苦を頌つて之を劬り、部下は隊長の身を掩うて自ら死地に就いてゐる。これが、どの位士氣の旺盛、皇軍の勝利の有力な原因をなしてゐるか判らない。



第二 皇軍獨得の戦法と訓練



## 敵前上陸と渡河作戦

## 一、皇軍精神の眞骨頂

以上、簡單ながら皇國陸軍の本質特色とその生長、獨特の軍隊教育等につき述べて来たのであるが、然らば此の世界無比の軍人魂を有するわが陸軍は、現代戦に於て如何に華々しき活躍をしてゐるか、またその活躍のために、日頃如何に血の滲むやうな猛訓練を實施してゐるかの一斑を窺つて見ようと思ふ。勿論支那事變に引續いて、目下大東亞戦の戦果擴大中であり、その實例、美談、挿話等眞に枚擧に遑ない實狀であるが――

敵前上陸こそは皇軍精神の眞骨頂である。わが陸軍作戦行動のうち、これほど勇壯にして果敢、凄烈にして勇猛なるはない。奇襲、強襲、日頃の訓練にもものをいはせ、一切の攻撃戦法を集中的に驅使し、周到なる準備の下、沈着なる活動、神速果敢なる攻撃に必勝の突撃精神を凝集して、肉弾克敵の弾巢、或は死角に突入するのである。正に肉を切らして骨を切る捨て身の戦法である。

大東亞戦争の火蓋が切られるや、皇軍の精銳は、陸海協同下に、マレー半島、フィリッピン、グアム島に神速果敢なる敵前上陸を決行した。更に香港攻略戦、シンガポール攻略戦、ボルネオ戡定戦、次いでスマトラ、ジャバの蘭印諸島攻略戦に於いて、その作戦の進展に伴ひ、凡そ目標となつた各島嶼、各地點に於いて上陸作戦が敢行されたのである。而もその悉くが大成功裡に終始し、これが一切の勝因をなしてゐるのである。

支那事變にあつては上海附近の上陸、杭州灣の上陸、バイヤス灣上陸等の大作戦を初めとして、海南島に、雷州半島に、大小作戦の都度、各所に敵前上陸が行はれた。殊に大河、湖沼の渡渉上陸作戦に至つては算ふる遑なきほどで、長江を溯れば先づ上海に次いで鎮江、南京、安慶、九江、武漢の各主要作戦があり、



黄河流域にあつては、彼の大黄河作戰を初めとして、河北省では大運河、子牙河、滹沱河、山西に入れば汾水の各渡河戦あり、また中支に入つて安徽江蘇兩省を貫く淮河、その支流をなす淠河、渦河、潁水、更に南昌攻略の江南作戰に於ける鄱陽湖、修水、贛水、錦江、長沙作戰に於ける湘水、洞庭湖、廣東作戰に於ける北江、東江、西江、其他漢水の渡河戦等々北支、中支、南支を通じて、凡ゆる作戰には大小無数の敵前渡河、渡河上陸作戰が行はれたのである。而もこれ等は何れも、敵前渡河、若くは渡河上陸作戰として、事變史にその武勳を止めてゐる歴史的作戰であるが、この外支事變の戦闘を特徴づけてゐる各地のクリーク敵前渡河の如きは、上海附近、廣東作戰を初めとして、凡ゆる場合に繰り返へされた壯烈果敢な作戰であつた。これ等は上陸作戰として、その規模の大小こそあれ、戦闘の性質は全く同一であり、その攻撃精神においては毫末も輕重はない。正しく皇軍獨得の攻撃戦法といふべきである。

渡河作戰は暫く措き、諸外國に於ても渡河上陸作戰の例はあるが、それ等はす

べて失敗と敗退の歴史であつた。然るに日本にあつては、遠く神功皇后の朝鮮征伐、豊太閤の征韓の役を初め、日露戦役の鎮南浦、鹽大澳、大孤山上陸、更に第一次世界大戦に於ける獨立第十八師團の山東半島龍口の上陸等々、悉くが必勝、常勝の歴史である。而して大東亞戦争に於ける連續的勝利とその成功は、正に世驚界異の的である。

## 二、コタバル敵前上陸

マレー半島北端、イギリス軍があらん限りの防備を盡して守つてゐた東海岸のコタバル飛行場近く、サバック海岸に奇襲敵前上陸を敢行した我が佗美部隊の果敢な血戦こそ、大東亞戦争の開戦劈頭を飾る一大殊勳であつた。三つの飛行場から次々に襲ひかゝる敵機、海岸波打際まで一面に張り圍らされた三重の鐵條網、地雷、その後ろにトーチカ、更にその背後の椰子林の中には機關銃、自働砲、迫撃砲と凡ゆる防禦網でコタバル飛行場を守つて居た英軍は一萬五千に達してゐた。



この大敵と堅固な防衛陣を前に、敢然敵前上陸を決行したのである。この殊勳部隊及びその協力部隊に對しては、十二月九日付を以て寺内南方方面最高指揮官から武功拔群なりとの感状が授與され、この旨陸軍大臣から、畏くも上聞に達せられたのである。

開戦第一日、十二月八日の曉近く、我が輸送船團は海軍部隊の護送の下に、うねりの大きいマレー東岸の波を蹴つて、サバック沖に入った。薄雲は所々、十八夜の月が白く海を照す中を進んで行く。コタバル飛行場附近の海邊は一帶の椰子林である。上陸適地としては唯三キロほどのこのサバック海邊があるばかりである。

輸送船團は錨を降ろした。靜かに上陸用舟艇が降ろされた。數十の舟艇群は一齊に陸地を目指して慕進する。その中には決死の上陸勇士、今こそ待ちに待った上陸が始つたのである。鬪魂の塊り緊張の凝結、堅く銃を握りしめ、小搖ぎもしない上陸の用意を無我の胸奥に疊みこんで、今こそ一死突撃あるのみである。

海上〇キロの波を蹴つて、舟艇群は先を競つて波打際にどうつと乗りつけた。岸を洗つて丈餘の高さに荒れ狂ふ巻波をもとせす、上陸部隊の勇士は次ぎ次ぎに海中に飛込んで行く。その刹那、海岸からは信號彈が眞青に上つた。早くも感付いた敵は一齊に射撃を開始したのである。

海岸のトーチカから速射砲の集中砲火である。砲彈はバリリン／＼と舷側に無氣味な音を立てゝあたる。その中を水に飛び込んだ勇士は全身に波をかぶりながら陸に向つて突進して行く。二、三分も経たゝぬうちに、頭上には敵偵察機が現はれ、續いて椰子林を越えて眼と鼻の先にある敵飛行場から、敵機が飛び出して来る。ブレーン・ハイム、ロッキード、ハドソン爆撃機、兩翼に赤と青の燈をつけて月に浮ぶわが輸送船團目指して必死に襲ひかゝつて来るのである。

わが高射砲、機關銃もうなり始めた。見る／＼數を増して挑みかゝる敵機に集中射撃である。夜空を眞赤に染めて凄壯な戦ひは展開された。

一方わが第一回の上陸勇士は水際に突進した。波打際から白砂十米の間に張り



めぐらされた三重の鐵條網、それに地雷が布設され、正面に大きなトーチカ、右手にもトーチカ、銃眼は火を點じた様に全火力を開き、十字砲火は雨霰と降り注ぎ、面もあげられぬ嵐である。

この中を我が勇士は一人がとびついて地雷と共に散れば、その屍を乗り越えて次の勇士が第二の鐵條網にとびつき、又も地雷と共に吹ッ飛ぶ。突撃路を開くために決死の勇士が次々に現はれて猛闘するのである。

海上遙かの輸送船團には敵戦闘機や爆撃機が四機乃至五六機、又は十機と悪魔の如く襲ひかゝつて来る、荒波しぶく海上に、夜空をつんざいて轟々と炸裂する爆音、水柱、海岸からの集中砲火を浴びて、船體は傷いた巨鯨の如く身もたえす。〇〇丸は敵の二弾命中、午前五時卅分遂に火を發し火焰は夜の海に映じて凄壯そのものである。炎々と燃える我が船を凝視めて全員ひとしく痛憤した。然し見よ！〇〇丸のまだ燃えぬ前部にも後部にも、我が勇士が高射砲にとりついて離れようとする。旺んに射撃を續けてロッキード、ハドソン續けざまに二機を撃

墜したではないか。而もその傍に舟艇に移乗せぬ勇士らが、周章てす騒がず、じつと銃を握つて順番を待つてゐる。それ等は赤々と燃える舷測に浮き出されて、手に取るやうに見えるのである。その阿修羅の戰場を、第二回の上陸部隊は輸送船を離れて續々と驀進して行く。

波打際の激闘は益々凄愴を極めてゐる。正面に頑強な抵抗を續けてゐる大型トーチカは亂射亂撃、突進する我が勇士に掃射を浴びせる。幾重にも張りめぐらされた屋根形の鐵線障地を越えれば、三輪形にたばねた有尖鐵條網、そのまた背後に屋根形の鐵條網があり、そこから約五十メートル後ろの岡をなす一帯は塹壕と椰子林である。その蔭に隠見する灰色のトーチカ、そのトーチカが狂つた様に射ちまくるのである。

この戦闘の凄愴な情景を、軍報道班員は、次の様に報道してゐる。

砂の中から跣足のまゝの突撃



濡れ鼠そのこのけの姿で這ひ上つた勇士たちは、身を隠すものもなく、波打ち際に俯向いたまゝ身動きも出来ない。

歩兵隊らは両手を揃へて本能的に砂を掘り出した。その窪地に頭を隠した。更に掘つた。肩を隠しやがて全身を埋めた。

この時わが味方の銃聲が俄然激しさを加へた。鐵條鋏を持つた兵の一人が敵陣地に突進した。その際轟然たる爆音と共に砂煙があたり一面に上つた。

『地雷だ、氣をつけ、地雷だ、氣をつけ。』

だが、その聲の終らぬうちに、またしても続け様に二つの轟音だ。

物凄い砂の礫が伏せた兵隊の全身を殴りつけた。

『馬鹿！』

これが兵隊のおぼえてゐる部隊長の最期の言葉だ。

『動くな！』

しかしもう弾はない。銃だけが残つてゐるのだ。だから動かねばならない。

砂を押し分け、一寸刻みに前進する。鐵棒がガラ／＼と怒りに燃える。不思議な鐵劍だつた。

鐵條網がもう咽喉にとゞくところまで進んだ。『おのれ、この一線を』と兵は砂の底で、砂と共に銃身を握りしめ、誰一人聲を出すものもない。

今は銃聲も、砲彈の音もない。すべての聲が消え去つたやうに思はれた。そして、無暗にガン／＼と、突き刺すやうな耳鳴りだけが残つてゐた。一としきり敵の砲火がまはりの砂をひつかき廻して、何ともいへぬ騒音が全身を揺りあげた。

工兵の鐵條鋏が次々に鐵線に挑みかゝつた。その瞬間だつた。

見よ！一つまた一つ、鐵條網の向ふ側に、砂を盛り上げるもぐらのやうに動いてゐる皇軍の鐵兜を。

あゝ思つても見よ、兵隊らはこの様にして鐵條網をもぐらのやうにして潜り抜けたのだ。敵にとつても、味方にとつても、これは意外の出来事だつた。



と同時に、これが無言の合圖だつた。奇蹟のやうな閃きがあつた。もぐらの兵らは一齊に立ち立つた。砂を蹴たて、どつと沸き上る喊聲が、鐵線も鐵條網も鐵砲も見えてゐる總ての世界を、一瞬のうちに濛々たる砂煙のなかに吸ひ込んだ。

跣足のまゝの突撃だつた。

第一線の鐵條網が破れてからは勇戦、鐵線の固りも、その背後の鐵條網も皇軍の前に枯木のやうにもろかつた。

敵陣地は今は今全く沈黙した。そして、砂にまみれた兵隊らの前には早や一兵の敵もゐなかつた。銃を棄て、砲を遺棄した敵の逃足は驚く程速かつた。

### 「不可能」を決行した佗美部隊

兵學の常識からいつて、敵航空勢力圏内で、しかも敵飛行場の眼前に上陸するといふが如きことは殆んど不可能と考へられて居たのである。しかし乍らこの強

襲上陸は當時の作戰全般の上からは是非とも決行せねばならなかつたのである。

皇軍は、その任務の前に不可能の文字を有たぬ。この重責に起つた佗美部隊長以下一兵に至るまで、敵機もトーチカも眼中にない。白兵、肉弾を以て強襲を決意してゐた。

果せる哉、敵は我が船團が泊地に進入するや、忽ち戦闘機、爆撃機を以て、數次に亘る上陸妨害の擧に出で、而も地上よりする、銃、砲撃は猛烈を極め、海面は泊地より波打際まで阿修羅の戰場と化したのである。

船をやられて泳いで上陸した將兵も多數ある。鐵舟を待ち切れず、泳いで上陸を早めた部隊もある。皇軍の勇武はかゝる際に遺憾なる發揮される。一旦上陸した敵地は尺寸と雖も再び敵に任すことはいふ必勝の闘魂に燃え、而もこの精神力に依つて必ず作戰目的を完遂し、今日まで克く不敗の傳統を築き上げて來てゐるのである。

佗美部隊はその夕刻には早くもコタバル飛行場を長驅占領したのである。敵に



とつてこの空軍基地の喪失は正に致命的であつたといへる。即ち翌々十日のクワンタン沖の海戦に於けるプリンス・オブ・ウェールズ及びレバルスの二艦が、我が海軍部隊の強襲にあつて敢へなき最期を遂げたのは正にこれが一因をなすであらう。これについては英政府もその議會に於ける辯明に於て『コタバルを失つた結果、二隻の戦艦に對する英マレー空軍の協力は不可能であつたが爲めである』といつてゐる通り、その打撃は深刻なものがあつたのである。

のみならず、佗美部隊の勇戦の結果、我が後續の主力大部隊揚陸が成功し、その後展開されたマレー作戦の、彼の如き輝しき勝利は、この強襲上陸に依つて克く素因を勝ち得たものといふべく、これこそ特筆して戦史に銘記すべき一大殊勳であつたといへる。

### 三、敵前上陸と工兵魂

敵前上陸、敵前渡河等を初め、皇軍の進攻作戦に於ける工兵隊の活躍は、眞に

目覚ましいものがある。工兵は總ての歩兵部隊に、夫々配屬されてゐるが、常に歩兵部隊の先頭に立ち、その突撃路啓開、又は敵前架橋、道路の改修、開穿等に依つて後續主力兵團の進撃路を開く等の難事業を完遂するのである。

これに依つて砲車、戦車、装甲車の機甲部隊を初め凡ゆる部隊の進撃を助け、マレー作戦に於ける驚異的電撃機動力もこれに依つて生み出されたのである。

また或は、爆薬を抱いて敵陣に這ひ寄り、肉弾克く敵銃眼を爆破し、又は塞ぎ弾雨の中に鐵條網を切斷して、敵陣前面の障害物の除去、破碎に挺身するのである。

水に陸に、ある時は死角に突入、又ある時は、何等の掩護物なき彈巢に身を晒して神速果敢に難作業を續けなければならぬ。何よりも不屈の精神力と、頭腦に體力に、技術に、日頃の訓練にものをいはせて立ち働かなければならぬのである。周到に沈着に、終始最大の危険に身を晒して任務を遂行するこの不屈の精神こそ工兵魂であり、これこそ何ものにも優して賞讃されなければならぬ皇軍精神である。



ある。

滿洲事變、支那事變、更に大東亞戰の段階に入つて、假に凡ゆる戰場、凡ゆる戦闘にこの工兵隊の目覺しい活躍の實例は算ふる違なきほどであるが、以下香港攻略戦に参加した工兵少尉小池禮三氏の手記を抄記しよう。氏は世界的平泳の選手として令名あるが、香港攻略戦には岩淵部隊の工兵少尉として、難攻不落を誇る大要塞に挑みかゝつた尖兵としての體驗を綴つた實戦記である。

香港島敵前上陸には、初め空からの落下傘部隊にも比すべき、潜水部隊を組織し、九龍、香港の海峽を泳ぎ渡る奇襲作戦が樹てられた。

各部隊から、五キロ以上の遠泳者を選抜、僕もその一人に登録されたが、この決死的、また劃期的新作戦は都合で中止された。僕は工兵隊後方勤務として終始工兵部隊の働きを見てゐたが、實に實に壯烈そのものゝ活躍振りを示した。

敵前上陸の時は、水際障害物の破壊除去、地雷の探知發掘など總てが死の危険の上にあつた。敵前上陸地では上陸地點五キロに亘り二重、三重、四重の鐵

條網が陸上といはず、海水中にも張られて困難を極め、敵陣地は何れも複廓陣地であつたから、爆薬を抱いて敵トーチカの銃眼に飛び込むと、後方で歩兵が手榴弾で闘つてゐるといふこともあつた。

敵前上陸の際、僕は岩淵部隊長、石川平作大尉、鹽瀬茂中尉、水谷繁中尉と一緒にゐたが、四十五ミリ榴弾砲の巨弾を一時間も浴びて死角に取りついたらまゝ這つてゐたこともある。

若林部隊の和田政隆中尉が廿一日の薄暮攻撃で、僅か十餘名の部下を率ゐて金馬倫山麓で、廿四のトーチカを破り、敵工兵少佐一名を初め、百二十名を捕虜とした勇壯談や、仲西直見習士官が、わが香港攻城軍の第一線となり、廿四日ベネット山の奇襲作戦に數十の掩蓋トーチカを悉く爆破して、香港英國軍隊降伏への端緒を開いた戦闘もさることながら、岸秋正中尉、木下保少尉、小川宮雄軍曹の壯烈な活躍と戦傷の様は特筆大書さるべきであらう。

十八日午後十時第一回の敵前上陸に加はつた木下保少尉、小川軍曹らは上陸地



點に待ち構へた敵戰車隊を目がけて拔刀、銃劔のまゝ突撃したので、敵は戰車を捨て、周章狼狽逃走した。戰車二臺を鹵獲して勢込んで前進しようとした時、敵大部隊の逆襲を受け、部隊全員敵中に飛込み、數名の敵を叩き切つた。また岸中尉は、十八日午後十一時半頃、鯉魚門砲臺の奪取戰に部下を率ゐて眞先に飛込み、敵が恃みとした卅五ミリ榴彈砲に、爆薬を仕掛けて、これを爆破させたが、頑強に抵抗を續ける敵の集中射撃を浴びて、全身數ヶ所に重傷を受けながら、血達磨となり、指揮し續けた華々しい奮戦は、香港攻略戰を飾る最も偉大な手柄であらう。

## 壯烈無比・要塞攻略戰

### 一、近代的大要塞の編成

敵前上陸は飽まで奇襲を第一義とする。

しかし、この奇襲が、一旦敵に感知された瞬間から、奇襲は變じて強襲となり白兵戰、肉弾戰が演ぜられるのであるが、これが要塞の場合は、そこに皇軍の最も得意とする壯烈な要塞攻略が行はれるのである。

要塞とは永久築城によつて鞏固に守備し、獨立した防禦地域をいふのである。

永久築城は最も鞏固な築城の方式であつて、多くの勞力、時日、資材、最も優れた科學的手法を應用し、長年月経つても廢頽しないやう構築されたものである。

強國と隣接した國々にあつては、その國がたとひ強大な兵力を擁してゐても、作戰根據を確保し、動員集中を援護したり、又は國土資源を防護して、攻守兩様の作戰態勢を有效容易ならしめるために、その重要な地域には相當の防備施設をなさねばならぬ。

國境、海岸、島嶼、海峽、或は國境に近い大河の渡河點、重要な港灣等、更に山地、沼澤地等の地形を利用して、攻守兩様の利用を目的として永久的に嚴重な



防備を施すことが必要である。

要塞の形式、性質共に、第一次世界大戦前後に於いては劃期的な變化が行はれた。大戦後に於ては、單に戰略的要地の獨立地點を防備するに止まらず、國防上重要な國境一帯、或ひは海岸の廣大なる地域に、極めて大規模な永久築城に依る防備地帯の建設が必要となるに至つた。

かうなると所謂要塞ではなく、永久築城と野戦築城を併用し、要塞の持つ堅牢性と野戦築城の動的威力とを併備する様になつたのである。マデノ線、ジークフリード線、スターリン線はその大なるものであるが、難攻不落を誇つた香港要塞の如きは、この野戦築城と、永久築城の組合せに於て弱點があつたといはれる。

先づ陸地大要塞の編成は、最も重要な戰略的要點に建設され、内部には軍用諸建築物、及び資源、住民を包含してゐるのを通例とし、前進陣地、本防禦線、内部防禦線、圍郭等の諸防禦線から編成されてゐる。

前進陣地は本防禦線上にある守城砲兵の有力な支援を受けるため、その前方の

地點を永久施設により構築した若干の據點をもつて編成し、攻撃軍の攻圍の杜絶と、攻城砲兵の展開を妨害し、また城外枝隊を支援するものである。

本防禦線とは攻城砲兵の主力である榴弾砲等による攻城砲兵の攻撃に對して核心を援護し、攻圍軍の占領を妨害して攻城砲兵と砲戦を交へ、長く遠距離にこれを抑壓して、攻城動作の發展を妨害する任務を持つてゐる。

内部防禦線は、本防禦線に對する敵の有効火力を避け、本防禦線の一部が陥落しても、攻撃軍が直ちに圍郭または核心に近迫することができず、その結果、新に陣容を整備しての再攻撃を餘儀なくせしめ、その兵力を消耗せしむる點を狙つてゐる。

圍郭陣地は、敵の奇襲に對して、核心を防護し、内部の防禦線の陥落後と雖もなほ抵抗するものであつて、複郭最後の防禦線と共に爾後の抵抗を行ふ陣地である。

海岸大要塞の防禦正面は、海正面と陸正面とに分れる。陸正面の編成は、陸地



要塞の編成と同様である。海正面は強大なる艦隊を以てする凡ゆる攻撃に對抗して、自軍艦隊との協同作戰に有効に編成され、遠戦設備、近戦設備などが施されるのである。海岸の形、海面の状況、援護すべき諸施設又は資源と、海岸線の發達状況等に依つて、その編成方式も異つて来る。

海岸背後の施設は、海正面よりする海軍獨力の攻撃により攻略した例は少いけれども、陸正面からの、眞面目な攻撃を受ける時は、つひに孤立状態に陥り、陥落の悲運に遭遇するに至つたといふ先例も少くない。

既に述べた通り第一次世界大戰後は永久築城方式は一大變革を齎した。それは火器威力の發達、化學兵器の出現、航空機、潜水艦の發達等のためであることは勿論、これに伴ふ戰術、戰略の變遷に對應して、永久的築城もその重要な戰闘機關を分散疎開させて、凡ゆる部面に即應せしめる動的威力を發揮せしめると共に、能ふ限りこれを隱蔽秘匿して、如何な攻撃威力に對しても對抗し得る『築城地帯』の建設が絶對必要となつて來たのである。

即ち、築城地帯は從來の方式であつた圓型要塞に加ふるに、若干の防禦地帯を併列、或ひは縱深的に、大きな一連の防禦地帯をもつて、その要部を永久築城に依つて施設し、而もその防備地帯相互の連繫を見ると共に、その間距區間に對しては火力を以て充分閉塞し得る仕組みである。

## 二、要塞攻撃の種類

さて、攻城戰、若しくは要塞戰に於ける攻撃戰術であるが、先づその主眼とするところは迅速なる攻略にある。攻城軍のすべての動作は、目標に向つて集中的にあらゆる戰術が動員される。

しかし要塞攻略といつても、特別に原則がある譯ではない。一般戰術原則と同様であるが、その攻撃手法は、正攻撃、特殊攻撃に分けることが出来る。

正攻撃は、防備完全なる要塞に對して主として行はれる攻撃法であり、特殊攻撃とは、敵の防備不完全な要塞に對して簡略な方法を用ひて、一齊に攻略する方



法である。この特殊攻撃は更に、奇襲、強襲、砲撃の三つに分けて考へることも出来る。

奇襲とはいふまでもなく敵の不意に乘じ、突如としてこれを攻撃攻略するのであるが、主として、敵の守備怠慢、防備薄弱な要塞、堡壘などの攻撃に應用される。かの第一次歐洲戦争當時、わが青島要塞の攻撃の如きは、奇襲攻撃に依つて赫々たる戦果を勝ち得たものである。

強襲とは、正攻撃、攻略の本格的な戦闘経過を省略して、優勢な兵力をもつて猛烈果敢に攻撃を強行するのである。これは主として敵の防備が薄弱であるか、又は守兵の士氣が著しく阻喪してゐる要塞に對して行ふものである。時として要塞攻撃に長時日を費すことが出来ず、戦略的に、迅速に攻略する必要に迫られた場合、多大の損害をも顧みず、この強襲が行はれ戦果をあげてゐることが、戦史にも少なからず見出されるのである。

彼の露土戦争中、ロシア軍はトルコのカルヌ要塞に對して強襲攻撃をやつての

げ、また第一次世界大戦當初のリエージュ要塞攻撃なども、この強襲に依つて攻略が敢行されてゐるのである。

砲撃による攻略は、主として砲火の威力をもつて、守兵及び住民の心膽を奪ひこれによつて開城を促すといふ攻撃方法である。

敵要塞司令官の性格の薄弱なる場合、動搖し易い住民を多數擁してゐる要塞に向つて行はれるのである。普佛戦争におけるジューデンホーヘン要塞攻略の如きは、その典型的なものである。

正攻撃による要塞攻略は、最も緻密な計畫と、周到なる準備のもとに行はれる本格的戦闘體系を踏むものである。

即ち攻城軍は通常野戦部隊に對し所要の攻城部隊Ⅱ重砲兵、工兵Ⅱと特殊部隊Ⅱ鐵道、電信を配屬して編成される。古來諸攻城戦の實驗によつて、正攻撃を豫期する場合、兵力は平均して守備軍の約三倍を要することになつてゐる。

即ち、歩兵の兵力は攻撃正面において本防禦線一メートル毎に六人、その他の



正面において二人、防者は本防禦線一メートル毎に一人を標準とする。攻城砲兵力は要塞の性質、攻城砲の口径、砲種、準備彈藥などによつて差異はあるが、攻撃正面において火力の優勢を占むるため、少くも守城軍の一倍半を必要とする。斯くて防者は主戰鬪方面本防禦毎キロ二十門を標準とするから、攻者は毎キロ三十門、その他の正面においてその約半數といふ割合になる。

攻城砲兵の砲種は多種多様であるが、大體、大口径の曲射砲を主とし、若干の大口徑平射砲を交ぜ、これに中口径平射砲を若干加へる。曲射砲と平射砲の比は大體二對一の割合が標準となつてゐる。

明治三十七、八年戰役の旅順要塞に對する攻撃こそは、この正攻撃の代表的な戰術であつた。

即ち、乃木大將を司令官とする我が攻城軍は三十七年五月二十九日を期して攻撃を開始し第一師團、第十一師團、及び徒步步兵三聯隊と一大隊の兵力を基幹として混成し、更に後備歩兵第一旅團及び野戰重砲隊を増加して六月三十日第九師

團、後備歩兵第四師團、野砲兵第二旅團及び工兵大隊を加へ、海軍陸戰重砲隊を合して第一回總攻撃を敢行した。次いで徒步步兵一大隊、二十八サンチ榴彈砲IIを増加して第二回總攻撃を實施した。さらにまた第三回總攻撃に於ては第七師團後備工兵隊を増加して、遂に三十八年一月一日歴史的な開城をなさしめたのである。

大正三年、神尾中將を司令官とする青島攻略戰は、八月二十三日編成された獨立第十八師團、山砲兵一中隊、野戰重砲一聯隊、獨立重砲三大隊と一中隊、工兵獨立大隊、野戰電信隊、無線電信隊、航空隊、野戰電燈隊、更に九月五日獨立重砲兵一大隊、二十八サンチ榴彈砲六門、野戰重砲兵一聯隊、工兵獨立大隊及び臨時鐵道聯隊を増加し、山東鐵道の警備に當らせ、必要に應じて攻城に使用せしめるため九月二十日歩兵第二十九旅團を増加した。なほこれに海軍重砲隊、英國軍歩兵一大隊半が參加して遂に彼の如き戰果をあげたのである。

要塞攻略の原則は飽まで緻密な計畫と、周到な準備の外何ものもない。

一九一四年十月、英國はトルコのコンスタンチノール攻撃を企圖し、先づ海



軍のみを以てダーダネルス海峡奪取を圖つたのであつた。

十一月三日戦艦約十隻を以てガリポリ半島南端と、對岸クムカレ砲臺に對して砲撃し、次いで數十隻の英佛聯合艦隊を以て、翌年二月十九日以降三月八日に至る間、總攻撃三回、半島の南端、海峡の最狭部チャナツク附近のトルコ海岸砲臺を殆んど破壊し去つたのであつた。斯くして英國側はトルコが到底戰鬪を繼續することは出来ないであらうと判断し、三月十八日三十八隻の大艦隊をもつて總攻撃を開始し、海峡の強行突破を試みたのであつた。然るに、一度び沈黙したトルコの砲臺は再び砲撃に廻り、一齊に猛砲火を浴びせて來た。而もトルコの放つた浮流水雷のため、英艦隊は多大の損害を被つて退却し、艦隊獨力の海峡突破を放棄するの止むなきに至つたのである。

### 三、シンガポール攻略戦

わが無敵皇軍に敗退の戦例はない。難攻不落の香港要塞陥ち、更に世界四大要

塞の一であり、而も世界唯一最高の防備を誇るシンガポール要塞すら、皇軍進撃の前には敢へなくも陥落したのである。

そのシンガポールに要塞が、如何なる編成を以て固められてゐたかを検討するならば、皇軍が如何に精強にして、如何に優秀であるかを最もよく識ることが出来るやう。

シンガポール要塞は幅一キロのジョホール水道に依つてマレー半島から離隔され、天然自然の外濠を圍らし、英國東亞軍司令部は、地下十六呎の地下室十五室を有する堂々たるものであつた。

その施設に至つては伏魔殿宛らの複雑怪奇を極め、佐渡ヶ島程度の島内に、所狭きまでに威を競つて全島これ武器倉の觀を呈し、海岸至るところ十重二十重に張り繞らされた鐵條網、トーチカライン、側防機關銃、側防砲臺、高射砲臺等々の外、テンガー、センバワン、カランの三軍用飛行場には我が數十次に亘る爆撃に依つてその勢力の大半を失つたとはいへ、その後には於いて増援された飛行機も



なほ相當數に上つてゐたのであつた。

セレター軍港を中心とする東北部に、堅牢な要塞を築き、ブラカンマテ島及びチャンギー要塞には四周に對して射撃し得る二十五インチ級の砲臺を有して居り擬装は極めて完全で、空からする偵察に對しても容易に發見し得ない程度に施されてゐた。

ジョホール水道正面には大なる施設はなかつたのであるが、十二月八日皇軍のコタバル上陸以來、俄かにこの陸正面の防備強化に努め、ジョホール水道正面に萬般の防禦施設、陸橋東側高地には重砲陣地、あるひは各所にトーチカを急造してゐたのである。

元來シンガポール要塞は海正面の防禦に完璧を期し、陸正面は第二義的に考へられて居たものゝ如く、殆んど開戦直前に至つて漸く強化策が講ぜられたものである。而もその重點はマレー半島岸よりする攻撃に對して防備を固めてゐたのであるが、豈計らんや、皇軍の神速なる精銳はマレー半島のジャングル地帯を突破

して、マレー半島西岸を着々と進攻、作戦開始以來五十五日にして、一千五百キロを突破し、而も敵の防備薄弱な地點、要塞の背面から果敢なシンガポール攻略の火蓋が切られたのである。

昭和十七年二月十五日午後七時五十分、シンガポールは陥落した。

全島これ要塞、近代的武備の鐵壁を以て蔽はれ、全世界が難攻不落と認めて怪しまなかつた大要塞島も、皇軍進撃の前には一とたまりもなく潰え去り、總攻撃開始以來僅かに三日にして、敵軍は全面降伏、開城を誓つたのであつた。

マレー作戦の完了と共に、シンガポール攻略戦が、銃後に於ける中心話題となつた時、精強世界に誇る皇軍と雖も、相當の犠牲なくして、これを陥すことは出来まいと思はれたのであるが、猛攻僅かに三日にして世界的大據點を覆滅し去つたのである。

皇軍の精強さ、作戦の妙、銃後の歡喜は勿論、全世界を驚倒せしめたのである。以下簡單にその作戦經過を辿つて見よう。



敵はマンダイ山、テイマー山、水源地高地、ボンバック山の四高地に要塞設備を施し、これを陸正面の抵抗中樞とした。いよいよシンガポール島攻略戦開始に際して、同島防衛に任じた敵軍兵力は、要塞守備軍と、マレー敗残部隊とを合し大體三、四萬と見られた。

かくの如く大軍を擁し、完全に防備設備の施されたシンガポール島に對して、皇軍の作戦は、堂々敵前上陸に依つて開始されたのである。

幅一キロ乃至二キロのジョホール水道を距て、對岸への渡過上陸作戦は、通常の上陸作戦とは異り上陸正面が非常に狭く、而も對岸には大要塞トーチカ・ライオンを控へて、一切の防備、妨害施設の上に湿地帯等の地形の不利があり、將に香港攻略戦以上の惡條件の下に、初めから強襲戦法が取られたのである。

先づ、二月四日以來ジョホール・バル北側地帯に布陣した我が有力な重砲陣地からは、主としてマンダイ、テイマー地區の敵抵抗中樞陣地に間斷なく巨彈を浴びせ、凄烈な猛攻撃が展開された。航空部隊は戦爆連合の大編隊が連續出動、敵

の要塞をはじめ、トーチカその他の軍施設に對して、晝夜を分かたぬ猛攻撃を展開したのである。

この間に我が、渡過準備は着々と押し進められ、二月九日午前零時を期して一齊上陸が敢行された、未明までに、わが主力部隊も渡過上陸に成功し、シンガポール島上確固たる地歩を占めてしまつたのである。

而もこの間にあつてウビン島に奇襲上陸せる右翼部隊の『陽動作戦』は我が作戦の巧妙さを遺憾なく發揮し、敵陣營をすら感嘆せしめたものであつた。

かくて第一次、第二次上陸部隊は續々と増強され、先鋒は既に、上陸戦闘に移り破竹の勢ひで猛進撃を展開し、突撃、又突撃、所在の敵を撃破して先遣左翼上陸部隊は九日午後七時にはテングー飛行場附近一帶の陣地を奪取した。

敵はバンジャン西北高地からゴンバック山を経てテマ山南側高地に亘つて主抵抗陣地に據り、わが軍の進攻を拒否しようとした。皇軍はジャングルとゴム林と、隨所に散在する湿地帯の泥濘を克服しつつ、執拗な敵軍の抵抗を果敢に破砕



して、一路南進、十日午前には早くもバンジャン山、ゴンバック山、バトック山一帯の高地を激戦の後奪取した。

續いて要塞の左翼點ブキテマの堅壘に據る敵軍に對し夜襲攻撃を準備した。紀元節をトして、敵都シンガポールに突入することこそは、司令官以下一兵に至るまでの烈々たる熱望であつた。

かくて十一日の未明には要塞ブキテマ一帯の高地を占領し、シンガポール市街を指呼の間に望み、こゝにシンガポール全島制壓の態勢を整へたのである。

紀元の佳節十一日午前八時、皇軍先鋒部隊は遂に待望のシンガポール市街に突入、感激の日章旗を高々と翻へし、敗殘の英軍の風潰的掃蕩を開始した。こゝに於てさしも頑強に抵抗した英軍も遂に白旗を掲げて我に投降し、英帝國東亞侵略の最大據點シンガポールは遂に陥落したのであつた。

#### 四、奇略縦横「陽動戰術」の妙

シンガポール攻略戰は、凡ゆる戰鬪部面から見て歴史的大作戰であつたが、指揮統帥の完璧といへる巧妙な敵前上陸、大膽な海上機動や、陽動戰術の如き戰略戰術の面に於ては、將に全世界の専門家を驚倒せしめるものがあつたのである。

即ちマレー截定後に於いて、ジョホール・バルを中心にシンガポール攻略の二期大作戰の準備を進めた我が兵團は、先づ東岸部隊が、ウビン島上陸に依りシンガポール東岸から猛襲するかに見せて、西岸から他の部隊が一舉に上陸作戰を敢行し、忽ちにしてテンガー飛行場を奪取した。この部隊が飽まで猛進撃をするかと思れば、突如、中央部隊が、ジョホール水道を渡過強襲するといふが如く、恰も盤上に名人棋戰を見る鮮かさであつた。而も作戰に呼應して陸海荒鷺部隊がびつたりと呼吸を合せて活躍し、重砲陣の活躍、海軍艦艇の協力等全く一糸紊れず整然たる指揮統帥の下、勇猛果敢なる進撃が行はれたのである。

皇軍の精強さが、その勇猛心や、裝備にあるばかりでなしに、戰略戰術の頭腦的優秀さに於て如何に卓越せるかを遺憾なく發揮したものであつた。而も左翼部



隊の所謂『陽動戦術』の如きは、その至妙、用兵戦術上の極致といふべく、聞くものをして將兵の勞苦も忘れ、思はず快笑せしめる痛快無比の戦法といふべきである。

大楠公や、眞田幸村もどきのこの奇襲戦法は、シンガポール上陸の殿り部隊であつた左翼部隊に依つて行はれたのであるが、中央及び右翼兩部隊に後れて上陸したのも豫定の行動であつたのである。

九日左翼部隊の渡過點は、ジョホール水道とスクダイ河との中間から渡るやうに割り當てられて、午後十時四十五分、第一回の上陸は敵の虚を衝き一兵も損せず成功したのであつた。しかし陽動作戦はそれより以前、友軍部隊の上陸作戦を援けるため、八日以前一週間、この部隊がウビン島占領までの間に全智を傾けて行はれたものである。

陽動作戦といつても、その時と事情に依つて作戦形態は非常に異なるのであつて原則上の戦例は第一次世界大戦等にも見られないわけではないが、我が左翼部隊

は、單に敵の視覚を刺戟する方法の他、聽覺、觸覺で誤魔化し戦術まで考へ出し  
てゐるのである。

主たる作戦目的は、シンガポールの如き、何處といつて蟻の這込む隙もない完全防備を施した目標に向つては、何とか敵の注意を一點に集中せしめ、これに依つて生じた敵の配備の間隙に乗じて攻撃を開始する、つまり敵の固めた體勢を崩す一手段であり、上陸もしないセクター軍港正面に、強襲上陸をするかの素振りを見せることであつた。

この爲めにゴム林の中で懐中電燈を點滅したり、うす明りをつけた空自動車を走らせたりは月並な方で、ジョホール・バルから東廿四キロの一帶に互つて、兵の所在を多く見せるため、或る場所では煙草に火をつけた兵隊が、十數キロも走つてから、また煙草に火をつけるといつた活躍もある。

また海岸へ監視兵をちらつかせる。細々と煙をあげさせたり、それとなく小舟を集めさせるなど、凡そ考へられる凡ゆる手段を一通りやつつけるのである。



聽覺に訴へる手段としては、多く動物が動員される。犬をひつばたいて、突拍子もなく吠えさせたり、鶏の首を締めつけたまゝしく泣かせたり、愉快なのは豚を鳴かせる方法だ。籠に入れて蚊取線香で燻しておくと、一と晩中鳴き続ける。陽動の中でも一番實際的なのは觸覺をくすぐる手段である。飛石傳ひに上陸すると見せかけるため、八日午後零時四十五分、〇〇、〇〇の兩部隊がウビン島を占領した。

この時の敵はセダー、チャンギー兩方面から挾撃の彈雨を浴びせて來たが、大きな陽動であるから、じつところへて射たせてるなければならなかつた。

チャーナルが、シンガポール防備の悲鳴第一聲をあげたのはこの際であつた。つまり我がシンガポール上陸作戰の前日である。

## 機動作戦の威力

### 一、マレー作戰の機動力

皇軍の機動作戦に於ける威力は、マレー半島攻略に於て遺憾なく發揮された。平地機動に、山岳機動に、機動戦こそは皇軍得意中の得意である。特にこの機動力の基底をなす精銳なる工兵部隊、優秀なる輜重部隊の活躍は、歩、砲、戦車等凡ゆる僚軍進撃部隊の功績と共に、世界戦史稀有の戦例を残したものと云へる。上陸以來五十五日、踏破行程千百キロ、舟艇機動約六百五十キロ、橋梁修理二百五十、この間主力の交戦實に九十二回、敵二個師團の兵力を撃滅し、俘虜八千遺棄死體約五千、鹵獲品は火砲、機銃、戦車、装甲車、自動車等山の如く、糧秣燃料の如きは爾後我が作戦軍の自活を充して十分なる多量を獲得したといふ大戦



果を擧げたのである。

主力のシンゴラ上陸は宣戦布告の八日、午前四時十二分、こゝよりジョホル・バルまでの縦貫鐵道の距離が千百キロであるから、これに従つて五十五日で全半島を席捲したとしても、皇軍の進撃速度は、一日平均二十キロとなる。電撃戦をもつて鳴るドイツの東部戦線進撃も十九キロ強を超えなかつたのに比べて、正に世界驚異の電撃といへる。

殊に皇軍の進撃路は曲りくねつた道路、又はジャングル、濕地帯を突破しての難路を克服してゐるのであるから、實際には一日平均二十キロを遙かに超えてゐるわけである。

支那事變でその神速を謳はれた漢口攻略戦も之に及ばず、マニラ攻略戦もリンガエン上陸以來十一日間だけの平均である。マレーでは實に五十五日の長期間、同一部隊が連続踏破して二十キロ以上の速度を出したのであるから將に電撃新記録である。

マレー半島はジャングル地帯を貫いて道路網が整備發達してゐたことも一つ的好條件であるが、皇軍の機械化裝備が完全だつたこと、その上鹵獲した敵の戦車自動車、ガンリンが非常に多量にあつたこと、而もこれが皇軍の進撃にその儘役立つていよゝ快速を可能にし、温度は平均百二十度位の酷熱下にはあつたが、作戦が比較的好天候の天佑に恵まれたこともその原因であつた。

マレーの地形は周知の通り、熱帯ジャングル地帯や、沼澤濕地帯を突破進撃したのであるから、その苦難筆紙に盡し難いものがあつたのである。而もシンゴラからジョホルクルまでの間、破壊された橋梁は大小二百五十もあり、道路も壊されてゐる。これを一々改修しつゝ進撃を續けたのであるが、我が工兵部隊は電撃部隊に先行してこの橋梁、道路の修築に當り、一日平均四個以上の修築を遂行してゐるわけである。

英軍は強力な爆薬を以て、計画的に破壊して行くのであるから、これに應急の修理を加へるとしても容易でないのに、戦車、砲車等機甲部隊の進撃に耐へる程



度の修築は容易ならぬ難事業である。

殊に破壊箇所が英軍から射撃し易い地点が選ばれてあり、而も豫じめ敵砲兵が射程距離を測定しある爲め、工兵部隊が、いざ修理にとりかゝると、その作業場は忽ち彈巢となる場合が多かつたのである。

而も工兵部隊は作業中銃をとつて戦ふことは許されない。僚軍の掩護戦闘はあつても、工兵の作業は多く砲煙彈雨下に身を晒らして決死の操作を続けなければならなかつた。

修理した橋梁二百五十のうち、川幅は、三百メートルから十メートル位まであつた、三十メートル位の川が一番多く、底も見えない激流が滔々と流れ、鰐が棲む川もあり、これに拂はれる勞苦は並々ならぬものがあつた。

ところが狼狽した英軍は、橋梁は破壊しても、その附近に修理の材料となる木材を残して退却してゐるので、戦ひのはじめの頃は、修理材料にはあまり不自由はしなかつたといふ。しかし幾許もなくこれに氣づいた敵は、橋梁附近の材料は

焼いたり流したり破壊してあつたため、後半戦に於ては材料蒐めに苦心し、特に釘や針金の缺乏に一番困つたといふ。

マレー前線の工兵部隊の間には『敵は河だ』といふ合言葉さへ生れたほど、河と闘ひ通したのである。電撃を誇るドイツ工兵隊一個中隊が今次大戦中、西部戦線四十五日に發揮した架橋修理能力は一日九メートルであつた。マレー戦線に於ける日本工兵隊が示した速度は平均十メートルを突破し、ドイツの戦例を遙かに凌駕してゐるのである。これに依つて日本工兵の技術の優秀さ、行動の逞しさが如何なるものであるかを識ることが出来る。

忙しい工兵部隊の間では『友軍に追撃されてゐる様だ』と嬉しい苦情が出る。それだけに進撃部隊の工兵隊に対する感謝は非常なもので、或る時は工兵隊の頭の上を歩兵部隊が『ありがたう』といつて通れば、水に七八分もつかつた工兵が『ありがたう』といふ。進撃の神速さに、架橋の間に合はぬ時は人柱ならぬ人橋をかけて、全く涙ぐましい努力と勞苦が續けられるのである。



材料に使ふ熱帯樹は總て重く、特にゴム林はいたるところにあるが、この一本を鋸で切り倒す時、ゴムの液汁が出て来て、直ぐ鋸は動かなくなる。思つてもその勞苦の程が偲ばれるではないか。

工兵科出身の某老將軍は次の様に語つた。

『工兵の精神は、忍耐と剛膽につきる』

つまり敵陣地に日章旗を樹てに行く部隊に通を開いたり、肩を貸したり、又は決死突撃路を開いたりする。これを家庭に見るならば内助の功をつむ糟糠の妻のやうに、夫や息子の凱歌を聞いて己も又喜ぶ日本婦人の精神に通するものがある。進撃部隊の苦難も非常なものであつた。西岸進撃の一隊は、ムアー河左岸、ゲマス附近で日光さへ通さぬジャングル奥深く迷ひ込み、食糧と水に窮し、汗をなめて渴を醫したといふ事實さへある。

猛獸は居る、毒蛇は蠢めく。慄悍無比の馬來熊、兇暴無類の虎、豹も屢々皇軍を惱ましたのである。その間にあつて交戦九十二回、一日平均二回の戦闘をやつ

てゐるのである。

コタバルに敵前上陸して間もなく少數の搜索隊は十二日夜半、大膽にも夜襲でジットラ・ラインを突破したが、緒戦で敵の第一線陣地に大打撃を與へたことがその後の戦局の進展に役立つてゐることは勿論、これが快速進撃の口火をなしたものとといへる。

ペナン島の無血占領をはじめ、二十三日占領したタイピンや、二十八日占領したイポーに於ても、敵は浮き足立つて、殆んど無抵抗のまゝ敗走してゐる。また一月十五日のマラツカ攻略後も、ネグリセンピラン州などは全州僅か一日で席捲したほどであつた。

## 二、立體、舟艇、山岳各機動

戦闘は常に壓倒的優勢裡に終始した。作戦は巧妙を極め、日本軍でなければ出来ない様な巧緻さを以て、いたるところに展開された。



先づ無敵空軍の協力である。空陸完全なる連絡の下、陸上部隊が前進すれば航空基地も前進、戦爆連合の間断なき攻撃出動に依つて地上部隊の進撃を援け、而もクワンタン、クアラ・ルンプールの確保に依つてシンガポールは完全に戦闘機の行動圏内に入り、爾後の空陸協同作戦はシンガポール攻略戦をも含めて、正しく皇軍の全威力を發揮し史上曾つてなき目覺しさを展開したものであつた。

西海岸進撃部隊の舟艇機動作戦こそは、全く敵の意表を衝き、その縦横の機略と戦術の巧妙さに列國をして驚嘆せしめたものである。

即ちシンガポール街道を驀進する主力部隊に呼應してペラ河を下つて敵の背後を衝いた一戦、敵潜水艦と浮流機雷、英海軍の制海權下の脅威を冒してマラッカ海峡を舟艇機動で後ろへ後ろへと廻つて敵を包圍したなどは、戦史に未だ見ない大膽な新戦法で、海洋帝國日本軍隊の獨壇場といふべきであらう。

山岳機動戦の困難さは既に支那事變に於ける戦況ニユースに依つて周知の事實であるが、山東戦線の太行山脈突破戦、或は山西戦線に於ける峻嶮の克服、更に

中支にあつては大別山系突破等、支那大陸各地の作戦に於て幾多驚異的戦例を残して來てゐる。

或る時は胸を衝くやうな急坂に砲車を引き上げたり、砲車の上らぬ時はこれを分解して運びあげ、又は千仞の谷に吊るし降ろしたりした。又或る時は一砲車に馬十四、五頭を付けて引上げようとしてならず更に四、五十人の兵が、馬に協力して懸聲諸共、五寸、一尺と文字通り一寸刻みの進撃を續けたこともあつた。斯る例は各戦線を通じて數限りなくあり敵彈雨下にあつても斯る活動が繰返されたのである。山東作戦、山西作戦は勿論、漢口攻略戦に於ける南下部隊の如きは城一山、終始山岳戦の連続であつた。

大東亞戦に入つてはビルマ戦線と比島戦に於けるバタアン半島後半戦がその主たるものである。或は重砲を、或は戦車を駆つて峻嶮の山岳地帯に驚くべき機動力を發揮したのである。これこそ必勝の信念に燃ゆる皇軍の逞しき行動であり、戦闘以上の戦闘であつた。



## 三、マレー作戦第一主義

大東亞戦争に於て、わが無敵陸軍が、その主力を注いだのはマレー作戦であつた。英軍が百年、鐵の防衛を建設したといはれるマレー千百キロの突破作戦と、シンガポール攻略戦ほど、その豪快さと緻密さとを以て、一億國民の琴線に觸れたものはあるまい。マレー軍作戦主任參謀談として公表された血戦記の中から、わが陸軍獨特の作戦を左に拾ひ出して見たいと思ふ。

捨身の戦法と、死してもやまぬ旺盛な攻撃精神とは、わが陸軍の傳統であるがこの雄大なマレー作戦が、その最初からよくこの傳統精神を遺憾なく發揮したものであつた。

わが無敵海軍さへも「制海權を得る以前にそんな無法に近い作戦は困難だ」と首をひねつた位の、定石破りの冒險を、そのスタートから、わが陸軍は試みたのである。即ち宣戦布告前、敵が完全にその海上勢力と空軍とを擁してゐる際に、

海南島の基地から數千キロの海上を、敵の飛行機、潜水艦の襲撃にさらされながら、タイ國東岸のシンゴラまで、大兵團を長距離海上輸送しようといふのである。常識的に云へば最初は少數の前衛部隊が進み、海軍、空軍の掩護下の上陸を敢行し、そして上陸地點を確保してから、初めて主力が上陸するのであるが、今度はその定石を破つて、いきなり部隊主力がどつと行く、〇個師團といふ大船團が、敵の準備周到な方面に向つて、電光石火、抜打的に上陸するといふ作戦であつた。

東部マレーの上陸地點附近へは英軍の優秀な飛行場が數箇所あり、コタバルには魚雷を抱へた英軍爆撃機が虎視眈々として待機してゐる。そこで先づ英軍に我軍の作戦企圖を察知されないやうに苦心し、南部佛印に進駐した時のやうに、バンコックに進駐するやうに見せかけた。乃ち二十數隻の大船團が堂々と敵の鼻先に廻つて、針路を北方に向け進撃する如く見せかけて航行し、その途中、突如百八十度の大轉針を斷行して一路南海を南下し、シンゴラに向つて潮の如く殺到した



のである。即ち肉を斬らして一撃骨を断つ、完全な捨身の戦法であつた。

果然、この敵の意表に出た開戦は成功した。作戦當日、十二月八日午前三時四十分、山下軍司令官の船を先頭に上陸した。これも普通の常識から云へば一ヶ師團位上陸して、地歩を確保してから上陸するのであるが、この時、山下司令官は師團長として兵と同行しようと言はれ、これを實行されたのである。運送船では危険であるからと軍艦を侷めても、司令官は之を拒んだといふ。而もこの時は、船の三分の一は敵襲の爲め失はれるものと豫想されたので、師團長と別の船に乗船し、何れか一方だけが生残るやうにといふ悲壯な覺悟であつた。

無事マレーの國境を越え、英軍との第一回遭遇戦で敵を潰走させたが、橋梁を破壊されたため進撃に手間取るので、一計を案じ、これまで爆破された橋梁を前兵部隊が勇敢に突破して夜襲で敵を追散らし、その後で工兵が行つて架橋したのであるが、今度は歩兵の挺身隊が敵の陣地の奥深く進入して先廻りし、橋梁の爆破を防止すると同時に、爆破された橋梁に對しては、歩兵の掩護下に工兵が挺身

し、夜間等を利用して敵前架橋を行ひ、これが出来上つたら戦車を持つて来る。

戦車の後方にはトラックに乗つた歩兵を持つて来て渡河前進する。そのうちには挺身歩兵隊が、また夜襲で先の橋梁を確保する。この時にはもう既に後方の橋梁は出来てゐるから、味方の機械化部隊が突進して行き、敵の戦車、自動車と一緒にこんがらかつて進撃して行く。さうすれば、敵は橋梁を爆破しようと思つても、味方の戦車、自動車が一緒に交つてゐるので爆破することが出来ない。その隙に敵に交つて團子になつて、敵中に飛込んでしまふといふ戦法をとり、一気に敵中を突切るといふことになつたのである。

ジットラ線に掛り、チャンルン陣地突破後、猛烈な大スコール中に機甲部隊の奇襲を敢行して敵の不意を衝いて之を突破し、ジットラ線も遂に踏潰した。アロルスター飛行場を占領し、ペラクの橋梁線に達した。

それからシンゴラにあつた大きな〇〇艇を汽車で印度洋に運び、何等武装のない舟艇で敵の側背に移動攻撃を行ふと同時に、〇〇兵團は殆ど人の通ることも出



来ない大ジャングルを強行突破、ペラク河を渡り長隘路も突破した。

タイピン附近から〇〇兵團の〇隊は合計五十隻の舟艇に分乗せしめ、カンバル陣地を攻撃した。背後に廻つた〇大隊は、敵機の攻撃下に堂々、奇襲上陸を敢行した。

この時〇〇の舟艇部隊はグン／＼南下進撃し、一部一中隊は夜にまぎれてイギリス軍港に進入した。敵海軍も、まさか日本軍が軍港の中まで入つて来るとは思はなかつたので吃驚し、無防備の〇〇の舟艇とは思はず日本の砲艦と誤認してろくに交戦もせず逃げてしまつた。わが將兵の旺盛なる攻撃精神にはイギリスの指揮官も悲鳴をあげたといふ。かくて、マレー聯邦の首府クアラ・ルンブールも難なく占領された。有名なスリムの殲滅戦も、この背後海上迂回によつてあげられた戦果の一つであつた。

#### 四、敵は分散、味方は集中

シンガポール攻略作戦の主眼としたところは、軍の全力を擧げて、一兵も餘さず戦闘に参加させること、そして敵の兵力を分散させることであつた。野砲一門に對して彈一千發を用意し、舟艇〇〇隻が計算された。そこで急速に鐵道を修理して、ジョホール・バルの線に彈丸急送の案を樹てると同時に、〇〇、〇〇兵團と〇〇、〇〇兵團を攻撃に充て、その後シンゴラに上陸した〇〇、〇〇兵團を全トラックを以てシンゴラまで迎へに行つた。距離にすると、下關に上陸した部隊を東京からトラックで迎へに行つたといふ譯である。

敵が如何なる手を打つて來ても絶対大丈夫な作戦として、我軍の一兵一銃と雖も無駄なく攻撃に参加させ、敵を分散させ、その間隙に乗じて我が兵は集中攻撃を敢行することになつたのであるが、そのためには、我が作戦企圖を敵に察知されないやうに努めることが第一要件であり、その次ぎには、敵部隊を出来るだけ分散せしめておき、こちらは其の反對に、一點に集中するといふ方針がとられたのである。



そこで〇〇、〇〇兵團はシンガポール島に沿つて、ジョホール・バルから東方にニセの行動を起し、東方ジョホール水道方面より渡河する如き勢ひを見せ積極的に戦を挑み、〇〇、〇〇兵團は真中に集結して敵を威壓し、〇〇、〇〇兵團は後方のゴム林中深く徹底的に隠すといふ作戦を執り、この基礎態勢の上に將校斥候だけをジョホール・バルの線に沿つて出沒させ、附近住民は、二十キロ以北の線に全部引揚げさせた。

これは機密漏洩と、危険を避けるためであつた。そしてジョホール・バルの線には一門一千發の弾を持つた重砲を全部展開させ〇〇、〇〇兵團は東方におき、自動車の往復を頻繁にし、夜間などもヘッドライトを點けて、東方に敵を牽制することに努めたのである。

八日の夜十二時を期して、豫定通り各兵團は敵前上陸を敢行した。十日の朝は〇〇、〇〇兵團もシンガポールに渡過、テンガー飛行場を目指して進んだ。〇〇兵團の一部はブキ・テマ高地に向つて突撃した。この時、敵は如何にもあわ

て、動揺してゐた。味方の有力な砲兵の到着を待つてゐたのでは、敵にも落着きを與へることになる。こゝで敵に二、三日の暇を與へたならば、敵も増援し、コンクリートの主抵抗線に入つてしまふ。さうすれば、十日や二十日攻撃しても簡単に抜くことは出来ない。潰走する敵に追迫り、敵を動揺させてゐるこの時こそ攻撃の潮時だつた。

各兵團は極めて勇敢な行動で攻撃を開始し、十日午後五時より夜襲突撃により白兵戦を敢行、十一日、紀元節當日の早朝、遂に標高一七七メートルのブキ・テマ高地を奪取した。

十一日の午前、飛行機によつて降伏勧告を行ひピラを撒いたが返答がない。夕刻に至つて敵の反撃は次第に激烈さを加へて來た。十三日には我が砲兵部隊も戦鬪に参加し、敵重砲部隊と熾烈に交戦した。

敵は、こつちに來ると思つて準備してゐた方へは、日本軍がサツパリやつて來ない。美事裏を搔かれたところへ各兵團が併進し、恃む要衝ブキ・テマ高地を取



られ、手も足も出ず、シンガポール市の周縁で逆襲を繰返したが、その都度撃退された。そのうちに〇〇兵團が前進し、敵の退路に廻つてこれを遮断の態勢をと、他の兵團はテツベルギー高地を奪取、一部は市街に突入して敵を制壓、連絡路線を寸断した。遂に英軍はたまりかね、十五日午後七時五十分、我に數倍する兵力を持ちながら手を揚げてしまつたのである。

要するにマレーの作戦は終始定石を踏まず、確信を以て敵の意表に出でつゝ、先手先手と敵を制して行つたのであつて、實にわが陸軍傳統の戰術を最も巧みに驅使したものに外ならぬ。

## 皇軍獨特の「夜襲」

### 一、日本戦史に無数の快勝

香港、シンガポールと、大英帝國が世界に誇つた「難攻不落」の要塞を、僅か數日の間に陥落せしめたのは、主として皇軍獨特の夜襲の力に負ふ處が多かつた。夜襲は日本陸軍傳統の華と謂はれてゐるが、日本の夜襲といふのは、飽くまで奇襲戦法であつて、昔から多くの名將が屢々試みてゐる。日本の戦史を見ると、數へきれない位、野襲によつて快勝を博した事實がある。

夜襲といふのは、元來寡少な兵力と、敵よりも劣つた裝備で、敵の虚を突くといふところが狙ひである。それであるから夜襲の目的は決戦ではなく、味方の兵力を隱密裡に動かし、奇襲を以て敵の據點を奪ひ、次に來るところの主力戦を、我に有利に導くといふところにあるのである。

日清、日露の兩戦役では、日本軍は相手よりも兵力、裝備ともに劣つてゐた。そこで専ら夜襲で奇襲を行つては、次から次へと敵の據點を叩きつぶし、そして最後の決戦に勝つたのであつて、殊に日露戦争の弓張嶺や三塊石の夜襲は有名である。



日清戦争で負けると思つた日本が支那に勝つたので驚いた世界各国は、續いて日本がロシアに勝つたので、度膽を抜かれ、一體日本はどうしてこんな強いのかと、改めて日本の強さを研究し始めたものである。そしてその結果、日本軍の強いのは大和魂と獨特の夜戦のおかげだといふことになり、各國とも日本式夜戦を真似て見たのであるが、大和魂の持合せのない彼等には、形だけは出来てもどうしても氣合がかゝらない。

日本軍が夜戦に強いのは、傳統的の日本精神、即ち皇軍魂に出發してゐること勿論であるが、平素の訓練も、如何にして夜戦に勝つかといふことに主力を注ぎ演習も、晝間よりは夜間が多い。これを日本軍は日清戦争以來、五十年近くも續けて來てゐる。外國の兵隊は、夜は寝るものだと思つてゐるが、日本の兵隊は、夜は戦ふものだと訓練されて來てゐるのだ。

日本軍の夜戦は、一發の彈丸も射たず、全く銃劍だけで敵へ近づき、壯烈な白兵戦をやる、格闘をやる。而も死を怖れない、これが日本軍の強味である。とこ

ろが外國軍隊の夜戦では、堂々と大砲を射ち、機關銃を發射し乍ら進んで來る。そして敵に接近すると、サツと引揚げてしまふ。

蔣介石軍の夜襲が、大體外國一般の夜襲と見て差支ないと謂はれてゐるが、堂々とラッパを吹き乍ら、やるぞくと脅かし乍ら夜襲して來るが、一定の地點まで來ると、サツと逃げてしまふ。外國の夜襲は、であるから、決して奇襲ではないのである。

香港もシンガポールも、要塞攻略戦は主として夜戦でやつたが、これは、イギリス軍にしてもアメリカ軍にしても、装備は優秀だから、白晝堂々と正面から戦つたのでは、如何に日本軍が強いと云つても、相當の損害を覺悟しなければならぬ。それと、最後には勝つても陥落までには餘程の時間が掛かる。それで夜戦を主としたのである。

## 二、實戦より辛い猛訓練



如何に優秀なる日本軍に對しても、六ヶ月は死守して見せると豪語してゐた香港島が、僅かに十八日で、あつけなく我が軍門に降つたのであるが、その陰には皇軍將兵の、次のやうな涙ぐましい猛訓練と、周到な準備が行はれてゐたことを見逃してはなるまい。

即ち、香港島攻略に當てられた現地部隊は、香港島の峻岨な地點に臨み、これに極めて類似してゐる廣東附近の山岳をひそかに演習地とし、長期間に亘つて香港攻撃の作戦と準備に、日夜を分かぬ猛訓練を行つたのであつた。この訓練の重點は「夜襲」と「トーチカ攻撃」におき、しかも晝間は「夜間眼鏡」と稱する眞黒な眼鏡をかけて視界を夜間と同じ状況におき、そして夜襲の訓練をしたのである。

この部隊が開戦となつてから、九龍半島を席捲して、香港島の敵陣を望んだとき、「あゝこの山だつたのか」と期せずして將兵ともに叫び、初めて不斷の訓練の意味を理解し、「この山ならわけではない、夜襲で取つて見せる」と、一兵に至

るまで戦はずして既に敵を呑むの烈々たる氣概と確信を持つたといふ。

實戦に参加した第一線の將兵は、何れも「戦線の苦勞より、不斷の訓練の方がつと辛い」と述懐してゐたといふが、この一事はよく皇軍平素の訓練が、如何に猛烈なものであるかを物も語つてゐる。また皇軍將兵の一死殉忠の陸軍魂こそは、この不斷の猛訓練によつて培はれ、體得されたものであることを忘れてはならぬ。

## 陸鷲、得意の渡洋爆撃

### 一、初舞臺にこの大戦果

大東亞戦争の、世界戦史に比類なき雄渾無双の大作戦は、海洋を含んだ戦場に展開されねばならなかつたので、そのため開戦劈頭において、先づ制海權と制空



權とを確保することが絶對に必要であつた。周知の如き、緒戦に於ける空の大戦果によつて、今やその鵬翼下に、わが國防を不動の地位に確保してゐる帝國航空部隊の實力は、名實ともに世界空軍の最高峰であり、かつてはわが航空技術を過少評價し、日本人は航空に適せずと断定して、自らの優秀空軍を誇つた米英兩國に痛烈無比の衝動を與へたのである。

わが航空部隊は、今から三十有餘年前、東京の代々木ヶ原で當時の徳川大尉の手によつて、初めて空を飛ぶ壯舉が敢行されたことに始まつてゐる。爾來不撓不屈の精神力と、營々骨を彫る研鑽を重ねて、遂にけふの大戦果を獲得するに至つたもので、此の間、幾多先輩將士の尊き犠牲に對しては、頭の下るのを覺えるのである。

陸軍航空隊の初陣は支那事變であつたが、その威力を遺憾なく發揮した本格的の空中戦闘は、ソ聯空軍と相見えたノモンハンの戦闘と、今回の米英空軍撃滅戦である。

ソ聯が世界に誇る優秀機イー十六、イー十七戦闘機等一千餘機を叩き落してハルハ河畔の夏草を血に染めたノモンハンの空中戦闘は、陸軍航空隊にとつては正に一大試金石であつたと謂へやう。この戦闘に於て、わが陸軍は、すでにその性能と戦闘技術の優秀性を認められ、「日本軍怖るべし」との警告を世界列強の空軍に傳へた軍事評論家があつたが、その當時、日本が發表した大戦果に對して、列國の多くはわが謀略宣傳に過ぎずと見、倓安の夢を貪つてゐる状態であつた。

果然、わが陸軍の威力は、今次作戦の赫々たる戦果によつて裏書され、わが陸軍の再認識がなされたのであるが、時すでに遅く、哀れやわが輝く陸軍部隊の銀翼下に、スピットファイヤー戦闘機も、ハリケーン戦闘機も、完全に制壓され摺伏してしまつたのである。

今度の作戦で、陸軍はノモンハンでも経験しなかつた新しい體驗を得た。それは陸軍にとつて初舞臺とも云ふべき渡洋作戦であつた。即ち作戦の初期に當つて茫漠たる海洋を飛翔して戰場に乗込まなければならぬといふ困難に遭遇したの



である。殊に開戦當初、制空權を確保しつゝ、地上部隊の奇襲敵前上陸を空から援護して、縦横の武者ぶりを發揮した戦闘隊の如きは、基地から戦場まで荒れずさぶ海洋を征服し、加ふるに遠距離であるため、航続距離の最大限を飛ばねばならなかつたのである。

## 二、悪條件を無視した敢闘

凡そ、上陸作戦における航空部隊の最初の任務は、陸兵をまづ無事に陸揚せしめるにあるので、戦闘隊にとつては、悪條件を云々することは許されない。萬難を排して與へられた任務に邁進しなければならなかつたのである。こゝに、今次作戦の緒戦を飾る陸鷲の赫々たる功績が輝いてゐる。

マレー東海岸シンゴラ、コタバル附近の敵前上陸部隊に協力した戦闘隊は、南方の基地を決死の覺悟で出發し、南支那海を越え、敵空軍と猛烈な戦闘を行つた揚句これを撃墜破し、それから地上部隊の上陸作戦を順調に進捗せしめたのであ

る。比島戦線アバリ、ウイガン上陸作戦に協力した陸軍航空隊も、これと同様に果敢な渡洋作戦を執行して、空中戦闘に、爆撃行に、無類の精強さを示した。

この海に慣れない陸鷲にとつて最大の難事業とされたこの渡洋飛行の成功も、決して血氣にはやる一時の猪突的勇氣で行はれたものではない。實に、二年も前から周到な準備の下に研究された海洋航法によつて、猛訓練がたまれた結果である。更にノモンハンの教訓を肝に銘じて練磨した鐵火の如き陸鷲魂の火を吐く闘魂が、大空驅ける旺盛な攻撃精神となつたことも勿論であらう。

## 重爆隊の「去我就義」精神

戦闘機は単機で敵に喰ひ下り、縦横にあれば廻るのであるから、操縦者の血液からして鬪争的に沸き立つが、これに反して重爆隊は、戦闘目的上、行動が全然戦闘機とは違つてゐる。即ち重爆隊はたぎる血潮を押へて冷靜に、ガツチリと編隊を組んで團結の力で戦はなければならぬ。鐵石の團結が勝ちを制する戦闘要



素なのである。編隊の総合力で戦ふのであるから、個人の巧名心は飽くまで禁物である。この精神は「去我就義」と呼ばれてゐるが、重爆隊の絶対必勝、絶対不敗といふ事實も、一にこの精神から生れて來るのである。

どんなに苦しい戦闘でも隊長を中心に、編隊をくすさず戦ふのである。たとひ自分を殺しても、編隊中の自己の地位を死守する。自爆する時でさへ、編隊から缺ければ、僚機が困りはしないかと氣遣ふのである。

この編隊精神を物語る實話がある。マレー戦線〇〇爆撃に行つた或る重爆編隊の一機が、挑みかゝる敵戦闘機五機と交戦し、正副兩操縦者とも敵機關銃彈を受けて右の腕が利かなくなつた。かうなると操縦も困難で、ともすれば編隊から缺けさうになつた。しかし編隊精神の權化ともいふべきこの兩操縦者は、お互ひに辛うじて利く左手で助け合ひ、一人の左手は操縦桿を、一人の左手はレバーを握りつゝ、二人三脚の決死の飛行で編隊を組みながら遂々某地まで辿りついた。この話などは實に「去我就義」の編隊精神に生き抜いた涙ぐましい實話である。

重爆隊の戦闘は、戦闘隊といろ／＼な點で違つてゐる。即ち、命ぜられた目的地に爆撃を敢行するまでに、まづ敵の戦闘機と戦はねばならない。また地上砲火の高射砲の彈幕を突破しなければならぬ。敵の戦闘機と交戦するためには編隊の團結力を固め、各機の火力を集中して戦ふが、高射砲の彈幕を避けるためには高度を七千米から八千米位とらねばならない。ところが高くなればなるほど爆撃はむつかしくなる。その上に酸素量が減少するので呼吸が困難になつて來る。普通、酸素の量は五千米で地上の約半量、七千米で三分の一から四分の一に減少する。それで呼吸困難から來る運動の不自由とも戦はねばならぬ。實にその苦心たるや容易ではないのである。

今日、わが重爆隊の光輝ある戦果を見るにつけても、我々は、關係將士の慘憺たる苦心と、今日の重爆隊精神を生んだ故實藏寺中將の遺勳を偲ばねばならぬと思ふ。



## 落下傘部隊、決死の訓練

### 一、全滅の恐れ多き部隊

多年の覆面を脱いだわが陸軍落下傘部隊は、蘭印最大の油田地帯であるスマトラ島のバレンバン附近に奇襲降下し、敵を撃破し、飛行場其他の要地を占領し、また油田地帯を確保して、初陣の一戦に華々しい大戦果を収めたのである。

國民一般は、そんな部隊があるかどうかさへ知らない間に、黙々として今日に備へ、血みどろの猛訓練が行はれてゐたのである。

落下傘部隊は奇襲戦法でなければ成功しないもので、その戦闘は、徹頭徹尾孤軍勇戦である。飛行機の上から、落下傘一つを頼りに、少ない兵力で敵陣の真只中に飛下り、兵力の増援、糧食の補給も直ぐには期待されない全くの孤立無援の

状態で勇戦奮闘し、或は戦略上の要點を占領して、味方の主力、或は友軍が来るまでそこを持ちこたへ、或は敵の重要施設を破壊して、全軍戦勝の端緒を開くべき重大任務に服するのである。正に空の決死隊であるが、しかも決して全滅してはならない決死隊で、不成功に終わったからとて、やり直しの出来ない部隊である。敵地の奥深く入るのであるが、武器といつても軽砲、機關銃、小銃位の僅かな武器しか持つてゐない。しかも兵力に於て敵よりも極めて少いのが常である。随つて普通常識で考へても、全滅になる公算が非常に多い部隊である。事實歐洲の經驗ではその成否相半ばしたと謂はれてゐるが、今次の我が落下傘部隊は完全にその使命を遂行してこの成功を収めたものである。これ素より大稜威の然らしむる所であるが、統帥部の運用機宜を得たこと、皇軍將兵の素晴しき殉忠、不屈の精神、並に平素の血みどろの訓練の賜であると言はねばならぬ。

この落下傘部隊に入るものは、死生の觀念を超越し、勇斷決行の氣力に富むものでなければならぬ。「任務を達成せずんば死すとも已まず」底の、烈々たる



氣概あるものでなければならぬ。しかも心中一點の曇りなき共同精神によつて、鐵石の團結を固め得るものでなければならぬ。故にこの部隊の志願者は、全軍の志願者の中から最適任者を選びすぐつて取るのである。ところが、係官の手許には將校、下士、兵を問はず、血書の志望嘆願書が山ほど集つてゐるといふから誠に頼もしい限りではないか。

## 二、先づ一日六時間の猛體操

バラシユート降下の技術は、素より短日月の間に出来るものではなく、また如何に旺盛なる精神力を必要とするかは、改めて謂ふまでもあるまい。入隊後の訓練は、火の出るやうに激しいものである。初めは午前、午後各三時間、ぶつ通しで體操をやる。落下傘で降りる時一番むづかしいのは接地の瞬間で、四、五メートルの高さから平地に飛び降りた位の衝動が普通である。風のある時などは、恰度進行中の電車から飛び降りるやうだといふ。膝を真直ぐにでもして降りやうも

のなら、骨折や、足首捻挫位の危険はしよつちゆうだ。それを防ぐため、普通體操、機械體操、跳躍體操等、あらゆる體操をやつて、身體を柔軟おく。

この訓練が一通り終ると、實際に飛行機に乗つて、それから飛び降りる練習をやる。開傘したり、しなかつたりすることを是正するため、飛び出す時の姿勢を抑制する。速力の早い飛行機などの場合は、飛び降りてから落下傘が開くまでの衝撃、殊にバツと落下傘が開く瞬間など、まるで首が折れさうだといふ。また風の強い時は、開傘降下中、思はぬ方向へ吹流され、目的地に降りることすら出来ないこともある。そのためには、紐の操作によつて、思ふ場所へ着地する練習も必要ならば、着地してから風に吹かれる傘を沈静させる技術も必要である。

技術上にも、このやうに練習が必要であるが、その精神要素方面の涵養練には、より以上の猛訓練が必要である。さうして、かうした特殊の部隊であるから訓練の餘暇は、少しは人間らしく樂をさせて貰へるかといふと、さうではない。大體が奇襲が目的の部隊だから、人里離れた山の中や、草つ原など、住居も娛樂



も、時によると水さへも不便なところで、幾日も幾日も休むひまなく、黙々としてこの激しい訓練を續けてゐるのである。

### 三、親兄弟にも言へぬ辛さ

一般國民には素よりのこと、たとへ名譽の負傷をしても、親兄弟にさへも、告げられないこの苦闘である。しかも誰一人として不平がましい文句をいつた者もないといふ。「苦しくともわれ／＼はこの訓練によつてお國のお役に立てばそれで満足だ」、みんながかういふ氣持で訓練をつゞけ黙々として戰場に向つて行つた。准士官になると落下傘部隊を去らねばならぬからと、自分の進級さへ斷つて戰場に赴いた下士官もあつた。みんなが一人残らず、この意氣だつたといふ。

この血みどろの訓練に訓練を重ねたわが落下傘部隊なればこそ、一たびスマトラの空に展開するやバレンバンの要衝を忽ちに奪取し、わが大東亞戦争の天目山を陥れたのだ。壯なるかな、わが落下傘部隊魂よ！

## 第三 戰場に現れた陸軍魂



## 熾烈なる攻撃精神

### 一、七生滅賊の崇高な忠節心

凡そ如何なる戦ひに於ても、皇軍將兵の行動は、一つとして熾烈なる攻撃精神の現れでないものはない。「熾烈なる攻撃精神」こそは、實に忠君愛國の至誠より發する軍人精神の中心であつて、「必勝の信念」の第一の要素とされてゐる。明治維新の志士平野國臣が、「敷島の錦の御旗をもちさ上げ、皇御軍のさきがけやせん」と歌つたのは、よくこの攻撃精神を現はしてゐる。

攻撃精神は、單に攻撃の時だけに現れる精神を云ふのではない。攻撃であれ、防禦であれ、強烈な敵愾心に燃え立つところの積極的な心理をいふのである。そして斃れて後もなほ已まない「盡忠報國」の崇高な忠節心に根源がある。楠子兄

弟は、『七度生れて朝敵を滅ぼさん』と云つた。この『七生滅賊』の精神こそは、皇國軍人の信條となつてゐる。大東亞戦争にもこの忠君愛國の精心の發露である幾多の忠勇義烈な行動を見ることが出来る。

マレー作戦に於けるコタバル敵前上陸戦は、極めて至難な戦ひであり、敵は正面百メートル間隔にベトンのトーチカを築き、そのトーチカの間には鐵條網をはりめぐらして、わが進撃を阻まんとしたのであつた。陸軍航空本部の西岡繁中佐は『この敵前上陸は常識では不可能に近いことだつた』と述懐してゐるが、この不可能を可能としたものは、なんであつたかと云へば、實にわが將兵の強烈な盡忠愛國心の發露である。わが將兵は、泳いで、敵陣に肉迫したが、敵の銃眼閉塞隊を志願した勇士は、各トーチカの銃眼を両手で押へ、身を押しつけて、肉弾で銃眼をつぶしたのであつた。この隙に部隊は一齊に上陸してゐる。このやうなことは、日本軍人なればこそ、出来るのであつて、世界にその例を見ないところとされてゐる。



昭和十二年十月卅一日、上海攻略戦で、鷹森、石井、田上の各部隊は、雨のやうに、降りそぐ敵陣をおかし、正午を期して、蘇州河の敵前渡河を決行した。いよく渡河五分前、鈴木部隊長は、敵弾雨下の濠中に部下を集めた、そして云った。

『これから我々は、蘇州河を渡つて敵陣に突入するのだ。隊長は、この晴れの使命を心から有難いと思ふ。諸氏は日本軍人だ、諸氏も嘸かし満足であらう。作業は、むろん決死の業だ、俺も生還を期してゐないが、諸氏もその覺悟だらう。もし何か遺言があつたら言へ、俺が聽いてやる』

しぼるやうな悲痛な聲で云つた。しばらくは誰も何とも答へなかつたが、やがて一人が叫んだ。

『自分達は、天皇陛下の大前に死ぬのを、本懐と思ひます。言ひ残すことは何もありません』『自分も本懐であります』『遺言なし』

涙のこぼれるやうな答がつづく。正午砲撃はピツタリやんだ。これが渡河の合圖

であつた、昔、大伴家持は『大君の邊にこそ死なめ、かへりみはせじ』と歌つたが、全くその通り、戦場の將兵は『自分達は、天皇陛下の大前に死ぬのを本懐に思ひます、言ひ残すことは何もありません』といつて、敢然、敵陣に突入してゐる。これらの勇士たちは、つぎの瞬間には大部分壯烈な戦死をとげてゐるのだ。この『盡忠報國の精神』は科學を超越した行動となつて現れる。

### 肺が飛び出し乍らなほ任務遂行

大東亞戦争にシンガポール島攻撃の魁となつた、ジョホール水道の強襲渡河作戦に於て、横山部隊山本喜久一兵長（大阪府出身）が、肺が肋骨から飛び出したにも拘らず、なほ任務を遂行したといふやうな例は、皇軍勇士にして始めて見られる攻撃精神の發露であると云へやう。

昭和十七年二月九日、皇軍は、星影淡い深夜のジョホール水道を越えて、シンガポール島西北角へ果敢な敵前上陸を開始した。山本兵長も工兵として、歩兵部



隊輸送のため三舟模合機舟の舵を握つて夜陰の海峡を渡りつゝあつた。敵はまだ氣づかぬらしく、彼岸はひっそり閑としてゐたが、對岸陸地へ三、四十メートルといふところで、マンガローグや、ゴム林の中から、敵の火器は一齊に火を吐いた。その一弾は、山本兵長の操縦する鐵舟の發動機附近に命中、不幸にも、同兵長はその破片を身に浴び、肺が肋骨から飛び出した。一瞬轉倒したが、バツと起き上るや、同兵長は飛び出した肺を押へつけ、三隻を抱き合せたのち、隣の舟艇に乗り移つて、その發動機を操縦しながら、直ちにシンガポールを目がけて突進した。やがて湿地帯へ取ついた鐵舟から歩兵後隊が躍出して進撃、無事に任務を果した山本兵長も續いて後を追ふやうに陸地へ這上つてはつたり倒れた。「あの岸邊へ着かなきゃ死に切れない」と口癖のやうにいってゐた精神力が、舟艇を對岸まで操縦したのだ。はつきりと二度も『天皇陛下萬歳』を叫ぶ山本兵長の悲愴な聲を砲聲の間に聞いた部隊長が、その傍らへ駆け寄つて抱き起した時は、すでに息も絶えぐゝになつてゐた。最期を知つた部隊長は『何か言ひ残すことはないか』

と呼びかけると、山本兵長は力なく首を振つたのち、

『どうもお世話になりました。どうぞ勝つて下さい』

虫の息で、たゞこれだけ答へて壯烈な戦死を遂げたのであつた。醫學上から見ると肺が肋骨から飛び出せば即死ださうであるが、七生滅賊の至誠に燃える山本兵長は、任務をなし遂げるまで死ななかつたのである。といふよりは、肉體は死んでも、精神力は死ななかつたのである。この話はシンガポール攻略の忠勇談として科學を超越した日本陸軍魂の華として全將兵を泣かせ、山本最高指揮官から、兵としてはたゞ一人名譽ある感状を授與されたのであつた。

『七生滅賊』について最も徹底した考へを述べてゐるのは、明治維新の先覺者、吉田松陰である。松陰は、その七生説において『私』のために『公』のことを忘れる小人は、みづから、天の理、天の氣にそむくことをしてゐるのであるから、死亡とともに、その身は腐り、その精神もほろびてしまふのであるが、君子、大



人は、その心は天理に通じ、その體は、宇宙の正氣を稟けてゐるのであるから、たとへ肉體は死亡しても、その氣魄、靈魂は、決して永遠にほろびるものではないと云つてゐる。そして松陰は、楠公兄弟の例をあげて、その心と行ひは、天の理にならび屬するものだから、楠公兄弟は、たゞ七生ばかりでなく、初めから死んでゐないのであると云つてゐる。この『永遠不死』の人は、戰場に於て幾多の例を見ることが出来る。日露戰の華軍神橋中佐、廣瀨中佐は、大東亞戰にも活躍してゐる。ハワイ攻略に、決死挺身隊となつた九軍神は、第二、第三の廣瀨中佐である。聽て、第二、第三の九軍神も次の戰ひに於て活躍するであらう。滿州事變に於ける爆彈三勇士は、支那事變にも、大東亞戰にも現れて、七生滅賊を行つてゐる。『七生滅賊』の言葉は、神國日本にのみ存在する烈々たる大和魂の發露であり、これあればこそ、皇軍は世界無比なのである。

吉田松陰は『勅を奉じて死す、死するもなほ生けるなり、勅に背きて生く、生くるも死に如かざるなり』と云つてゐる。これは軍人のみならず全日本國民の心

構へでなければならぬ。

## 二、義は重く死は輕し

軍人勅諭には『義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ』と仰せられてあるが、皇軍の攻撃精神は、この聖諭に發し『己が分を盡す』つまり本分に盡瘁することに外ならないのである。軍隊の教育は、結局、『死』を要求する。勇躍して死ね、といふのである。しかも實際に日本の軍人は無理に要求されて死ぬのではない、火のついた爆彈をいだいて、みづから進んで死地にとび込むのである。『天皇陛下萬歲』とさげんで、從容として死地につくことは、天皇をいたゞきまつるわが日本軍人にして、はじめてなしうるところである。

柳生流の極意は『大剛に兵法なし而して大剛とは死ぬことをいふ』と教へてゐる。また佐賀の『葉隠』も、『武士道とは、死ぬことと見つけたら』としてゐるが日本武士道は究極するところ『死』を學ぶ教へである。山本常朝が『何ごとも



みな偽りの世の中に、死ぬるばかりぞ誠なりけり』と云つたのは、日本武士道の精髓をよく云ひ現はしてゐる。薩藩の英傑、桐野利秋は『俺は銃弾がなくなれば刀剣をもつて戦ふ、刀剣折るれば腕力で戦ふ、腕力もなくなれば、精神と氣魄で戦ふ』と云つてゐる。『葉隠』にも『刀を打ち折れば、手にて仕合ひ、手を切り落されば肩節にてほぐり倒し、肩切り離さるれば、口にて首の十や十五は喰ひ切り申すべく候』と記してゐる。

シンガポール攻略戦で小野田隊の西尾一等兵（静岡縣出身）は、西北郊ブキテマ附近三叉路の砲兵陣地で射界の清掃作戦を續けてゐるところを、ゴム林の中から飛び出した敵兵三名のために手榴弾を投げつけられ、顔面に重傷を負つて兩眼が見えなくなつた。兩眼は見えないが、敵愾心に燃える同一等兵は、何糞ツとばかり三メートルほど前にゐた敵に、血達磨のまゝバツと飛びかゝり、その首ツ玉にしがみつき、最後の死力をつくしてぐつと締め上げ、敵を締め殺して壯烈な戦死を遂げた。残りの敵二名は、かけつけた戦友の手によつて芋刺しにされたが、

西尾一等兵こそは、死してなほ敵を斃すといふ超人的陸軍魂の現れであつて、攻撃精神の旺盛さを物語る一例である。

平野國臣は『神武必勝論』の中で、死を恐れない一兵は、よく十倍する敵に勝つゆゑんであると説き、

『それ兵、死を輕んずればつよく、死を畏るれば弱し、元來神州は義國たり。故にいやしくも義に當つては死至れども避けず、負究まれども押付を見せず、百騎は一騎に成るまでも、太刀の目貫のこたへん限り戦ふこそ、皇國武士の習なれ、かの西洋は情行利己の風、因より義をしらず、故に負とみれば、夷會（西洋軍の隊長の意）先走り、黑白（兵士をいふ）また散り、國のために討死し、家のために名を惜むといふことなければ、我兵の強からんこと、彼に十倍すべし、是れ我が勝算の三なり』

と云つてゐるが、勇躍して死ぬる境地には、まよひも惑ひもない、否そこに鬼神を避けしめるほどのつよい力が生れる。



安政六年、品川彌二郎が、その師吉田松陰に『死生の道』について問うたところ松陰は、

『死生の悟りが開けぬといふは、あまりに致愚故、詳かに云はん、十七八の死が惜しければ、三十の死も惜しく、八十、九十、百になりても、是で足つたといふことなし、草虫水虫の如く、半年の命のものあり、是を以て短しとせず、松柏の如く數百年の命のものあり、是を以て長しとせず。天地の悠久に比せば、松柏も一時蠅なり、たゞ伯夷などの如き人は、固より漢・唐・宋・明を経て、清に到つて未だ滅びず、何年ほど生きてたらば氣がすむことか、先の目途でもあることか。浦島、武内も今は死人なり、人間僅か五十年、人生七十古來稀、何か腹の癒える事を遣つて死なねば、成佛できぬぞ云々』

と云つてゐる。楠兄弟の如きは、若くして戦死したが、その魂魄は永遠に生きてゐる。肉體的な死が、すべての終りではない、上杉謙信は『大死一番、死中生あり』と單身犀川をわたつて、敵の本陣に突入したのであるが、このやうに死生を

達觀せるものには、恐るべき何ものもない。それ故に皇軍では、『義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも軽しと覺悟せよ』の聖諭に基いて、眞に『己が本分を盡す』ことに徹するならば、『心頭滅却すれば火もまた涼し』といふ信念が生れ、そこに『小敵たりとも侮らず、大敵たりとも懼れず己が武職を盡す』べき大勇が現れることを教へてゐる。

それから『大敵たりとも懼れない』といふのは、また本當の武勇の全部ではないことも併せて戒め、己の責任を感じ、『小敵たりとも侮らざる』精神の準備の大切なゆいんを教へてゐる。つまり、死生の悟りによつて平常備へるところがあつて、始めて大敵に對しても敢然身を挺して必勝の彼岸に突き進み、それがたとへどんなに困難な状況の中にあつても、不動の信念をもつて、任務遂行のため死地につくことが出来るのである。この精神こそ、攻撃精神の極致と云へる。

要するに軍人の最も大きな満足は、死に對する榮光であらう。青山巖少佐（島根縣出身）は昭和十四年十二月十九日、安徽省貴地縣馬山附近の戦ひに於て壯烈



な戦死を遂げたが、嚴父宛の最後の手紙に、死處を得て心ゆたかに散華する日を想ひ、私の心は静爽ですと云ひ、

いざ行かん野路も山路も踏みわけて

散りてぞきよきものゝふのみち

と歌つてゐる。この心境は戦場における皇軍將兵の心境であると思ふ。頭部貫通銃創を受けた勇士は、醫學的に見れば、その肉體的生命は正に即死である。ところが、なほ、『天皇陛下萬歳』を叫んでゐる。これは、理論や科學では説明の出來ないところである。人間は科學を超越した神祕を藏してゐる。即死者が『萬歳』と叫ぶのは、陛下に對し奉る最後の御別れであるとともに、任務を最善に盡した死の榮光を、心から感謝しての自然的發聲であると解すべきで、死の榮光を感じ欣然任務に斃れる——そこに超人的な攻撃精神が發露するのである。

前に述べた肋骨から肺が飛び出して、なほ任務を遂行した山本兵長などは全く超人的な攻撃精神であると云へるが、支那事變には、戦死しながら愛機を操縦し

基地に歸還した荒鷲があつた。それは昭和十二年七月廿八日のことである。事變勃發後間もなく南苑空爆に向つた陸軍鹽田部隊の一飛行機が、フラ〜状態で基地に著陸した。先着の僚機將兵が、氣づかひながら、かけつけて見ると、射手の行本信雄軍曹(岡山縣出身)は身に十數彈を受け機上に戦死してをり、操縦士の小杉慶造軍曹(弘前市出身)も、操縦桿を握つたまゝ壯烈な戦死をとげてゐた。小杉軍曹は心臟をやられ即死し乍ら、最後まで愛機を操縦して、死後に於ても、立派に一働きをやつてのけたのであつた。『葉隠』では、『首が落ちた位では人間は死ぬものではない』と教へてゐるが、小杉機こそは、正に、その好適例である。

### 肉弾を以て拓く『死の突撃路』

滿洲事變に於いて混成第廿四旅團工兵第二中隊の、作江伊之助、北川亟、江下武二三伍長が、三人一體となつて、導火索が燃え移り爆發時機刻々と迫る破壊筒を抱いたまゝ廟巷鎮の鐵條網に突入、自ら爆彈となつて突撃路を拓き、爆彈三勇



士として國民の感激崇仰の的となつたが、大東亞戦にもこの第二、第三の爆弾三勇士が現れてゐる。

比島に於けるバターン攻略戦は、最も激烈を極め、至るところに武勇談を残してゐるが、昭和十七年二月廿日、サマツト山獄の突撃路を拓いた西村英次郎隊の羽根憲三一等兵、黒茂夫一等兵（奈良市出身）は爆弾二勇士として、全將兵を感激させた。西村部隊の正面百五十メートル前方に高丘が連り、その彼方には交叉鐵條網が幾重にも張り廻らされ、火を吐いて我が進撃を阻止してゐた。西村部隊が前進するためには、この鐵條網を破壊しなければならぬ。しかも敵は一秒の休みもなく猛射し一面の彈幕を作つてゐる。この時、羽根一等兵は、坪倉勇二等兵（京都出身）の點火した破壊筒を兩わきにひつ抱へるや、眞一文字に鐵條網を指して突込んだ。羽根一等兵に續いて黒一等兵が突込む、點火してから僅に七秒間の神速の早業であつた。部隊將兵の眼は一瞬、肉彈となつて突進する兩勇士の崇高なる姿、身を粉にして突進する火箭工作の神々しい姿に凝集したが、次の

瞬間、轟然たる音響の中に、兩勇士の叫ぶ『天皇陛下萬歲』の聲を聞いた。さしもなく堅固を誇つた鐵條網も、肉彈の前にはひとたまりもなく潰え去つたのである。突撃路は開かれた、『進むはいま』と井上軍治准尉の率ゐる歩兵部隊は皎々たる月光を踏み、戦友の屍を越えてまつしぐらに突撃し、マサツトを占領したのであつた。

同じくバターン戦線的美談Ⅱ我が〇〇部隊は切り立つたやうな溪谷上にある敵陣地を前に對峙した。堅固な陣地に據る敵は、わが猛攻にも動搖の色がない。彼我の間隔は百メートル、高所にゐる敵は、わが方から、一寸鐵兜を見せても、ダダダッと機銃を齊射する。そこで淺野垣夫中尉（愛媛縣出身）以下〇〇名の勇士によつて決死の白襷隊が組織されたのであつた。星の降るやうな午前三時、淺野中尉は勇士一同に向つて、

『みんな俺と死んでくれ』  
と云ひ渡し、冷酒を汲み交した後、部隊長に向つて、



『萬歳の聲があつたら、突撃路が開いたと思つて下さい』  
と報告し、破壊班と突入班の二班を作つて勇躍壕を這ひ出したのであつた。それから暫くして、壕中の部隊將兵の耳に、突如として轟然たる爆破の音響が揚り、續いて突入の喊聲が聞えた。

『やつたぞッ』

と部隊長が壕から飛び出した時『萬歳々々』といふ淺野中尉の聲がした。『それ進撃の合圖だッ』ワツといふ喊聲もろとも將兵は破壊口から敵陣に殺到、約一時間間の死闘の後これを占領したのであつた。戦ひすんだが、淺野中尉の姿が見えない。もしやと敵死體をかき分けて探してゐるうちに、突撃路の正面に當る塹壕内に敵弾數發を受けて壯烈な戦死を遂げてゐる中尉を發見した。一發は咽喉を貫いてゐる。しかも敵弾は萬歳を叫ぶ前に受けてゐるのだ。どうして塹壕に突入したか、またどうして萬歳を叫んだか、常識では判断がつかぬ。これは死を恐れぬ勇士にして始めてなし得る神業であると云へやう。

これもバターアン半島ナチブル山攻略戦の肉弾勇士Ⅱ東海岸ナチブ山の敵陣破壊の日であつた。敵陣正面の〇〇部隊に前進命令が下つた。敵塹壕前方の鐵條網と地雷火陣地は、是が非でも突破しなければならぬ。かくして〇兵から六名の決死隊が選ばれたが、この時、『全員一度では、犠牲者を多くするだけだから、最初は俺がやつて見る、失敗したら後を頼む』と云つてのけたのは、大成繁夫上等兵（廣島縣出身）であつた。大成上等兵は〇〇筒を小脇に抱へるや猛然と壕を飛び出し、五十メートル突進して前方の鐵條網目にかけて〇〇筒を投げつけ突撃路が開かれたと見るや、肉弾となつて敵の地雷火陣に突入、アツと見る間に、轟然爆破する地雷の猛煙の中に散華した。かくして鐵條網、地雷火陣地は唯一人の肉弾によつて突破され、わが勇士は一齊に敵陣へ殺到したのである。

### 肉弾で押倒す敵戦車

平野國臣は『百騎は一騎となるまでも、太刀の目貫のこたへん限り戦ふこそ、



皇國武士の習なれ』と云つたが、全滅するとも、なほ攻撃精神を失はないのが、陸軍魂である。マレー・ジョホール州最大の敵據點クライ附近陣地戦で、下園一少尉（鹿兒島出身）の率ゐる我が挺身隊が、敵の懐深く突入し英軍ローヤル聯隊を向ふに突撃逆襲入り亂れて死闘し、全員悉く斬死して敵を走らせたといふやうな例は、この精神の發露である。このやうな熾烈な攻撃精神の前には、近代的機械力も物の數ではない。

バタアン戦線マリベレス山麓に描かれた中川決死隊の、斃れて後もなほ已まざる奮戦ぶりの如きも、陸軍魂の發露である。『ひらけ突撃路』の命令一下、雨とそゞぐ敵弾ものかは、死地を得たりと快哉を叫んだ十一勇士は、隊長中川澄郎少尉（三重縣出身）原修伍長、竹内勘也兵長、澤井上等兵、谷口龜五郎、大山甚之助、鈴木藤八、南務、宇陀光治、松葉滿壽夫、青木鹿三各一等兵である。『これが最後だ。肚の底まで吸ひ込まうと中川隊長のさし出す煙草金鶏を廻し吞んで、『さアゆかう』と隊長は決死の形相物すごく、敵陣めがけてかけ出した。黎明攻

撃の成否をかける肉弾破壊班は、月の傾く六時四十分、ヂリ／＼と敵陣に迫つた。この隱密作業は、幸ひ、敵に氣づかれなかつた。時期を失し、夜があけては一大事と逸る心を押へて、ブツリと鐵條網を切りはらつたのは原伍長であつた。この時、敵の曳光弾は、バツと十一勇士の姿を浮びあがらせた。サツと漲る必殺の氣魄、果せる哉、敵の重機は猛然火を吐いた。

敵はわが進撃を恐れ、屋根型鐵條網を十重廿重に百五十メートルあまりも續けてあつた。敵弾は、雨と注ぐ、發止と音がすると原伍長の手にする鐵線鉄は眞二つに折れてしまつた。だが全員決死の作業はつひに突撃路を開いた。第二陣に進まうとすると、今度は隘路に伏せた地雷が一齊に炸裂、そののみか、巨木に吊り下げられた空中魚雷が炸烈、樹上に潜む敵が一齊に射撃する。一人もあまさじと敵の重機二十が一齊に咆え立てる。まさに樹上、地上、地下、一分の隙もない死の彈幕であつた。これがため中川隊長は腹部貫通銃創で斃れ、次いで竹内伍長、澤井上等兵、鈴木、宇陀、松葉各一等兵も全身鮮血に染つて斃れたが、残りの五



勇士は屈せず、第二陣に突込んだ。

この時、○隊砲を先頭に突撃路を踏み越えて、わが精銳が殺到して來たと見るや、警笛を鳴して、敵陣から躍り出たのは十數名の狙撃兵を従へた三臺の中型戦車であつた。五勇士は小癩なりと、近づく戦車めがけて○○を投じて挑戦した。○砲隊はこの様を見て、戦友を殺すなど、ぐんぐん迫り、○砲隊と戦車の一騎打ち、彼我の距離はぐんぐんと迫つて僅か十メートル、轟然放たれた○砲の一發は見事、先頭の戦車の腹をえぐつた。

この時、日本刀の切れ味見よと、南一等兵（三重縣出身）は、敵戦車の砲塔めがけてヨチ登らうとしたが、苦しまぎれに放たれた戦車砲は、南一等兵に命中した。と南一等兵の口許にさつと日章旗が翻つた。倒れてから唇で鐵兜の中から引き出した日の丸である『戦友、後を頼む』一語、自ら日章旗で顔を覆うて息絶えた。敵はわが猛攻に全身火達磨となつて谷底に顛落する戦車を救ひもならず、二臺は遁走中ハンドルを誤つて谷底へと急いだ。かくしてマリペレス東北山麓の一

角は崩壊した。原、谷口、大山、青木の四勇士は、重傷にも屈せず、最後まで頑張つてそれぞれ『己が本分』を盡したのであつた。

### 三、攻精撃神を鈍らすもの

陸軍では、戦場に於て、攻撃精神を鈍らすものは、第一に、殉忠精神と責任觀念を缺くことであるとして、持に戒めてゐる。殉忠精神や、責任觀念をなくするのは、平素の意志鍛錬が不足するところに出發してゐる。意志の鍛錬が不足すると必然、驕奢となり、華靡の風に染まり、柔懦となり、或は安逸をむさぼり、だらしなくなり、志氣がゆるむ、また己だけよければ、他はどうなつてもかまはないといふやうな利己主義者になつてしまふ。従つて君國のために献身するといふことも、責任感をもつといふことも考へなくなる。これでは團結鞏固な軍隊は出來ないのである。殉忠精神と責任觀念が、極度に發揮された場合、如何に攻撃精神が旺盛となるかの實例は、後に述べることにするが、次に攻撃精神を鈍らすもの



のとしては、訓練の不足といふことがあげられる。

軍人は 明治天皇が軍人勅諭中におさとしになつてゐらせられる通り「戦ひに臨み敵に當るの職」なのであるから、その訓練や教育は、すべて明確なる生死觀の上にならなければならない。古來、わが武士道において、死に對する訓練をもつて、武道百般の根本義としてゐる。日蓮は「まづ臨終のことを習うて後に、他事を習ふべし」といつてゐる。軍人としての、金剛不壞の大信念は、透徹せる、生死觀からでなければ、決して生れるものではない。西郷南洲は腹の出來た人として崇仰されてゐるが、南洲の留魂碑には「生死何ぞ懼れん天の附與、願はくば魂魄を留めて皇城を護らん」と刻まれてゐる。南洲にあつては、生死の如きは、あたまた問題ではなかつた。たゞ死所をいづくに求めるかといふことについては、嚴として「魂魄をとめて皇城を護らん」といつた。この絶對の信念に生きたればこそ、南洲は、あれほどの偉人たり得たのだと云へやう。

『七生滅賊』の精神に發する死の訓練、これが、軍事教育の根本とされてゐる。大東亞戦で始めて試みられた落下傘作戦などにおいては、全員殆んど決死隊で、全滅を賭してゐる。その一人／＼は、何れも生還を期してゐない。日常の訓練が死の訓練である。即ち『生死一如』である。獨得の荒鷲魂も、そこに培はれる。眞に訓練されたものは、その行動に自信をもち、死中活を得る超人的働きをすることが出来る。前記、支那事變南苑空爆の華、鹽田機死の歸還などは全く超人的なものであつたが、大東亞戦争宣戰當日、昭和十六年十二月八日の比島爆撃に於ても〇〇一等兵曹（群馬縣出身）は、敵高射砲の破片で右眼がつぶれ、左眼出血で完全に視力を喪ひ乍ら、一種の勘で、盲目飛行をやり、洋上遙かに敵中を突破し〇〇基地に歸還した。これは平素の猛訓練が、不屈の攻撃精神となつて現れ、心眼で戦ひ抜いたものとして全將兵の感激を呼んだ。

半身切れ飛び乍ら歸還した荒鷲



これも陸鷲の話であるが、昭和十七年二月二十三日のことである。〇〇部隊の堤軍曹、ほか勇二士はジャバ島の山岳地帯を飛んでるうちに、ドシツといふ激動とともに全員はね飛ばされるやうな衝動を受けた。山頂の敵高射砲の一弾の破片が、愛機の胴中を突き破つたのである。

機は辛うじて水平をとり戻した。幸ひにも被弾箇所は胴體後部であつたが、バツクリと口をあけ、尾翼がやつとくつついてるだけであつた。一寸、二寸と後部は切れ落ちやうとする。油壓パイプも破壊され、機内は油でベツとりである。なんとかして基地まで行きたい。片翼歸還の樫村機の歸還が一瞬全員の腦裡をかすめた。喘ぎ喘ぎの難飛行によつて、つひに基地まで辿りついて着陸することが出来たが、その際の振動で辛うじてついてゐた胴體の後部は、ブツツリと切れ落ちてしまつた。平素の鍛錬した技術が神技となつて現れたものに外ならない。

大悟徹底した訓練のないものは、行動に自信がなく、武技をよくすることが出来ない。上に必勝の信念がなく、下に積極的勇進の氣象が生れない。上下と

も、不安と疑ひをもつて消極退嬰となり、與へられた命令（任務）を十二分にくして上級指揮官の意圖を積極的に達成しようといふやうな信念がなくなる。米英の軍隊が弱いのは、そこに原因がある。

また訓練がよく行届かないと、上下の信頼の精神がなくなり、上官は部下を信じないし、部下は上官を信頼しないといふことになる。そのやうなことでは、個人の攻撃精神を打つて一丸とする部隊的必勝の信念は到底生れない。そこで皇軍では、意志の鍛錬といふことと、訓練といふことについては、最大の注意を拂ひその練武を通じ、陸軍魂を培つてゐるわけである。

#### 四、平素から著實温和なる者は、

#### 戦場に於てよく旺盛なる攻撃精神を發露す

勅諭には『されば武勇を尙ふものは常々人に接するには温和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ』と御諭しになつてゐる。戦ひにおいて眞に勇敢に任務を



盡し、斃れて猶已まざる精神を發露した者の殆ど悉くが、平素は著實温和、一見婦女子の如く見える者か、あるひは孜々黙々と表裏なく、忠實に軍務に服したものか、または、何事にも常に進んで任務を果してゐた者である。

### 下半身粉碎されなほ前進を焦る

これは滿洲事變當時の話である。昭和六年十一月小興屯正面の敵を前に、通信網の撤収に著手した藤原利代吉上等兵（長崎縣出身）は、飛來する敵弾下に機敏な作業を完了して更に勇進しようとしてゐたところ、俄然地雷が爆裂し、他の二名の勇士と共に數メートル吹き飛ばされた。この様を見た一戦友は急遽かけつめたが藤原上等兵は下半身殆ど形なきまでに粉碎され、加ふるにその餘燼は彼の上衣に燃え移り、生不動となつて、慘狀正視するに堪へなかつた。ところが上等兵は、その重傷にも屈せず、たゞ追撃に遅れてはならぬといふ責任感から、敵方を望みつゝ、『残念だ、傷は浅い、何とかして俺を本隊と共に連れて行つてくれ』

と焦慮した。そのさまは、凄慘と崇高の極みであつた。彼は間もなく野戦病院車に移されたが、重傷の身をベットに横へ乍ら、傍らの看護兵に向つて『今何時か』と尋ねた。看護兵が『午後十時だよ』と答へた時、

「あゝ十時か。今頃戦ひはどうなつて居るだらう。戦友は健在か、もう一度還つて國家のために働かうと思つたが、今はそれも駄目になつた。天皇陛下の赤子と生れながら、皇恩の萬分の一の働きも出來ず、死するのは残念であります。何卒不忠の罪はおゆるし下さい」

と語り『天皇陛下萬歳』を三唱したまゝ、口を閉ぢてしまつた。たゞ時々進軍の歌を低唱するのみであつたが、看護の效なく、遂に息絶えた。

藤原上等兵は、郷里にあつてはよく青年訓練に勉勵し、成績はなか／＼よい模範青年であつたが、昭和五年六月入隊以來も、寡言實行、黙々として自己の任務に服し、いやしくも、己を飾らうとするやうなことなく、これがため、輕率な者には、賢いのか、愚かなのか、見わけがつかなくなつたと云はれる。然るに、彼



の最期たるや正に兵の龜鑑であつた。人の眞價は、難境に會つて始めて顯れる。

### 敵戦車を吹き飛ばした優さ男

大東亞戦の比島バタアン攻略において、僅か五名で敵の戦車七臺を分捕つたといふ痛快な武勇傳が戦線の話題となつたが、この端緒を作つたのは〇〇部隊の高橋三郎上等兵であつた。〇〇部隊は當時〇〇攻撃の最中であつたが、敵の大型戦車は側面二百メートルの地點から、猛烈な積載砲の火を吐き乍ら逆襲して來た。これを逸早く發見したのが高橋上等兵で、部隊が危いと直感した彼は、わが陣地二十メートルの地點に接近した敵戦車目掛けて、飛燕のやうに挺身した。手には〇〇地雷が抱かれてゐた。ところが不幸にも地雷は不發に終つてしまつたが、どうしてもやつけなければならぬと、戦車にしがみついた彼は、地雷に手榴弾を結びつけて、戦車の下に潜つた。ダーン、ダーン、手榴弾つきの地雷は見事に爆發した。

地軸を揺がすやうな大音響とともに、戦車は甲虫をひつくり返したやうにキヤタピラを宙に浮かせ、バツと空中にすつ飛んだ。よくやつた！ どつとあがる凱歌の中を、今度は田中一郎上等兵が、銃の棚條に日章旗をつけて顛覆戦車の上に押しよつた。戦車内では、まだ射つてゐる。『しつツこい奴だ』と呶鳴り乍ら、三木正男曹長、駒井勤之助軍曹、坂口武喜軍曹が銃劍一つの身軽さで顛覆戦車に飛びあがり、天蓋を開けて三名のアメリカ兵を掴み出すや、ピストルを向ける隙も與へない早業で『エイツ』とばかり刺殺した。ところが、續いて一臺、二臺と六臺の敵戦車が、逆襲して來た。『ヨシこれ、も肉弾をお見舞してやれ』と、今度〇〇砲も協力して、つぎ／＼炎上させる。擱坐、分捕るといふ調子で米戦車兵は一人残らず殲滅、かくて〇〇部隊は〇〇へ追撃することが出來たのであつた。當時の〇〇班長、矢野博准尉は『高橋上等兵は、平素はとてもおとなしい、どちらかと云へば女性的だつたのに、飛んでもない大手柄を立てた』と舌を巻いて驚いたといふが、これなども、平素から著實温和なるものはよく戦場にて旺盛



な攻撃精神を發揮するといふことの例證であらう。

### 五、武技に熟練せる者は攻撃精神旺盛

武技、なかでも射撃、劍術に秀でた者は、戰場に於ては實に勇敢に行動してゐる。敵彈雨注の間、あるひは單獨任務に服し、あるひは他兵に率先して前進し、突入してゐる、傳家の寶刀を振り翳して敵の死守する陣地に突入し、七人、八人と敵兵を斬り倒して、これを奪取した等をあげれば限りないほどある。

### 自轉車で追跡、敵二十數人を刺殺す

これは支那事變に於ける武勇談の一つ。昭和十三年十月廿一日午後、廣東攻略中の小池部隊は、新庄附近で突然三千の敵と遭遇し、これを撃破潰走させたが、この激戦の直後、小池部隊附快速隊の一員として、自轉車で戰場を駆け廻つてゐた山田健樹上等兵（大牟田市出身）は、逃げ遅れた敵が附近の森蔭や橋の下など

にゐるだらうと、本部隊進撃の安全をはかるため、單身諸所を捜査し、あるひは壕の中に突入したりして、かくれた敵を刺殺した。

同上等兵のやり方は、逃げる敵には自轉車で追撃し、敵の直後に達すると、右手に銃劍を握つて自轉車を乗り捨て、瞬間、敵を刺殺するといふ方法であつて、その手際は昔の劍術の名人よりも機敏で、後方から來た小池部隊長も、山田上等兵が、十數人を刺殺したまでは覺えてゐるが、それからは數へられなかつたといふほどであつた。新庄から五里の間、山田上等兵は、銃劍を右手に、ちやうど馬上の武士が槍をかざしてゆくやうに自轉車上に銃劍をかまへて進撃し、つひに二十數人を刺殺したものであつた。その後の掃蕩戦でも四人を刺殺し『劍銃の又右衛門』とよばれ、部隊全員の賞讃を浴び、部隊長から表彰されたが、この勇敢なる行動は、實に術力の自信から出發したところの旺盛な攻撃精神である。

### 剛勇隊長卅六人斬り



昭和十六年十二月十八日から十九日拂曉にかけて、香港ニコルスの攻防戦は激烈を極め犠牲も少くなかった。この時、香港島裏側の海岸から上陸し、ニコルス山麓まで攻めて行つた隊長岡田齊中尉（三重縣出身）は、僅か廿四歳の若武者であつたが、次々と仆れる部下を見て、

『よし俺が仇は討つ、部下の數だけきつと斬るぞ』

と叫び乍ら進め！進め！と號令しつゝ眞先に立つてニコルス山目指して突進、トーチカを飛び出して反撃せんとする敵を次ぎ／＼に斬り倒し、自分の所持した日本刀が斬れなくなると、今度は部下の軍刀を借りて突進し、曉の陽が山の頂上に輝くころ遂にニコルス山上に達したが、奇蹟的にも、身には、かすり傷一つ負はず、三十六人までは確かに斬つて捨てたが、あとは覚えがないといふ奮戦ぶり。で將兵一同を驚嘆させたのであつた。このやうな奮戦は、日頃劍術に秀でた自信ある者にして、始めてなし得る業であると云へる。

## 六、團結鞏固なる軍隊の攻撃精神

前述の如く、軍隊にあつては團結が生命である。上官は部下を信じ、部下は上官を信頼し、上下一體となつて、與へられた使命を十二分に盡し、上級指揮官の意圖を積極的に達することが、勝利の必須條件である。そこに個人精神を打つて一丸とする熱鐵の團結が生れ、部隊的必勝の信念が培はれる。全隊が火の玉となり敵陣に突入してこれを占領し、あるひは堅陣の突撃路を開き又は全隊全滅するも、なほ攻撃精神を捨てないといふやうなことは、この團結鞏固な軍隊なればこそ、出来るのである。

### 全滅するまで攻撃精神を捨てず

滿洲事變で錦西攻撃の古賀騎兵聯隊に糧秣を交附して歸途に就いた輸送監視隊松尾秀治中尉（熊本出身）以下隊員廿五名は、前塔屯に入らんとして、敵凡そ五



百に包圍された。五百に對し僅か廿五名、離脱しようとしても到底不可能と見られた。またたとへ離脱したとしても、西方僅か三里の距離にある古賀騎兵聯隊に直ちに危険を及ぼすおそれがあった。

『敵兵如何に優勢なりとも、日本男子の面目にかけて斷じて屈するな！ 全員一致團結して堂々戦ふあるのみ』

かう肚に決めた松尾中尉は側方の敵に對し各一部を當て、勇猛果敢に奮戦、多數の敵を殲したが敵匪約三百は、更に周圍の部落土民と共に、我が背後に迂回して攻撃して來たので、若干の兵を割いてこれに對抗させた。この時には早や、正面側面、背面と合せて約八百の敵の重圍に陥入り、孤立無援、非常な苦戦となつたが、從容として迫らず、益々旺盛な陸軍魂を發揮して力闘を續けたのであつた。かくして激戦苦闘四時間、彈丸は一發もなく撃ち盡し、雨霰のやうな敵彈の下にあつて全員身に數彈を受け乍ら、斷じて怯むことなく、最初は三角巾をもつて縋帶し、後には手拭、あるひは衣類を裂いて縋帶し、一致團結、勇猛果敢に奮闘し

たのであつたが、衆寡敵せず、多きは七彈、少きものも三彈を受け、一人殲れ、二人殲れ、つひに最後の五名は身に數彈を受け乍ら、今はこれまでと群がる敵中に白刃を振つて突入したのであつた。

最後の息の絶えるまで、廿五名があらん限りの力をもつて奮戦したといふことは數千年來培養、洗練されて來た大和魂の發露であるが、團結の鞏固さ、よく眞に斃れて後も已まざる陸軍魂の本領を中外に示し、皇軍の眞價を發揚したものとして、戦史を飾つてゐる。

### 七、難境における攻撃精神と平素の訓練

個人に於ても難局に處して始めて、その眞價を發揮する。軍隊にあつても、その試金石となるのは、難局に處する部隊的攻撃精神にある。次に滿洲事變の爆彈三勇士で有名な、廟巷鎮に歩兵として一番乗りをやつた、西村茂大尉（現少佐）の手記を掲げ、その眞精神に觸れることにしたい（なほこの手記は昭和九年事變



二周年記念日に於て發表されたものである)

吾等は斯く廟巷鎮に突入せり

一、突撃準備Ⅱ二月廿日の總攻撃に、下元旅團の尖兵を承はつた吾が小隊は、曉明四時、御勅諭『武勇の項』を奉唱しつゝ、勇躍した(吳淞南方張華濱を後に)。午前八時ごろ、白楊村の上空を遙かにかすめて飛來した友軍飛行機は『敵兵ナシ』の信號彈を發射しつゝ、上海方面へ飛去つて、折角の吾人の軍勢を大分挫いた感があつた(後でわかつた事だが敵は友軍飛行機を極端に恐れて非常に早くうまく假裝して掩蔽部に遁入したからだ)。でも尖兵長としては何等警戒搜索の手段を怠らず、姚家宅の敵を搜索すべく、原田軍曹の下士官斥候を出した。眼鏡に映る前方千メートルの吾が、可愛い斥候が、平時のそれとは比較にならぬ慎重さで今、姚家宅の部落へ警戒しつゝはいり込んだ。すぐ松尾一等兵が部落の端で手を振つた、帽子を、さうして、こちらへ報告に

走る。

『敵兵あり』の第一報だ。飛行機の通報で挫かれかゝつた血が熱くまた、たぎつた。

廟巷の部落前千四、五百メートルのところの敵の警戒部隊をなんの苦もなく撃退した。

ヒュー／＼と高い彈が幾度も頭上をかすめる。一昨日の將校斥候で二時間も敵と交戦した吾が小隊は、もうその時は、初陣ではなかつた。

彈は高い、先頭へ進む者には、彈はあたらぬとの自信を有する者の如く前進した。敵の剛膽なる狙撃兵は、尖兵が姚家宅に入るまで頑張つて吾らを撃つた。その流れ彈で、遙か後方の大隊本部のMG馬が斃れ、大隊の前進が一時停頓したのも事實だ。

大隊が展開すべく、尖兵中隊が(中隊長菅大尉)姚家宅の前端へ展開掩護をした時に、敵のうつ弾丸が竹林にこだましてバチッ! バチッ／＼バチッ!と、う



つ物凄さには、又小隊の兵が龜の子みたいに首をひっこめて地にヒレ伏したのは、初陣の將校斥候の時と何ら變りがなかつた。

こゝに特筆すべきは、敵を撃退後、その追撃の斥候派遣である。

『誰か斥候に行く者はないか』

小隊長の聲が、こだまする銃丸に和して響けども、答へる者もなかつた。演習であれば、獨斷と企圖心を要求する國軍の、こんな時、何んで黙つてゐよう。然るに今、敵はまだ二、三の狙撃兵が据然として、四、五百の高地（やや馬の背の如く高くなれり）より射撃しつゝあるのだ。

生命の貴重さと、本能への愛着と敵の企圖不明の當時に於て、小隊長自身でさへ、もしかすると、あの蔭から數萬の敵兵が雲霞の如く攻勢に轉するんではないか、さうしたら、今出る斥候は、あゝ風前の燈よりも儂いものだと妙に臆病な情勢よりする判断が湧きかけた。兵士の心裡を打つものは、更に大なるものがあつたにちがひない。

今まだ戦鬪の初つばなに殺しては惜しいと思つた傳令の松岡上等兵を單身斥候長として、敵情搜索を命じた。緊張し切つた空氣、正に午前十時五十分、

『松岡行け、他の者は掩護射撃の準備！』

この時、擲彈筒手坂田一等兵が、

『小隊長殿、私も行きます』

と叫んだ。その時の心強さ嬉しさは今もなほ忘れない。幸に敵は攻勢の企圖もなく、廟巷の堅へ逃げてしまつたので、松岡も坂田も無事その任を遂行した。友の屍を越えて突撃するのも快して人間業ではないが、この情況下に、その單身追撃斥候として出て行く男々しさは、實に見上げた勇敢さである。

かくして廟巷の堅を望み見たのは午後一時過ぎ、一連に白く光る鐵條網が果てしなく續き、後ろの部落と竹林の蔭から、絶えず執拗なる機關銃が火を吐くのであつた。

敵の銃丸の中に跳りながら土饅頭のカゲを横にはひつゝ、駆け抜けて敵前四百五



十メートルの金馬宅の部落に入つた。部落を通す銃丸の響きの凄さには今やられるか、今あたるかと、幾度首をすくめたであらう。見よ、魔の如く見えし廟巷の敵陣が、今手に取る如く窺き見えるではないか。

一線の鐵條網、その後ろには掩蓋をかけし散兵壕、所々に嚴として見える機關銃の銃口がフクロの目玉の如くすひつけられた時は、思はずぞツと首をすくめて『めがね』をそらしたのも事實だ。これより二十二日午前五時三十分の突撃のために不眠、部下を督勵しつゝ準備を急いだ。

敵の狙撃の巧妙なるは、吾が一兵に監視を命じた場合に、その兵が散兵壕に凭りつゝ眼鏡を持った手に敵弾は見事に貫通し去つて、その兵が悲鳴をあげたことである。弾は右手の小指の下から掌を縦に通じて母指の右下方に貫けてゐた。恐らく敵は監視兵の『めがね』を狙つてうつつたのであらう。

又丁度、二十日の夕方飯盒の飯に小隊の兵が集りかけたとき、どこを通したのか一弾は『カタッ!』といったと同時に奈良上等兵が、ウーンとのけぞつた。

敵弾は、丁度焼火バシを通したやうに奈良の大胸筋を貫通し去つたのである。この二人が總攻撃の最初の犠牲者であつた。

突撃實況Ⅱ如月の寒月が江南の天地を隈なく照す十六夜の月は、今夜の敵鐵條網破壊作業には非常なる困難を伴ふだらうと、中隊長とともに心配した。それがどうであらう、午後六時頃から空行きが變り、天候がおかしくなるではないか。ああ曇つてくれたらどんなにかと念じた甲斐あつてか、天祐! 眞に天祐と叫ばざるを得ないのだ。午後八時ころからは、小雨さへも交つて、皎々たる明月がおぼろにかすんだではないか。

伊藤少尉を長とする突撃準備線の經始班が、これに乗じて飛出した。相變らず敵は遠慮會釋なく弾をうつ。午後九時ころ最後の突撃準備壕の敵前百メートル附近(晝間からアノ線、アノ所と決めた位置)に經始がすんだ。

余の第一小隊が丁度百メートル前の堆土を右翼の據點として、午後十時、その最後の突撃壕を作るべく推進した。右方、周行方向より敵の側射がイヤに薄氣味



悪く、最後の突撃陣地までとりつくまでに、今ヤラレルか、今ヤラレルかと實際ヒヤ／＼した。小隊の兵はすぐ隠密作業を初める。弾の中で日頃習った通りに初め寝そべり乍ら、段々に個々の掩體から立射へ、ついで一連の散兵壕を二時間たつかたゝぬ間に作つてしまつた。

江南とは云へ、二月の寒夜は恐らく零下二三度であつたらうに、皆兵士らは汗だく／＼で一寸も手を休めない。

『オイ矢田部（一等兵）少し休んだらどうだ、くたびれたらう』  
といふと、

『いや何ともありません』

と云ひながら工事をつゞける。可憐にしてまた勇ましさよ。實際タマの中の能率は生命の危険を賭けてゐるだけに人間業以上である。

掩體は出來た、第三小隊も左へ連繋して工事を終つたらしい、中隊主力も到着した。時に午前零時卅分ころである。残されたのは突撃路の開設のみだ。丁度こ

の頃雲間の月は、はれかゝり、さつき天祐を叫んだことが無駄になりかけた。

中隊は各小隊から下士、あるひは上等兵を長とする三組の破壊班を選定して伊藤少尉が、これを統轄して、愈よ敵前數メートルの鐵條網を切りに匍匐して前進し出した。あゝ誰かこの雨と降る敵弾の中に生還を期するものがあらうか。しかもそれは敵前數メートルのところの、月光いやに凄き鐵條網の破壊作業においてである。

中隊長菅大尉とともに、無事に何卒早く、一本でもいゝから切つて來てくれ、ばいゝと神に祈つたのも、この時だつた。左前方で、

『やられました』

と云つて引づつて歸つたのは、第三小隊から出た破壊班の上等兵が、右肩から左胸部へ貫通銃創を受けて戦友に運ばれた。敵前に外壕（深さ十メートル五十程度の乾壕）があつて、それを越して腹ばひながら敵鐵條網に近づかんとした刹那、敵兵のために狙撃せられた。戦友斃れて、その屍をふみ越えて切るべく、あまり